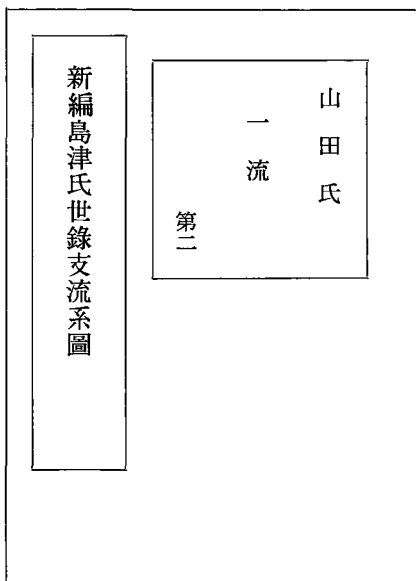


(表紙)



山田氏系圖第二

『寫在山田七郎右衛門久通』

○谷山五郎入道覺心与大隅式部孫五郎入道道慶相論  
 薩摩國山田・上別符所務以下事、覺心則背度と御  
 下知、身代錢貨以下色と損物桑竿失等、不糺返之  
 由訴之、道慶亦百姓等檢斷過新物事、任被仰下之  
 旨、欲返与百姓等之處、覺心依致勢、令不請取云

と者、任先下知、渋谷白男河小太郎入道相共、可  
 被沙汰渡兩方也、仍執達如件、

正和四年七月十六日  
(政頭)  
 掃部助在御判

加世田別符地頭代

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一八五号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津大隅式部孫五郎入道道慶謹言上

薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭所務以下  
 事、

副進  
 『裏ニ有之』(花押)

一通 関東御下知要段 弘安十年十月三日

一通 鎮西御下知要段 正安二年七月二日

一通 年記請所狀案  
同四年十月廿日  
 自明年三月可爲請所由事

右、地頭職者當郡司五郎入道覺信非分押領之間、  
 道慶于時  
 宗久就訴申子細、云関東、云鎮西、令拜領度  
 と御下知之間、多年知行之後、去正安四年為請所

限拾捌ケ年、所去給覚信也、仍年記過之間、自去年擬所務之處、覚信構事於縦横、及違乱之条無道也、所詮、年記違期之上者、早任傍例、被停止覚信濫妨、為糺給押領物等、恐と言上如件、

元亨二年十一月 日

〔貼紙〕  
大隅式部孫五郎訴狀案

〔本文書ハ「旧記雜錄前編一」一三二四号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道と慶申、薩摩國谷山郡山田・

上別符兩村所務事、訴狀副具如此、為有其沙汰、

早可參對、仍執達如件、

元亨二年十一月廿五日 修理亮〔英時〕〔花押〕

谷山五郎入道殿〔覚信〕

〔本文書ハ「旧記雜錄前編一」一三二五号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○御ゆつりの案寫進候、上野平九郎入道事、いくらも御教書なされて候しハ、さつまへ進候了、只今み候へとも、ゑらひいたさす候、これそみいたして候進候、てきたいのふんハ、うけふみにみえて候、恐と謹言、

十二月十一日

〔酒匂〕  
本性〔花押〕

到元亨二十二年十一月、ほんしやうはうしひつの狀也

〔本文書ハ「旧記雜錄前編一」一三二三号文書ト同文ナリ〕

『寫在山田七郎右衛門久通』

○谷山五郎入道覚信代俊忠重言上

薩摩國谷山郡内山田・上別府惣地頭式部孫五郎入道と慶、令違背度と御下知、不糺返質人并桑竿失及錢貨以下色と損物等上者、任先傍例、欲宛給別納御下知子細事、

右、如陳狀者、檢斷以下質人等事、所犯難遁之條、

云生口白狀等、云證據、證據顯然之處、先御沙汰雖令參差、道慶存後訴、任被仰下之旨、現在百姓等仁令糺返之處、或稱請取質人等之咎、追取身代等、或不可請取彼損物之由、令勢命被書起請文於百姓之條、覺信造意之企無比類者也云云、此條先御沙汰令參差之由、令存知者、可申越訴之處、無其儀乍送多年、今更御沙汰參差之由、令申之條、上裁忽緒之咎難遁者哉、且於令糺返彼質人以下損物等者、以何故不可請取之由、覺信加勢命、可書起請文於百姓等哉、爰御下知違背咎難遁間、稱百姓等狀構出之歟、正文披見之時、可申子細也、將又、不糺返損物等之由、道慶自稱之上者、御下知違背之條承伏畢、同狀云、先御沙汰之時、如此等子細被究淵底、任度々御下知違背之實、為向後傍輩、可被經徵肅御沙汰之處、依無其儀、覺信挿私曲、令張行之條、爭可通其咎哉云々、此條覺信令違背何御下知哉、可立申所見、道慶令違背數箇度

御下知、不糺返質人等之間、所訴申也、積習于自身所行、覺信背御下知之由申付不實之條、無謂之次第也、同狀云、桑竿失由事、不覺悟之所見何事哉云云、此條桑竿失事、可糺返之由被成兩方之正安二年御下知明鏡之處、道慶背自身帶持御下知明文、不覺悟之由、申異儀上者、御下知違背之條、語下令露顯畢、爭可遁罪科哉、同狀云、山田・上別符地頭所務可令請所之旨、頻覺信懇望之間、就和談令承諾之處、伺道慶在國之隙、致紆訴之條、言語道斷也云云、此條當村請所事、道慶強望申之間、令請之處、覺信懇望之由、令申之條存外也、道慶違背度々御下知、不返与質人等之間、自請所以前連々所訴申之也、依請所儀、此訴訟可令默止歟、所詮、被召出道慶所帶契約狀之時、可止訴訟之由載之否、可為顯然者也、次召給本解可進陳狀云云、此條多年被經御沙汰、被成御下知之處、今更可被召出本解之由令申之條、比與也、爭可有御

許容哉、然則且任御下知違背承伏之實、且依先傍例、為宛給別納御下知、重言上如件、

元亨二年十二月 日

『續目裏判』 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三三〇号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

『上書ニ有之 穎娃次郎左衛門尉請文』

○嶋津式部孫五郎入道と慶申、薩摩國伊集院嶋廻田地事、就先度御教書、相觸世と彦三郎忠行候之處、以去年十二月七日捧請文候之間、令進上候畢、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

『名乘之裏ニ有之』 (花押)

元亨三年三月四日

左衛門尉久純

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三三〇号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎〔此間欠〕慶申、薩摩國伊集院嶋廻田地事、任被仰下旨、相觸穎娃次郎左衛門尉候

之處、請文如此候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元亨三年五月三日

『名乘之下裏ニ有之』 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三三二号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○薩摩國中村兵衛四郎入道了願申、原田垣本領家年貢事、今月五日御教書・副訴狀如此候、給御請文、可令注申候、恐と謹言、

元亨三年六月十四日

平成貞(真祿) (花押)

謹上 大隅式部孫五郎入道〔道慶〕

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三四八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

『上書ニ有之 谷山五郎入道請文』

○式部孫五郎入道と慶掠申候當國〔此下欠〕郡山田・上別符兩村内宮園以下同村所務〔事〕、〔今カ〕年三月廿

廿一日・六月三日両通御教書案并「欠」三日御催促

狀等、今月八日到来、謹拝見候、「欠」此條當村惣

地頭所務條と事、為衾江「欠」左衛門尉奉行、訴申

道慶之間、被差「欠」郡司於御使候之處、不付本解

指違「欠」使節御教書候之條、奸訴一事兩様（各難カ）「欠」遁

候哉、此等次第相親候秋次三位房（見知カ）「欠」上者、可令

明申候、以此旨、可有御披露（候カ）、「欠」恐惶謹言、

元亨三年七月廿五日 沙弥覚信（此判裏ニ有之）（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編一」一三五〇号文書ト同文ナリ）

『正文在山田七郎右衛門久通』

○山田村讓狀為類書留置候、沙汰落居候者、可返進

候、恐と謹言、

『元亨三』「押札ニ有之」

八月四日

忠宗（花押）

山田とのへ

そうりやうしまつのしもつけとのほうみやう

道義御事、谷山の御さたの時、るいしよのた

めに、山田のもんしよを御かり候御狀也、な

のり御はんかやうに候也、

（本文書ハ「旧記雜録前編一」一三六二号文書ト同文ナリ）

『正文在山田七郎右衛門久通』

○谷山郡山田村御讓狀事、披露候之處、御沙汰落居

以後、可進之旨、可申之由候、恐と謹言、

九月十一日 本性（酒匂）（花押）

山田殿

到元亨三九十一、これハ本しやうはうのしひつ也、しまつ殿御時、

（本文書ハ「旧記雜録前編一」一三六八号・一三七四号文書ト同文ナリ）

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎入道と慶申、當國谷山郡山田・上

別符両村内宮園以下同村所務事、任被仰下候之旨、

相觸谷山五郎入道候之處、捧請文候、謹令進上候、

以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

『名乗之下裏ニ有之』 (花押)

元亨三年九月廿八日

〔淡谷〕  
平重基請文

『上書』  
淡谷新平次請文 元亨三十二

(本文書ハ、「旧記雜錄前編」一三三七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○御文委細承了、おほせをかふり候山田北別符の御  
ゆつり狀の正文事、御内ニ進有之候、たうし御勞  
のおりふしにて候あひた、申いたして進せず候、  
このうち申て進へく候、恐と謹言、

九月廿日

沙弥津性 (花押)

(本文書ハ、「旧記雜錄前編」一三三七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎(マシ) 法師法名道慶申、薩摩國上野平  
九郎入道禪意押取農具并牛馬事、

右、雖為守護人奉行之篇、退座之間、所有沙汰也、  
而給黎院内藤弁以下田地者、道慶相傳知行之處、  
禪意無故押取牛壹頭・馬壹疋并農具等、成勸農妨  
之間、藤弁坪四段卅步、宇治山崎貳段、桑坪壹段、  
小布治田卅步、下地不作訖、可被糺返牛馬以下之  
由、道慶依申之、度と尋下之上、以頼娃二郎左衛  
門尉久純加催促之處、如久純去年七月廿一日起請  
文者、禪意不及請文云と者、難遁違背之咎歟、然  
則於牛馬以下者、可令糺返于道慶者、依仰下知如  
件、

元亨四年三月廿日

修理亮平朝臣(英時) (花押)

(本文書ハ、「旧記雜錄前編」一三九五号文書ト同文ナリ)

『在山田七郎右衛門久通』

○谷山五郎入道覚信代俊忠謹弁申

欲早被停止式部孫五郎入道と慶濫訴、被行作奸(謀脱カ)  
訴罪科、薩摩國谷山郡内山田・上別符両村惣地

頭職活却事、

副進

一通 道慶放券狀正安五年三月廿三日

右、如道慶濫訴狀者、當郡司覚信非分押領之間、道慶就訴申子細、云関東、云鎮西、令拜領度と御下知云云、此條道慶・覚信等、相並給御下知之間、非道慶一人所給儀之上者、不及委細歟、同狀云、正安四年為請所、限拾捌ヶ年、所去給覚信也、年記過之間、自去年擬致所務之處、覚信及違乱之條無道也、年記違期之上者、被停止濫妨、欲糺給押領物云云、此條希代奸謀申狀也、以去正安五年三月廿四日、為錢貨佰貫文米拾石代、令入置彼地頭職於本錢返之條、道慶活券明鏡也、而稱正安四年十月廿日自身活券狀案文、或引上年記、或限拾捌ヶ年活渡之由掠申之條、無比類謀計也、云奸訴、云謀作、其咎争可廻時日哉、然早被経急速御沙汰、任被定置之旨、為被行罪科、粗披陳言上如件、

268

元亨四年六月 日

『續目裏判』(花押)

(本文書ハ、旧記雜録前編一、二三九号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 遂申候、故殿御借狀一見仕候了、是非文書撰候て可申之由仰候、重恐と謹言、

蒙仰候、山田村・上別符讓狀正文事、披露仕候之處、故入道文書少と者三郎兵衛尉方にも候、是にハ候やらん、不存知候、文書中撰候て可申之由仰候、恐と謹言、

七月二日 藤原忠幸(花押)

謹上 山田殿御返事

(本文書ハ、旧記雜録前編一、二四〇号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 中村兵衛四郎入道了願申、薩摩國伊集院原田垣本

267

同年貢事、去一日御教書・重訴狀如此候、早任被仰下候之旨、承左右、可注申候、恐々謹言、

元亨四年十一月十五日 平為忠(花押)

謹上 式部孫五郎入道殿

(道慶)  
(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四一三号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 嶋津式部孫五郎法師法名与石谷右衛門三郎法師

法名道有相論、薩摩國伊集院三小山原内中原与良金

知行原堺事、

右、就相論、擬有其沙汰之處、今年二月廿六日兩方出和与狀畢、如道有狀者、於良金知行原者、道慶領掌之、至中原者道有相傳之、而就彼堺、雖及上訴、以和与之儀、自富松北中野猿走、定于向嶋北上鼻崎畢、向後互(可脱力)不有異論云々、道慶狀旨趣同前者、此上不異儀(及脱力)、彼地武家成敗之条、前々其沙汰畢、然則、相互守彼狀、可領掌矣者、依仰下知

如件、

元亨四年十一月廿九日 修理亮平朝臣(英時)(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四一四号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』

○ 和与

谷山五郎入道覚信与薩摩國谷山郡内山田・上別符両村地頭式部孫五郎入道道慶相論、當村所務條條沙汰事、

- 一 両村内野島所當以下地頭得分等覚信令抑留由事、
  - 一 同村内宮蘭并久吉蘭桑代以下地利物、覚信同令抑留由事、
  - 一 同村地頭職請所過年記否、為本物返否相論事、
  - 一 寄事於領家所務、道慶令抑留郡司得分由事、
  - 一 道慶令抑留質人并錢貸以下損物等由事、
- 右、於両村者、去弘安十年十月三日雖被成関東御下知、就所務相互申子細之間、正安二年七月二日、



道慶於鎮西重預御裁許了、而不被糺返所被載彼御  
 下知之野島以下地頭得分等之間、連連雖訴申、云  
 地頭綺、云當村條條訴訟、以和与之儀、一向令停  
 止之、有限之加徵米斗定斗拾伍石、但如正安三年  
 取帳目錄者、雖為拾肆石參斗捌舛、就和与拾伍石  
 定畢、次野島地利物參石并麦地子壹石伍斗是等者  
 此外檢斷以下色色得分等代錢合拾肆貫文、每年十  
 一月中七無未進可被致沙汰之由、被契約之間、止  
 地頭綺者也、但過約月者、地頭職如本可知行之、  
 次於地頭米者、任先例、於郡司所倉可被勘渡、至  
 野島并麦所當等者、於當村可直納之、次件得分等  
 者、伊集院伊作兩所之間、以當村百姓可被運送、  
 若背此狀致違乱者、自今年丑至于辰年、令返与米  
 納四ヶ年分、可知行也、此上者更不可有改变之儀、  
 仍為後證龜鏡、和与狀如件、

正中二年六月一日

沙弥道慶在判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四四二号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 和与

薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭式部孫  
 五郎入道道慶与谷山五郎入道覚信相論、當村  
 所務條條沙汰事、

- 一 寄事於領家所務、道慶令抑留郡司得分由事、
- 一 道慶令抑留質人并錢貨以下色色損物等由事、
- 一 兩村内野島所當以下地頭得分等覚信令抑留由事、
- 一 同村内宮園并久吉園桑代以下地利物、覚信同令抑留由事、
- 一 同村惣地頭職為本物返否、過請所年記否相論事、
- 右、於兩村者、去弘安十年十月三日、雖被成関東御  
 下知、就所務相互申子細之間、正安二年七月二日、  
 覚信於鎮西重預御裁許畢、而不被糺返所被載彼御  
 下知之桑竿失以下得分等之間、連連雖訴申之、以  
 和与之儀、一向停止惣地頭綺之由、被契約之間、  
 止當村條條訴訟、有限之加徵米斗定斗拾伍石、但

如正安三年取帳目錄者、雖為拾肆石參斗捌舛、就  
和与拾石定之畢、次野島地利物參石并麦地子壹石  
伍斗是等者、此外檢断以下色色得分等代錢合拾肆  
貫文、每年十一月中無未進、於當村可致弁、於地

頭米者、任先例、於郡司所倉可令勘渡也、次至野  
島并麦所當等者、於當村可被直納之、次件得分等  
者、當國伊集院伊作兩所之間、以當村百姓可運送  
之、但自今年丑至于辰年四ヶ年分來納可被取之由、  
被申之間、致其沙汰畢、若背此狀、十一月中令違  
期者、如本可被知行所務、此上者更不可有改変之  
儀、仍為後證龜鏡、和与狀如件、

正中貳年六月一日 沙弥覚信(花押)

『右之裏書』

為後證、奉行人所加署也、

正中二年十月十日

『齋藤左衛門三郎』

藤原(花押)

『大田孫七能信』

三善(花押)

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」一四四三号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津孫五郎入道と慶申、牛馬以下事、重申狀如此、  
上野平九郎入道禪意背度と下知狀云と、尋實否載  
起請之詞、可被注申、仍執達如件、

正中二年七月三日

(実時)  
修理亮(花押)

智覽又四郎殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」一四四四号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭大隅式部

孫五郎(マ) 法師法名 与谷山五郎資忠法師法名 覚信法名 相

論當村所務條と事、

右、就訴陳狀、擬有其沙汰之處、今年六月一日兩  
方出和与狀訖、爰如覚信狀者、和与薩摩國谷山郡  
内山田・上別符兩村地頭式部孫五郎入道と慶与谷

山五郎入道覚信相論當村所務條、沙汰事、一寄事於領家所務、道慶令抑留郡司得分由事、一道慶令抑留質人并錢貨以下色、損物等由事、一兩村內野皇所當以下地頭得分等覚信令抑留由事、一同村內宮園并久吉園桑代以下地利物覚信令抑留事、一同村惣地頭職為本物返否、過請所年紀否相論事、右於兩村者、去弘安十年十月三日、雖被成閔東御下知、就所務相互申子細之間、正安二年七月二日、覚信於鎮西重預御裁許畢、而不被糺返被載彼御下知之桑竿失以下得分等之間、連、雖訴申、以和与之儀、一向停止惣地頭綺之由、致契約之間、止條と訴訟、有限之加徵米地頭米斗定拾伍石、但如正安三年取帳目錄者、雖為拾肆石參斗捌舛、就和与拾伍石之由定之畢、次野皇地利物參石并麦地子壹石伍斗是等者外野皇、此外檢断以色と得分等代錢合拾肆貫文、每年十一月中無未進於當村可致弁、於地頭米者、任先例、於郡司所倉可令勘渡也、次至野皇并麦所當

274

等者、於當村可被直納之、次件得分等者、當國伊集院・伊作兩所之間、以當村百姓可運送之、但自今年年丑至于辰年四箇年分來納可被取之之由、被申之間、致其沙汰畢、若背此狀、十一月中令違期者、如本可被知行所務、此上者更不可有改變之儀云云、如道慶狀者、子細同前者、此上不及異儀、守彼狀、相互可致沙汰之狀、依仰下知如件、

正中二年十月十日 修理亮平朝臣(英時)(花押)

『續目裏判』(花押)

(本文書へ「旧記雜錄前編」一四五三号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津大隅式部孫五郎入道と慶申、薩摩國上野平九郎入道禪意背度と下知狀、不弁農具并牛馬事、請文披見畢、所詮、於論物者、任先下知、可沙汰渡道慶、次禪意違背咎事、所被分召所領五分壹也、仍執達如件、

嘉曆二年十二月十六日 (英時) 修理亮 (花押)

智覽又四郎殿 (忠世)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四九四号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道、慶重言上

薩摩國御家人上野平九郎入道禪意背數ケ度御下  
知、不糺返農具并牛馬等罪科事、

副進 一通 追御下知數通略之、

右、違背之重科至極之上者、任傍例、為預御裁許、

重言上如件、 『裏ニ有之』 (花押)

嘉曆四年正月 日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五〇四号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎入道、慶申、薩摩國上野平九郎入  
道禪意背不知狀、不弁農具并牛馬由事、先度被仰

了、不日守彼狀、可沙汰渡也、仍執達如件、

嘉曆四年三月五日 (英時) 修理亮 (花押)

智覽又四郎殿 (忠世)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五一〇号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎入道、慶申、上野平九郎入道禪意

背下知狀、不弁農具牛馬事、請文披露畢、於論物  
者、不日可糺渡、至罪科者、所被分召所殘之所領

四分壹也、仍執達如件、

元徳元年十二月五日 (英時) 修理亮 (花押)

智覽又四郎殿 (忠世)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五三八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 和与

薩摩國伊集院内田蘭等事

右、當院内式部孫五郎入道道慶知行田地壹町肆段

内一丁号馬渡、貳段柳田内并蘭貳ヶ所内一所号古江蘭令貳段号世戸口

取本錢返質券之處、被致煩之間、雖經上訴、以和

与之儀、此内田地四段柳田内貳段世戸口貳段并蘭一ヶ所号源永

代被去与之上者、永所止訴訟也、殘田地一町号馬渡

・蘭壹ヶ所号古江蘭者、道覚不可相綺之、道慶如元可

有知行者也、若背彼狀、相互致違乱煩者、可被申

行其咎也、仍和与之狀(如脱カ)

元徳元年十二月九日 沙弥道覚代重俊(花押)

『裏書』 為後證、奉行人所加署判也、

元徳元年十二月廿五日

縫殿允(花押)

(大田能信)  
三善(花押)

〔本文書ハ「旧記雜録前編」一五四〇号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部又三郎入道と覚与嶋津式部孫五郎入道と

慶相論薩摩國伊集院内田蘭事、

右、就訴狀尋下之處、両方和与畢、如道慶今月九日

狀者、伊集院田地四段柳田・世并蘭壹所源太者、所去

渡道覚也、有限公事隨分限可勤仕云々、如道覚代重

俊同日狀者、田地壹町馬渡蘭壹所古江者、如元道慶

可知行之間、不可相綺云々、此上不及異儀、守彼狀、

相互可領知者、依仰下知如件、

元徳元年十二月廿五日

修理亮平朝臣(英時)(花押)

〔本文書ハ「旧記雜録前編」一五四二号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○去年十二月十六日御教書今年三月五日到來、謹拝

見仕候事(畢)

抑嶋津式部孫五郎入道と慶申、薩摩國伊集院用丸

名内原田垣本證文事、道智助久等在津之時、彼文

書之案三通所持之間、進覽之、於正文者、仰于當

名惣領主大隅助三郎(正統)入道助久跡、可被尋下候歟、此外文書等事、不令存知候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元德二年三月十四日

(伊集院)  
左兵衛尉助久請文

『名乘裏ニ在之』(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五四六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○上野平九郎入道禪意与大隅式部孫五郎入道と慶

相論薩摩國伊集院土橋名一分警固用途事、

右、禪意則於福山田・馬渡・嶋廻田地三町余者、

為久得名内、惣領主備前房隆賀知行之處、彼所役

等無沙汰之間、被經御沙汰之刻、隆賀依不合期、

禪意先就経替之、於庶子分警固用途者、可為禪意

計之由、隆賀出狀畢、而庶子道慶抑留彼所役之上

者、可預裁許之由訴之、道慶亦件田地等非久得名

内、為土橋名内各別知行之處、以他名所役掠申之

條、無謂之旨陳之、仍訴陳一問答之後、禪意為訴人依不終沙汰之篇、雖遣還召文無音之間、以智覽院郡司忠世加重催促之處、如今年六月三日忠世請文者、道慶申警固用途事、任被仰下之旨、雖相觸禪意、不及散狀云云起請詞略之者、禪意以久得名所役、懸申土橋名内田地之條、背理致歟、就中、帶惣領隆賀契狀之由、雖申之、不出帶正文之間、旁為胸臆之上、為訴人違背召文之條、不遁難泐之咎歟、然則所弃捐禪意訴訟也者、依仰下知如件、

元德二年十一月十六日

(英時)  
修理亮平朝臣(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五六八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎入道と慶申、薩摩國上野平九郎入道禪意不糺返農具以下事、請文披露畢、所詮、禪意背度と下知狀無沙汰云々、於論物者、守彼狀、

可糺渡、至違背之咎者、先度被分召所領五分貳之間、參相殘畢、重壹分所被召上也者、仍執達如件、

元德二年十二月十日

(英時)  
修理亮 (花押)

智覽院又四郎殿

(忠世)  
(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五七二号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○請取 日置伊作御文書正文等事、

合

一通 正應五年十一月卅日伊作庄三ヶ名和与狀正

文

一通 同六年正月十三日三ヶ名和与御下知正文但

關東也、

一卷 日置伊作下地中分狀正文

一卷 伊作日置下地中分ニ付天 關東御下知正文

一卷 日置北郷内吉利名御下知但續西也、  
元德元年十月五日

一通 伊作庄坂本刑部房澄圓申公事用途御下知正

文元德二年二月廿九日

一通 比志嶋孫太郎入道佛念檢断和与狀正文四月

廿三日

一通 就彼沙汰鎮西御下知正文嘉曆四年七月五日

右、御文書等正文、自山田殿所請取也、但山田殿

文書正文請取ハ、以後日撰出之、可返遣之狀如

件、

元德三年正月八日 教日 (花押)

道性 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五七三号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 大隅式部孫五郎宗久法師法名  
道慶与谷山五郎資忠法

師法名  
覺信相論薩摩國谷山郡内山田・上別符両村地

頭所務事、

右、訴陳之趣子細雖多、所詮、道慶則覺信為當郡

と司、背關東御下知狀等、抑留地頭得分之間、訴

申之刻、依致懇望、令和与所務、去正中二年十月十日兩方預下知訖、而覚信背裁許、抑留地頭得分米錢之上者、任契狀、如元可致所務之由訴之、覚信亦彼得分物可致沙汰之由、雖相觸道慶、為破和与、依不請取之、經上裁、申成御教書之處、覚信抑留之由、掠申之條、奸謀之次第也、所詮、任下知狀、可致弁之旨陳之者、如覚信正中二年六月一日和与狀者、云加徵米、云檢断以下得分物、每年十一月中於當村、可致沙汰、若背此狀、十一月令違期者、如元可被知行所務云々、任彼狀、十一月中可請取件得分物之由、雖相觸覚信、不及叙用之間、擬訴申之刻、覚信為塞後訴、道慶訴訟以前雖申賜御教書、不終沙汰之篇、經兩年之上、薩州与博多行程為十余日之處、元徳元年十一月以後十二月十一日覚信捧訴狀於賦方、同十六日申給御教書訖、兼日企奸訴之間、日数不幾敷、是則令抑留地頭得分、道慶及訴訟之時、先立經上裁之由、

為遁申也、就彼御教書、覚信奸訴弥令露頭之旨、道慶申之處、任契狀、可致弁之由、雖相觸道慶、為破和与、不請取之、過約月之間、訴申之上者、無抑留儀之旨、覚信雖稱之、十二月十六日申賜御教書之後、迄于翌年四月、為訴人、不終沙汰之篇、送兩年、道慶訴訟以後、始而令出帶訖、覚信奸曲為顯然之間、不可依彼御教書敷、而隨契約得分物十一月中不致弁者、如元可被知行所務之由、載覚信契狀之上、被引載彼文句於下知狀訖、覚信地頭得分抑留之時、可悔返和与之條勿論敷、然則、於彼兩村者、任正中下知并覚信契狀等、道慶如元可致所務也、次相論以後地頭得分物事、同可令糺返矣者、依仰下知如件、

正慶元年十二月十日

(英時)  
修理亮平朝臣 (花押)

『續目裏判』 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一六一六号文書ト同文ナリ)



『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道と慶与谷山五郎入道覚信相論  
薩摩國谷山郡内山田・上別符地頭所務事、被裁許  
訖、早渋谷又次郎入道相共、守下知狀、可被沙汰  
付彼所務於道慶也、仍執達如件、

正慶元年十二月十日 修理亮(英時)(花押)

渋谷新平次入道殿(重基)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一六一八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道と慶与谷山五郎入道覚信相論  
薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭所務事、被  
裁許訖、早渋谷新平次入道相共、守下知狀、可被  
沙汰付彼所務於道慶也、仍執達如件、

正慶元年十二月十日 修理亮(英時)(花押)

渋谷又次郎入道殿(重清)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一六一七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道と慶申、薩摩國谷山郡内山田  
・上別符兩村地頭所務事、重申狀如此、守下知狀、  
可沙汰付彼所務於道慶之由、先度被仰之處、不事  
行云、早速可申左右也、仍執達如件、

正慶二年正月廿日 修理亮(英時)(花押)

渋谷新平次入道殿(重基)

渋谷又次郎入道殿(重清)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一六二〇号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道と慶申、薩摩國谷山郡内山田  
・上別符地頭得分物事、重申狀如此、谷山五郎入  
道背下知狀并度と催促無沙汰云々、早相尋實否、  
載起請之詞、可注申也、仍執達如件、

正慶二年潤二月三日 修理亮(英時)(花押)

渋谷新平次入道殿(重基)

〔本文書ハ「旧記雜録前編」一六二三号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道、慶申、薩摩國谷山郡内山田

・上別符地頭所務事、重申狀如此、守下知狀、可

沙汰付彼所務於道慶之由、被仰渋谷新平二入道・

(重清)

同又次郎入道等之處、不事行云々、早相尋實否、

(載脱之)

起請之詞、可注申也、仍執達如件、

正慶二年潤二月三日 修理亮(英時)(花押)

山門郡司入道殿

〔本文書ハ「旧記雜録前編」一六二四号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○武藏修理亮英時誅伐時軍忠事、申狀給候了、仍執

達如件、

元弘三

六月八日

(貞宗)  
具簡(花押)

嶋津式部孫五郎入道殿

〔本文書ハ「旧記雜録前編」一六四〇号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎宗久法師法名道慶謹言上、

欲早被経御 奏聞、浴恩賞、施弓箭面目、武藏

修理亮英時誅伐合戰勲功事、

右、依 綸旨、去五月廿五日被誅伐英時之時、道

慶同子息諸三郎忠能相共馳向于先陣、致合戰、忠

能令生虜英時從人次郎兵衛尉畢、仍嶋津上總入道

并大友近江入道被遂檢見、先度已所被注進也、然

早被経御 奏聞、浴恩賞、且特施面目、且弥為抽

忠勤、恐々言上如件、

元弘三年 七月日

此事、以早打之便、宜令注進候了、可被存

知其旨候、 道鑑(花押)

〔本文書ハ「旧記雜録前編」一六四九号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ (高師泰)  
花押

鳴津大隅式部孫五郎宗久法師法名道慶為御方致軍忠、所馳參也、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年七月十日

沙弥道慶

『名之下裏ニ有』 (花押)

進上 御奉行所

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一六五三号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 嶋津式部孫五郎入道ノ慶、依世上騒乱事、自薩州去月十六日令馳參候、以此旨、可有御披露候、恐

惶謹言、

元弘三年八月廿日

沙弥道慶上

『名之下裏ニ有之』 (花押)

進上 御奉行所

承了(足利尊氏)  
(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一六六三号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』 『上書ニ有之  
申狀案教信請文』

○ 嶋津式部孫五郎入道ノ慶謹言上、

欲早谷山郡司五郎入道覚信代教信預武家御下知

并 勅定違背咎、捧請文上、被書下彼狀於銘、

薩摩國谷山郡山田・上別符両村地頭所務同得分

物等事、

右、巨細先進言上、事舊訖、爰就帶道慶武家御下

知、於決断所被経重ノ御沙汰之刻、覚信代教信恐

于 勅定違背之咎、捧請文之上者、欲被書下彼狀

於銘、但教信云所務如元可返付之篇、云抑留得分

物可糺返之段、令承伏之上者、雖書載不實於請文、

為枝葉之間、不能委述、若及御不審者、追可令言

上也、仍恐ノ言上如件、

建武元年六月 日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一六九六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○薩摩國谷山郡内山田・上別符両村惣地頭所務事、

式部孫五郎入道と慶可破正中二年和与狀之由、掠

給鎮西下知狀之間、件裁許為非據之条、去年於決

断所御沙汰訖、而於和与契約得分物者、任先例、

於郡司所倉可勘渡之由、載和与狀之處、以前五ヶ

年分内半分於京都可沙汰之由、被仰出間、在京計

略依為難治、彼両村惣地頭所務如元可返付道慶之

由、去年十二月十七日捧請文之處、今月十三日於

決断所如被仰出者、於惣地頭所務者、可返付道慶

云云、以前五ヶ年惣地頭得分物、来九月中可勘渡

于道慶之由、被仰下候之条、為代官身難治之由雖

相存候、應上裁、捧請文候、所詮、遂結解、地頭

得分之内、於用途者、可致九月中沙汰候、至未分

者、九月中難治之間、十一月中可勘渡候、以此旨、

可有御披露候、恐惶謹言、

建武元年六月十七日 沙弥覚信代教信請文

『名之下裏ニ在之』  
(花押)

『裏ニ有之』  
(飯尾頼連)  
(花押)

(正親町草有)

(花押)

(御小路明成)

(花押)

(本文書ハ、「旧記雜錄前編一」一六九七号・一六九八号文書ト同文ナリ)

『寫在山田七郎右衛門久通』

○豊前國草美彦三郎入道跡、式部孫五郎入道道慶可

令知行者、

天氣如此、悉之、以狀、

建武元年十一月廿六日

左衛門権佐判  
(岡崎範國)

(本文書ハ、「旧記雜錄前編一」一七一三号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎入道と慶謹言上、

欲早任國宣賜御施行、被止大隅五郎太郎入道と

智子息助三郎入道と助今者死去并同女子藤原氏今者死去

等跡輩知行、薩摩國伊集院内嶋廻田地・古江菌

・源太迫・桑迫・三小山原・馬渡田・世戸口田

地并福山村内山下田・古葉田菌等事、

副進

一通 国宣案、

右、田菌等者、道慶相傳之地、入置質券本錢返等之間、任傍例、就訴申、被成下國宣畢、早任彼狀、賜御施行、如元欲全知行、仍恐言上如件、

建武二年二月日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七二号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎入道と慶自京都合戰之時、令供奉

候、以此旨、可首御披露候、恐惶謹言、

建武三年三月廿日

沙弥道慶

進上 御奉行所

承了(高師泰)  
(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七九号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎入道と慶謹言上

欲早依度と軍忠、預御注進、浴恩賞事、

右、道慶最前馳參御方、去正月廿七日、鴨河原合戰之時、致軍忠之条、即御見知早、同廿八日、召捕直(名和)伯耆守長年若黨和賀尾弥太郎并兵衛二郎、令具參多と須河原、属于當御手申入之處、可被誅之

由、直被仰下被切早、同卅日於五條河原致合戰之条、畠山小松孫太郎見知早、然早且預御注進、且為賜御承判、恐言上如件、

建武三年三月 日

承了(貞久)  
(花押)

『上書』  
式部孫五郎入道狀

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七九号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎入道と慶申軍忠事、無子細候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年三月廿四日

沙弥道鑑

『名之裏有之』  
(貞久) (花押)

進上 御奉行所

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一八〇一号文書ト同文ナリ)

『在山田七郎右衛門久通』

○薩摩國伊集院大窪大貳房明賢謹弁申

欲早被弃捐嶋津大隅式部孫五郎入道と慶非據支狀、任時綱・慶西置文以下證文等蒙御成敗、同國同院大窪内温穴前田地三段事、

副進

一通 本主時綱置文寛喜二年二月廿八日

一通 慶西置文文永六年三月 日

右、於田地三段者、為大窪内、帶本主時綱・慶西

置文讓狀、代々知行無相違之處、大隅五郎太郎入道と智息女道慶不顧自狀、押領間、任父祖置文以下證文等、可被停止彼押領之由、訴申之處、如道慶非據支狀者、右田地者、道慶當知行之處、去永仁年中御徳政之時、對不知行之佛教房、明賢祖父道西、為子息治部房明賢父代官、於守護方、致謀訴之間、道慶于時宗久當知行之旨、就支申之、恐自科止訴訟之由、道西出狀之間、道慶知行不可有相違由、預御下知畢、進覽右、而明賢對不知行仁道智女子跡、致奸訴之条、希代奸曲也云云、此条言語道斷奸也、其故者、依于當院所務事、守護方与惣領郡司年来敵方也、道西當院一分領主也、争於于自是末欠

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一八〇一号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○雜訴決断所牒 薩摩國衛

沙弥道慶申當國谷山郡内山田・上別符両村地頭  
所務并得分物等事 『此裏有之』 (花押)

右、件両村所務以下事、任谷山五郎入道覚信代教  
信請文、可知行之由、可被下知者、以牒

建武六年七月廿一日 右衛門大尉坂上(明徳)大宿弥  
左少辨藤原朝臣(中御門皇朝) (花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編」二〇四九号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○さつまのくにいしゆゑんのふく万ミやうの内ふる  
さとのその二か所か事、

右、かのそのハ、たうきんちうたいさうてんのち  
なり、しかるを、たうきんかちゝかうつけのちふ  
はうりやうきんといひ、たうきんといひ、しまつ  
のしきふのまこ五らう入道殿御ひけいにて、り  
やうきんあんとかまつり候事も、たうきん十五  
のとしより御中にほうこうつかまつり、おやをも

たすけ、さいしをもかへりミ、いまゝてもいのち  
いきて候、御をんあさからす候あひた、かのその  
二か所、したいせうもんらをあひそへて、永代ま  
いらせ候をはぬ、御ちきやう候へく候、いらんわ  
つらい申ものも候ましく候、よてこ日のために、  
狀如件、

(康永) かうゑい四ねん十月廿一日 たうきん (花押)  
『上書有之』  
ちふさへもん入道蘭二か所か狀

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二〇八号文書ト同文ナリ)

直久

三郎 式部藤三郎

『案文在山田七郎右衛門久通』

○ゆつりわたすたにやまのこほりのうち、うすく  
のむらニをきてハ、三郎ニえいたいをかきて、  
ゆつりわたすところしち也、たゝしせいちやう  
のほどハ、こけのさたたるへし、よてこ日のた

めにそうもんくたんのことし、

けんち二年九月十三日 忠真在判

三郎ニ

(貼紙) ゆつり狀案文三郎殿谷山のうすくのむらの事、

(本文書ハ「旧記雜錄前編」七七八号文書ト同文ナリ)

忠房

式部三郎太郎

○上總介師久築高江峯城、以令忠房等守件城、為

入来院彈正少弼重門、所陷當城、于時遂戰死畢、

忠興

尾張守 ○法名道善、

忠光

式部三郎 將監 ○法名如天、

『寫在隈之城衆上村勝吉』

○薩摩國八幡新田宮所司神官等与當國宮里郷地頭

大隅式部三郎忠充「イ光」相論免田以下事、

右、如宰府註進狀者、子細雖多、所詮、於當宮

豎義御供祈并二月二日御祭饗膳祈等免田者、自

往古所引募當郷也、而忠充押領彼免田之上、放

入使者於神領、押取身代、令沽却之由、神宮等

訴申之處、忠充背度と催促、不及請文云云、尤

難遁其科敷、然則於件免田者、如元可引募當郷、

至身代者、為忠充之沙汰可令糺返也、次忠充狼

籍科事、可被付鎮西寺社修理者、依鎌倉仰下知

如件、

正應二年八月二日

相模守平朝臣在御判

陸奥守平朝臣(宣時)在御判

『上書有之』

關東御教書案文

『裏有之』 隅之城

(本文書ハ「旧記雜錄前編」九二八号文書ト同文ナリ)



『宗』  
忠家

三郎太郎 将監 ○法名道珍、

忠興

三郎太郎 ○法名道慶、

忠常

七郎三郎 美作守 ○法名儀幸、

忠俊

『正文在隈之城衆上村勝吉』

○八幡新田宮御寶前

奉進

御筆法花經

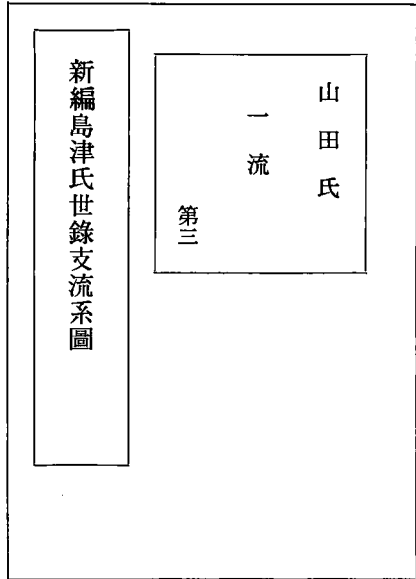
右、旨意趣者、奉為天長地久、御願圓滿、殊者

信心施主子孫繁昌、息災延命、心中所願皆令滿足  
之故也、所定如件、

永正十六年己卯十二月吉日 藤原忠俊（花押）

新田宮政所座主周宗計次

（本文書ハ、旧記雜錄前編二一九一八号文書ト同文ナリ）



山田氏系圖第三

『五代』  
△忠經

初忠能 諸三郎丸 大隅式部諸三郎 九郎左衛門尉 加賀守

『正文在山田七郎右衛門久通』

○讓渡 嫡子諸三郎丸所

薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭職以下事、右所領者、相副亡父式部太郎忠實讓狀并關東御下知以下證文等、限永代、讓与諸三郎丸畢、但上別符内よこて・こまはしり・くきの、以上三ヶ所四至塚各者見取懷面者、次男かめ三郎丸にゆつりたふところ也、諸三郎無男子者、かめ三郎か子仁讓へし、又かめ三郎無男子者、諸三郎か子仁讓へし、諸三郎并かめ三郎兩人共をの子なくは、雖為女子、一門の中に令相嫁仁可令相傳也、若又兄弟共無實子ハ、一門の中に志あらん人を取養て、ゆつりたふへし、爰彦六事、もとより不調の人たるうえ、對于道慶、しゆくくの現不忠之間、永令義絶畢、迄于彦六か子と孫と、雖為段歩、道慶之跡を不可給与、於令背此旨子共者、道慶所領不可知行、仍為後日、以自筆所書与讓狀如件、

正中貳年四月十九日 沙弥道慶（花押）

〔本文書へ、「旧記雑録前編」一四三六号文書ト向文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○讓渡 嫡子諸三郎丸所

薩摩國伊集院并給黎院内田藪等事、

一田地分

壹所 大道田・柳田・山下田・こは田・同

院福山村内但くつれわたり  
年と荒木河成在之、

四段 馬渡のつゝミより上、同院古里内不  
作

之、

八段十 藤部桑原内山さきこふち田給黎院内

年と荒不  
同前

一藪分

壹所 古江藪同院久徳名内但此内荒野  
在之、

壹所 桑のさこ同前但荒野  
同前

壹所但新開  
田在之 福山村同院内

右、田藪等、道慶相傳知行之間、相副次第證文并  
鎮西御下知等、限永代、讓与諸三郎丸畢、他さま  
たけなく可知行之也、爰彦六事、もとより不調の  
人たるうへ、對于道慶、しゆくくの現不忠之間、  
令義絶畢、迄于彦六子と孫と、雖為段歩、彼田藪  
等不可給与、於令背此旨子共者、道慶跡を不可知  
行、仍為後日、以自筆所書与讓狀如件、

正中貳年四月十九日 沙弥道慶（花押）

〔本文書へ、「旧記雑録前編」一四三七号文書ト向文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○さつまの國谷山郡内山田・上別符西村地頭、但か  
め三郎にゆつる分を除て、諸三郎にゆつりあたへ  
畢、このうちハわうしやくの所領也、ゆめくわ  
けゆつるへからす、男子壹人にゆつるへし、男子  
なくハ、かめ三郎知行すへし、又わけゆつらんに  
をいては、道慶かゆつる所壹所も知行すへからす、

諸三郎かすへくゝにいたるまでも、此狀をかたくまほるへし、若いはいするもの出来ハ、かめ三郎かすへくゝにいたるまでも、おさへ知行すへき也、仍末代のために、せうもんゝの狀如件、

正中貳年卯月十九日 道慶(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四三八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ゆつりあたうるもろ三郎に、

さつまの國たにやまのこほりの内、山田・上へつふのちとう米十五石・同ねんくようとうの内  
十貫文か事、

右、山田・上へつふのちとうしよむたうけいと、かの所のくんし五郎入道かくしんとわよせしむるうへは、けいやくの狀にちかハさらんほどは、くたんの米とようとうをとるへし、よて後日のふしんあらしたために、自筆をもてかきをくゆつり狀如

件、

正中參年二月十九日 たうけい(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四六二号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○山田・上別符兩村惣地頭職得分物事、如御狀者、

諸三郎・龜三郎仁令讓之候畢、彼得分、任契約狀、可有御沙汰候云々、可存其旨候、恐々謹言、

二月廿五日 沙弥覚信(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四六三号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○あん(具書)と申され候はんする時の申狀のくしよ案文

をかきて、そへられ候へきもんしよの次第、

一つう けんきう三年のうたいしやうけの本下文

のあん、正文ハかつき殿に候也、

一つう けんち二年のたゞさねのゆつり狀、これ

も正文ハかつき殿に候也、あつかり狀二

つう正文にて候、くハしき事ハ申へく候、

一つう こうあんのかわんとう御下知、これハを

くの一たんをあんかきてそへらるへく候、

一つう 道慶かそれにゆつりたてまつる狀、

一つう ひて時の下知、これハくちの一たんをか

きて、そへらるへく候、

一つう りんし、

一つう くゑ(決断)つたん所のあんとのミてう、

以上七つうにて候、

諸三郎殿へ

(本文書ハ「旧記雜録前編」一四六四号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道と慶子息諸三郎丸申、薩摩國

谷山郡山田・上別符両村地頭職安堵事、申狀副具書

如此、早云當知行之實否、云支申仁之有無、載起

請之詞、可被注申也、仍執達如件、

嘉曆四年五月廿三日

修理亮(英時) (花押)

嶋津三郎兵衛尉殿(実忠)

(本文書ハ「旧記雜録前編」一五二六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津大隅式部孫五郎入道と慶子息藤原諸三郎丸重

言上、

薩摩國谷山郡山田・上別符両村以下地頭職安堵

事、

副進

(花押) 『此裏ニ有之』

三通 御教書案

右、云當知行之篇、云被支申仁之有無、可被尋注

進之由、被仰嶋津三郎兵衛尉  
岐島彦三郎入道之處、  
智覽見院郡司于今無音之上者、

任傍例、為預御注進、重言上如件、

嘉曆四季六月日

(本文書ハ「旧記雜録前編」一五一九一号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道と慶子息諸三郎丸申、薩摩國  
谷山郡山田・上別符向村地頭職安堵事、重申狀如  
此、早云當知行之實否、云支申仁之有無、可注申  
之由、先度被仰訖、早速可被申左右也、仍執達如  
件、

嘉曆四年七月廿七日

修理亮(英時)(花押)

嶋津三郎兵衛門尉殿(実志)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五二三一「号文書ト同文ナリ」)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道と慶子息諸三郎丸申、薩摩國  
谷山郡山田・上別符向村地頭職安堵事、道慶當知  
行之間、讓与諸三郎丸之條、無異儀候、無支申仁  
候、此條若偽申候者、日本國中佛神御罰於可罷蒙  
候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、  
嘉曆四年九月廿五日  
左兵衛尉實忠

『名乘之裏有之』(花押)  
『和泉殿判也  
押札有之』

『上書有之』  
下野三郎兵衛尉請文

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五二六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道と慶申候、當郡内山田・上別  
符向村地頭職安堵事、御使節之由承及候、於件地  
頭職者、以和与之儀令治定、得分等兩方預鎮西御  
下知候之處、如所務管領、子息相傳之條、存外之  
次第候、仍御下知并和与狀案文進之候、御注進此  
等之子細候者、為悦存候、恐と謹言、

七月一日  
沙弥覚信(花押)

『上書有之』  
謹上 智覽殿

谷山五郎入道請文

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五二〇号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道と慶子息諸三郎丸申、薩摩國

谷山郡内山田・上別符両村地頭職安堵事、去五月

廿三日御教書謹拝見仕候畢、抑谷山五郎入道覚信

捧和与狀并御下知案文令申子細候、仍覚信書狀謹

令進上候、此條偽申候者、日本國中神祇冥道御罰

可罷蒙候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

嘉曆四年九月廿七日  
(知寛) 平忠世請文

『名乘裏有之』(花押)

『上書有之』  
知覧院郡司請文

(本文書ハ「旧記雜録前編」一五二八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道と慶子息諸三郎丸申、薩摩國

谷山郡内山田・上別符両村地頭職安堵事、申狀如

此、為訴人不終沙汰之篇云々、所詮、来月廿日以

前可參決也、仍執達如件、

元徳二年四月廿日  
(英時) 修理亮(花押)

谷山五郎入道殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」一五四七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○去五月廿五日御教書案并去月廿七日御催促狀、謹

拝見仕候畢、抑大隅式部孫五郎入道と慶子息諸三

郎丸申、薩摩國谷山郡内山田・上別符両村惣地頭

職安堵事、道慶背御下知并和与狀等、掠申御教書

候之條、存外之次第候、所詮、此等之子細、在津

代官可明申候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元徳二年閏六月二日  
沙弥覚信請文

『名之下裏有之』(花押)

『上書有之』

谷山五郎入道請文

(本文書ハ「旧記雜録前編」一五五二号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部孫五郎入道・慶子息諸三郎丸申、薩摩國  
 山谷郡内山田・上別符兩村地頭職安堵事、就去五  
 月廿五日御教書、相觸山谷五郎入道候之處、捧請  
 文候、謹令執進上候、以此旨、可有御披露候、恐  
 惶謹言、

元德二年後六月八日

沙弥定圓請文

『名之下裏有之』 (花押)

『上書有之』

波谷新平次入道請文

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一五五三号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』、『鮫島彦次郎入道請文』

○大隅式部孫五郎入道・慶子息諸三郎丸申、薩摩國  
 山谷郡山田・上別符兩村地頭職安堵事、嘉曆四年  
 九月十日御教書案并去月廿九日御催促狀謹拝見仕  
 候畢、

抑此事、被成嘉曆四年五月廿三日御教書候之處、  
 捧山谷五郎入道覚信支狀候之間、同以七月十一日  
 令注進候畢、若此條偽申候者、日本國中佛神御罰  
 可罷蒙候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元德二年後六月廿五日

沙弥蓮道請文

『名之裏有之』 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一五五六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』、『澁谷彌平三入道請文』

○大隅式部孫五郎入道・慶子息諸三郎丸申、薩摩國  
 山谷郡山田・上別符兩村地頭安堵事、任被仰下候  
 之旨、相觸鮫島彦次郎入道候之處、請文如此候、  
 以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元德二年七月五日

沙弥元祐請文

『名之裏有之』 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一五五七号文書ト同文ナリ)



『寫在山田七郎右衛門久通』

○谷山五郎入道覺信代教信重言上

欲早召出式部孫五郎入道、慶子息諸三郎丸、自稱延應狀、且被處惡口奸訴罪科、且任御下知并和与狀旨、蒙御成敗、薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村惣地頭職安堵所望無謂子細事、

右、當郡、司以下所職所帶等者、為覺信先祖開發領主、去建仁三年十二月廿五日令拝領關東御下文以來、代々無相違之子細、先進狀等炳焉也、爰諸三郎丸先陳云、高祖父豊後守忠久拝領之處、信忠覺信為忠久芳志令知行之条、忠光祖父延應二年狀頭曾祖然也、覺信亡父祖代々芳志之跡、捧存外推參之支狀云々、此条覺信曾祖父信忠當郡補任之条、御下文等嚴重之處、為忠久之芳志、令知行之由、構申不實之間、可被召證跡旨雖申之、不及出帶、以傍輩為忠久芳志當郡知行之由、載陳狀之上者、偏稱恩顧之由歟、争可遁其咎哉、次重陳狀、云掠論之

由緒、云芳志之子細、非當論肝要之間、所闕筆也云々、就之案之、云延應狀、云芳志所見、為不實之間、寄事於關東御下知、雖遁申之、召出彼狀、被經細碎御沙汰、欲被處奸訴惡口罪科、次同陳云、覺信者、為外威縁者之条、無子細、諸三郎丸者忠久正流也、不可依年少、為覺信郡司身支申安堵、止地頭名字、可被召得分讓之由載訴狀之条、自由推參過分云々、此条於國領者、以郡司号地頭、至庄園者、以下司稱地頭、所謂本補地頭是也、就中右大將家御代、文治年中諸國守護惣地頭職御進止之間、被補御家人、承久以來被定新補率法訖、仍本新共以關東御成敗也、覺信或宛給郡司職御下文、或預別納御下知、令兼帶兩職、度々抽軍忠、所領勲功賞也、忠久者令拝領惣地頭職之間、令取段別五舛加徵米之外、不相綺下地者也、覺信者為開發領主、預關東御下知御下文等之上者、何可有差別之儀哉、而諸三郎丸覺信為郡司之身、自由過分推

參之由、書載乎怪詞於陳狀之條、招其咎者哉、凡不謂內外戚、對於叔父致禮節者尋常法也、道慶書与和与以前讓狀於諸三郎丸、望申安堵、擬成後日煩之間、支申之條、何可為自由過分推參之儀哉、争可相遁過言奸訴之咎哉、次同陳云、忠久守護地頭兩職拝領以來、云一圓領知之所々、云郡司名主相交之地、帶地頭職御下文等所知行也、覺信与道慶相論関東鎮西御下知和与狀等、皆悉山田・上別符兩村地頭之由、被載下畢、依何可載惣地頭詞之由可支申哉取詮、此条如載先段、忠久拝領者惣地頭職也、非下地領主之處、不載惣字、如下地管領之地頭、差四至堺於讓狀、可望申安堵之條、奸謀至極也、隨而相分當郡惣地頭職之後、忠實・道慶等未給安堵御下文之上、一向止惣地頭之綺、定米錢員數、於郡司所倉本可請取之由、就出和与狀、被成御下知之間、道慶有限得分物可請取之條、狀文分明也、不載惣地頭詞、申給御外題、稱後日御

下文、擬破申和与御下知之條、造意顯然也、加之、不可載惣地頭字之旨令申上者、奸曲之至為顯然者哉、次兩村事、非永代和与之儀、暫令契約得分云々、是又奸謀也、如和与狀者、一向止惣地頭之綺、定米錢相互不可有更改、為將來龜鏡云々、仍任彼狀、被成御下知之處、非永代和与之由構申上者、奸謀亦以露頭畢、又云、穎娃郡地頭御外題覺信承伏畢、穎娃谷山共道佛一人跡云々、此条道佛知行者惣地頭職也、於下地者、穎娃谷山各別領主之間、不可混亂之上者、何可号承伏哉、次覺信不弁彼得分、而道慶不請取之由、企逆訴云々、此条道慶為破和与、不請取得分之間、就訴申、御沙汰最中也、次掠給御教書、兩年不付之由事、即雖付之、不及陳答之間、申付度々御教書畢、不可依胸臆浮言、又云、支申地頭職安堵之條、云約月以後、云非分違乱、露頭之上者、於所務者、如本可被亂付道慶云々、此条諸三郎丸當村讓得由稱之、於當御手望

申安堵、以三番御引付御沙汰、可被糺付道慶之由、書載安堵相論陳狀之条、亘于兩様訖、次支申安堵之条、不依違之子細、具于先訴先段、所詮、惣地頭所務者、就和与被成御下知之之間、諸三郎丸不可相綺之上者、依何可望申安堵哉、然早為被停止非據濫訴、重言上如件、

元德二年十一月 日

『上書』  
三問狀案諸三郎丸申安堵事、

谷山五郎入道代重狀

元德二十一年廿五

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五七〇号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 谷山五郎資忠法師法名覺信与大隅式部孫五郎宗久法

師法名道慶子息諸三郎丸相論條と

一 薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭職安堵事、

右、於彼地頭職者、道慶相副代と御下文以下證文、讓与諸三郎丸之間、可預安堵御下文之由、就申之、有其沙汰之刻、覚信依支申、所相番訴陳也、爰兩方所申枝葉雖多、所詮、覚信則於當村者、為重代相傳之私領、郡司進止之間、右大將家以後代と帶御下文御下知狀等、知行無相違之地也、而於惣地頭者、有限加徵檢斷之外、不相綺下地之處、諸三郎丸親父道慶非法張行之間、及訴訟之刻、恐自科可停止惣地頭綺之由、就出和与狀、正中二年十月十日預下知訖、道慶書与彼下知以前讓狀於子息等、掠給安堵外題、擬致違亂之由訴之、諸三郎丸亦背関東鎮西度と下知狀、濫妨地頭所務、抑留得分物之間、多年雖及訴訟、覚信恐謀書以下罪科、依致懇望、定地頭得分員數、令和与訖、於地頭職者、高祖父豊後守忠久以來代と預御下文之間、帶親父道慶讓狀、申安堵之處、覚信為郡司之身、寄事於所務和与下知、支申地頭職安堵之條、無謂之旨、

陳之者、於惣地頭者、加徵米以下得分管領之仁也、郡司者下地進止之上、可停止地頭綺之由、令和与、預下知之間、道慶縱雖分讓子息等、可配分地頭得分内歟、諸三郎丸号地頭、申安堵之條、無其謂之旨、覚信雖稱之、彼下知者、閣所務相論、為郡司之沙汰、令弁濟地頭得分之由、所見也、更止地頭之綺、一圓可郡司進止之條、無證據、一、是、次就道慶和与、預下知事者、正中二年十月十日也、諸三郎丸所帶道慶讓狀者、為同四月十九日歟、以和与以前狀、掠給安堵、擬致違乱之由、覚信申之處、高祖父忠久跡所領、一族等知行之所、云惣領分、云庶子分、大略郡司相並之地雖在之、皆以預地頭職御下文訖、就中、地頭与郡司和与所務、雖令契約得分物、就彼和与、支申地頭安堵之條、無其例歟、就覚信支狀、於被閣安堵所望者、向後不可有地頭之号歟、隨而讓狀前後覚信難綺申之旨、諸三郎丸陳答叶理致歟、二、是、次如道慶讓狀者、山田・

上別符地頭職事、相副亡父忠實讓狀并關東御下知以下證文等、讓与諸三郎丸訖、但上別符内横手・駒走・釘野以上三箇所四至塚各見取帳面者、所讓与次男龜三郎丸也、云云、不載惣地頭之詞、如下地進止、定四至塚、書与讓狀於子息等之條、奸曲之旨、覚信雖申之、分讓所領於子孫之時、就分限多少、書分四至塚之條、為通例之間、不足其難歟、云關東御下文、云父祖手繼狀等、代々為地頭職諸三郎丸知行之上者、今更可書載惣地頭之詞於讓狀哉、覚信為郡司之身、難支申地頭職相傳歟、三、是、次於當國顯娃郡地頭所務者、大炊助入道教佛知行之時、止代官入部、令和与所務、雖被成下知、惣領下野前司入道今者死去傳領之間、依讓与子息豊後守實忠、申給安堵外題訖、然而郡司敢不申子細歟、顯娃谷山共以曾祖父道佛之跡也、所務之躰、又為同前之間、覚信支狀旁以難被許容之由、諸三郎丸載陳狀之處、覚信無重申旨之間、頗雌伏歟、四、是、次覚信

帶建仁三年以來、關東御下文以下、御公事勤仕狀等、雖申子細、彼狀皆以為郡司職知行所見之間、不足當論證文之上、以得分和与下知、一向擬停止地頭名字之條、覺信造意非無奸曲歟、五、是、然則、於彼兩村地頭職安堵者、覺信所支申不及沙汰焉、

一 惡口事、

右、覺信則如諸三郎丸陳狀者、於當郡と司職者、高祖父忠久地頭職拝領之時、覺信曾祖父信忠為忠久芳志、令知行之條、覺信祖父忠光延應二年狀分明也、覺信忘父祖代と芳志、支申地頭職安堵云云、於當郡者、信忠帶補任御下文、領掌于今無相違之處、為芳志知行之由、令申之上者、偏為恩顧之旨、稱之歟、可被處惡口咎之由訴之、諸三郎丸亦於當郡地頭職者、為平家沒收之地、忠久拝領之間、本補地頭也、覺信者為郡司、相從地頭所務、令弁勤所當公事之職也、而覺信為郡司、支申地頭職安堵之條、過分之造意也、隨而忠光延應狀事、被引載

關東御下知之上者、芳志之詞非惡口之旨、陳之者、如弘安十年十月三日關東御下知案者、薩摩國御家人谷山五郎資忠与當郡内山田・上別符兩村地頭大隅式部太郎忠實字有憚子息二郎丸代養父道智相論條と、一惡口事、資忠則為恩顧仁之由、久親載訴狀訖、為惡口之由申之、久親亦資忠先祖忠光得當郡代官職訖、何可為惡口哉之旨稱之、爰如久親所進忠光七月八日付延應二年狀者、谷山地頭御方御代官職事、如元所申請也、御代官職給天候波年間波、別御志仁代官一人立候天、時と波御送向申候天、番宿直勢佐世候邊志、暫毛候天過幾難久候波年間波、暇於申天罷出候邊志云云者、帶此狀、道智申子細之處、為案文之間、難被信用之由、資忠申之、於正文者、惣領帶持之間、可被召出之旨、地頭雖稱之、如狀者、為請所證文之由、所見也、難稱恩顧地頭、亦帶此狀、聊申子細之條、非指惡口之間、不及沙汰云云、彼狀不副進本訴具書之上者、難被

許容之由、覚信代教信雖申之、引載諸三郎丸陳狀之上、引付回答之時、出帶之處、教信不加指難破之間、承伏歟、然則、恩顧之段、猶以非惡口之由、被載関東御下知之上者、芳志之詞、難稱過言矣者、依仰下知如件、

正慶元年十二月五日

修理亮平朝臣(英時)(花押)

『右繼目裏判』(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一六一四号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○山田・上別符のちとう所務の事、よて、こうあん十年くわんとう御下知の正文一通、同所務条との事ニよて、正あん二年のちんせい御下知正文一通、同所務わよの事ニよて、正慶元年のちんせい御下知の正文一通、同地頭職安堵の御下知の正文一通、年かう同前同所務とくふんの事ニよて、せい御下『ちんせい殿』

知の正文三通、

一山田・上別符両村を道慶ニゆつらるゝけんちの狀也、かのあん、本狀房(性)これをかく、かのゆつり狀の正文ハ、そうりやうたゝむねのあつかり狀の正文一通、同じそくさたひさのあつかり狀の正文一通、この狀らハ京へいそきのほせらるへきよし申下了、のこる和与狀御下知以下いしゆうあん・きいれの田齒はくちくわうやらのしたいせうもん、同御下知らの正文ハ、それのはゝのもとにあるへき也、しせんの事あらん時ハ、かめ三らうとよりあひて、わけてとらるへき狀如件、

元弘三年六月廿四日 たうけい(花押)

諸三郎殿 『右繼目裏判』(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一六四三号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』

○奉行人藏人式部少輔彼宿所ハ、おしこうち、までのこうち、三条はうもんの中ほど、ま

鳴津大隅式部諸三郎忠能・同舍弟龜三郎丸等謹言  
てのこうちをもてむね門也、此申  
狀八月三日上、同六日安堵りんし  
給はる、彼申狀ハ、案文、同清書、  
少輔殿充書之。

上

欲早任當知行旨、下賜安堵 繪旨、備將來龜鏡、

薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭職、同國

散在名田島相傳所領等事、

副進

一卷 所領相傳文書等

右、就被下 繪旨於忠能一族、鳴津上總前司貞久

法師法名道鑑 令誅罰武藏修理亮英時之時、忠能父子共

懸先、令生捕抽軍忠之間、可浴恩賞之旨、以別紙

言上、至當知行所領等者、早下賜安堵 繪旨、欲

備將來龜鏡矣、仍恐言上如件、

元弘三年七月 日

(本文書ハ、「旧記雜錄前編」一六四八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○鳴津大隅式部諸三郎忠能・龜三郎丸等當知行地、

被聞食了者、

天氣如此、悉之、以狀、

元弘三年八月五日

(岡崎範圍)  
式部少輔 (花押)

(本文書ハ、「旧記雜錄前編」一六六〇号文書ト同文ナリ)

『寫在山田七郎右衛門久通』

○ 校正了

薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村惣地頭所務事、

式部孫五郎入道、慶可破正中二年年和与狀之由、掠

給鎮西下知狀之間、件裁許為非據之条、去年於決

断所御沙汰訖、而於和与契約得分物者、任先例、

於郡司所倉可勘渡之由、載和与狀之處、以前五ヶ

年分内半分於京都可沙汰之由、被仰出聞、在京計

略依為難治、彼兩村惣地頭所務、如元可返付道慶

之由、去年十二月十七日捧請文之處、今月十三日

於決斷所如被仰出者、於惣地頭所務者、可返付道慶云、以前五ヶ年惣地頭得分物、求九月中可勘渡于道慶之由、被仰下候之条、為代官身難治之由、雖相存候、應上裁、捧請文候、所詮、遂結解、地頭得分之内、於用途者、可致九月中沙汰候、至未分者、九月中難治之間、十一月中可勘渡候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武元年六月十七日 沙弥覚信代教信請文在裏判

『裏有之』

在判 合奉行人頼連

在判 合奉行人章有

在判 奉行人明成

銘云

沙弥覚信代教信請文

『右續目裏判』(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一六九七号・一六九八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○雜訴決斷所下 忠能并龜三郎丸所

薩摩國谷山郡内山田・上別符両村地頭職事、

右、件両村地頭職、忠能并龜三郎丸、當知行不可

有相違之狀、下知如件、

建武元年九月廿九日 左少史高橋朝臣(俊春)(花押)

中納言兼侍從 前筑後守

藤原朝臣(九条公明)(花押) 藤原朝臣(小田貞知)(花押)

左衛門權少尉

從二位藤原朝臣(四条隆實) 中原朝臣(花押)

左衛門權佐兼少納言侍從

正三位藤原朝臣(堀川光徳) 伊賀守藤原朝臣(岡崎範國)

左少弁藤原朝臣(高倉光守)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一七〇八号文書ト同文ナリ)

『寫在山田七郎右衛門久通』

○雜訴決斷牒 薩摩國守護所



嶋津式部孫五郎入道と慶子息忠能申、當國谷山郡内山田・上別符兩村所務并得分物事、

牒、件兩村所務以下事、任谷山五郎入道覚信代教信請文、宜知行之由、令下知之狀、牒送如件、以牒、

建武元年十一月十一日 左少史高橋朝臣在判(俊登)

中納言兼侍從藤原朝臣御判 前筑後守藤原朝臣在判(九条公明)  
(小田貞知)

修理大夫藤原朝臣(四条隆資) 左衛門少尉中原朝臣在判

正三位藤原朝臣(堀川光繼) 左衛門權佐兼少納言侍從

伊賀守藤原朝臣(岡崎範國)

左少弁藤原朝臣(高倉光守)

『右續目裏判』(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七二二号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』

○仰給候谷山郡山田・上別符檢断物事、任御教書之旨、可令參向候之處、折節依所勞火急候、言上其

子細於御請仕候了、恐と謹言、

八月九日 僧仁卷在判

『上書ニ有之』

かせたの別符のちとう代の返事のあん山田上別符のけんたんさたの事

御けうそつけらるゝよしの事、

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七四三号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎入道と慶子息諸三郎忠能申、薩摩國谷山郡内山田・上別符得分物事、御牒并訴狀如此、可被奉行之由候也、仍執達如件、

建武元年十一月廿七日 成阿(花押)

有保三郎入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七二四号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部孫五郎入道と慶子息藤原忠能重言上

薩摩國谷山郡司五郎入道覚信他界間、其子細守

護所注進上者、對于彼跡子息平五郎左衛門入道

隆信相傳當知行上者、重欲給御牒、當郡内山

田・上別符両村抑留年と地頭得分物等事、

副進

一通 覚信代教信請文

一通 御牒

右、両村地頭職者、親父道慶重代相傳之地也、而

為全得分物、令契約覚信之處、背契状之間、武家

沙汰之時、就訴申、道慶預度と下知畢、天下

統之後、捧彼状及上訴、為俊春御奉行、忝賜決断

所御牒之處、於地頭所務者、雖去渡之、至得分物

等者、背覚信請文、猶以不叙用之間、被仰下國司

守護所之刻、覚信去年十二月令他界畢、為亡者之

上者、對于彼跡相傳隆信、被下御牒、為糺賜以前

抑留得分物等、恐く言上如件、

建武二年三月 日

『續目裏判』

(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七三三号・一八〇〇号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津式部諸三郎忠能、馳参御方、致軍忠候畢、以

此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年三月五日

(山田) 藤原忠能

『名乘之下裏ニ有之』

(花押)

進上 御奉行所

承了 (高師泰) (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七八六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○式部諸三郎宮崎合戦之時軍忠事、無子細候、以此

旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年三月五日 沙弥道鑑

『在名之裏』 (花押)

進上 御奉行所

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七八七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、隨守護催促、可抽

軍忠之狀如件、

建武三年三月廿八日

(足利尊氏)  
(花押)

式部諸三郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八一五号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部諸三郎忠能申、於多々良潟、今月二日捕

頸由事、軍忠之次第有見知云々、為事實否、載起

請文之詞、委細可被注申候也、仍執達如件、

建武三

三月廿八日

(斎藤)  
利泰 (花押)

(島津)  
實忠 (花押)

(高)  
師泰 (花押)

渋谷弥四郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八一六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅式部諸三郎忠能申、於多々良潟、今月二日捕

頸由事、軍忠之次第有見知云々、為事實否、載起

請文之詞、可被注申候也、仍執達如件、

建武三  
三月廿八日

(斎藤)  
利泰 (花押)

(島津)  
實忠 (花押)

(高)  
師泰 (花押)

財部孫四郎入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八一七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 大隅式部諸三郎忠能軍忠事、

右、忠能薩摩大隅兩國凶徒等蜂起之間、就下給御教書、令下國、押寄大隅國加世田城大手、大將屬于嶋津左京進入道と恵手、自五月六日迄于六月十日、夜捨身命致合戰畢、然早軍忠拔群之上者、且預御注進、且賜御承判、浴恩賞、為施弓箭面目、恐と言上如件、

建武三年六月 日

承了

(貞久  
花押)

(本文書ハ、「旧記雜錄前編一」一八五六号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』

○ 嶋津式部諸三郎忠能謹言上

欲早預恩賞、弥成弓箭勇、筑前國多と良潟合戰以下度と軍忠事、

副進

一通 御教書

一通 役所高尾張守御一見狀(師奉)

一通 嶋津上總入道と鑑孝狀

二通 御奉行方御奉書

二通 證人等起請文案

一通 上總入道と鑑一見狀

右、去年二月、將軍家鎮西御下向之刻、忠能長州赤磨関令馳參、即供奉仕、同三月二日、於筑前國多と良潟御合戰候間、捨身命攻戰、自身及分取候、薩摩國渋谷弥四郎并肥後國財部孫四郎入道等見知候間、於太宰府令言上之處、為役所高尾張守師泰・嶋津豊後前司實忠・斎藤孫四郎利泰奉行、依被尋下證人等、任實正、書進請文之間、既可有恩賞之旨、被仰下之處、依御上洛、閣之候了、然忠能重大隅國凶徒兼重以下輩、可誅伐之旨、預御教書、令下國、属于惣領嶋津上總入道手、致軍忠了、然早任度と忠節之旨、浴恩賞、弥為成弓箭之勇、

恐と、

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八二四号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津大隅式部諸三郎忠能謹言上

欲早任傍例、預安堵御下文、備末代龜鏡、薩摩

國谷山郡内山田・上別符西村地頭職事、

副進

一通 系圖

一通 関東御下文案文 正文者在惣領、

一通 忠眞讓狀案文 正文者同在惣領、

一通 関東下知狀

一通 道慶讓狀

一通 鎮西下知狀

一通 繪旨

一通 決断所御下知

右、當職者、忠能父祖代と所職、當知行于今無相

違者也、仍手継安堵以下證文等、謹備于右、然早

任傍例、預安堵御下文、為備将来證券、恐と言上

如件、

建武四季正月 日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八九四号文書ト同文ナリ)

『在山田七郎右衛門久通』

○目安 大隅式部孫五郎入道と慶子息忠能申、

薩摩國伊集院地頭御代官非法条と事、

一當院内土橋村内嶋廻田一町道慶本領也、然依有要

用、為大隅助三郎入道と助、入置本物返質券之處、

去と年<sup>建武</sup>依諸國一同法、被成下決断所御牒并國

宣守護施行等、被返付之處、自御代官方被點定彼

田作毛、以前五ヶ年加徵米可懸當作之由、被仰之

間、既去年不及耕作之条、且公物闕如歟、然早自

當知行年、始而可致其沙汰之由、蒙御成敗、欲全

公私得分矣、

一同院石谷村内古里馬渡田一町、同村内瀬戸口田二反、為道助息女号北女房今者死去入置質券、是又依同法、被返付之處、又依同篇違乱、被押取下地、泉殿御代官福崎五郎令自作之条、無術次第也、於地頭米者、為當作沙汰令弁濟之条、定法也、仍自當知行年可被相懸之處、不知行分及呵責愁歎多也、早於下地者、被返付之、有限至地頭課役等者、自當知行之年可致其沙汰之由、欲蒙御成敗矣、

一同院福山村内大路田・柳田合五段、彼田者、當院別施入十八町天神御領之内也、然間、令停止諸御公事之条、自余村々無其隱之處、限彼田五段、稱可相懸加徵以下公事等、福崎五郎令苟取作毛候条、無術歎也、彼別施入田懸公事否事、當院内名々有御尋、不可有其隱者也、就中、於此所當米者、多年天神御供物也、且及有道之御沙汰<sup>▽</sup>候条<sup>△</sup>、御祈禱一分歎、然則任先例、被返付下地、欲被停止諸公事矣、

一同持丸名内原田垣下田温穴前田分、自去々年建武二六月迄于去年秋比、夫用途四ヶ度被懸召之間、作人等難合期者也、仍任法例、欲被經御沙汰矣、一古江蘭桑迫源太迫三ノ小山ノ原、自去々年秋、福崎五郎無是非被押取候条、無術者也、早欲返付之矣、

一同古江蘭并福山百姓等、一緣被召仕之条、以同前、一同御代官年貢濟成等雖致沙汰、不出請取之条、欲被經誠御沙汰矣、

以前条々、於在國雖歎申之、一向無叙用之間、恐々所令言上也、

建武四年三月 日

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」一九〇六号文書ト同文ナリ〕

〔案文在山田七郎右衛門久通〕

○ 大隅式部孫五郎入道子息忠能重言上

薩摩國伊集院内馬渡田島以下、自當院御代官方

被致押領間事、

右、巨細先度言上早、而自當院御代官方、彼田地等被押領事、同院兵衛三郎所令存知也、有御尋、不可有其隱、然早被尋究此等子細、被経急速御沙汰、糺給忠能、為令全地頭御米等、恐々重言上如件、

建武四年三月 日

(本文書ハ「旧記雜録前編」一八九〇七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○薩摩國凶徒等誅伐事、

所差下嶋津三郎左衛門尉・大隅左京進入道也、早令發向、可致軍忠之狀如件、

建武四年五月十八日

大隅式部三郎殿

(直様)  
(花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編」一九三六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○薩摩國合戰事、致軍忠之条、尤神妙也、向後弥可抽忠勤之狀如件、

建武四年十一月廿九日

(直様)  
(花押)

嶋津式部三郎殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」一九八八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○津野殿脚力のほりの時、二月三日狀同三月十一日

到来、委細ニ承候了、自何方も國いまたせいひつせず候へハ、歎入候、是も當時ハ御さたハしまらす候、ハしまり候ハ、一端申候て、罷下へく候、御身のすきはの事、さこそ候らんと察存候て、御いたわしく候、孫二郎殿もかいしくをいたゝれて候らん事悦入候、とくく下向候て、かたくも見たてまつり候ハやと、ねんせられてこそ候へ、今めかしき事にてハ候へとも、したしき中

のかたくもて、御渡候へ、萬事憑申て候、さて  
ハ山田入道殿より、これに狀を給へく候、我申事  
のせふんつかせ給候はんよし、うけ給にこそ無勿  
躰く候へ、兎もかくも入道殿仰られ候はん事をそ  
むかれ候はん事ハ、あさましき事にて候へく候、  
此後ハ其旨を御存知あるへく候、又ひはの事承候、  
取てをかせ給候へく候、何物にても候へ、入候ハ  
ん物ハ京とへ注進までも候ましとてをかるへく候、  
又馬代用途の請取の事うけ給候了、大方殿も御狀  
もまいらせす候、此山臥文かすをいたみ候之間、  
申入す候、このよしを御申あるへく候、其上たふ  
せのかくりきくたりの時、まいらせて、此脚力い  
く程なく候間、申入す候由、御心へ候て、御申入  
へく候、若黨共中へもこの由物かたりあるへく候、  
又宗四郎かたへさやまきの刀くたし候、其様を仰  
らるへく候、恐と謹言、

三月十八日

たうゑ(花押)

348

山田三郎殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」一九二号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○山臥便宜之狀委細承候了、

一國いまて城の一をも不被落候〔由カ〕承候へハ、一

二年ニも静謐あるましきやうにうけ給候へハ、無  
御心本存候、これも下候ハんとて、暇申て候へハ、

執事方より思もより候ハんと候間、今すこしも候  
て、重いと申候〔まノ字落敷〕て罷下へく候、

一和田城こしらへられ候よしうけ給候、相構くひ  
きたれ候て、こしらへらるへく候、領内にしや  
う一所候ハてハかなうましく候、若黨共の中へハ  
莫祢二郎下し候時、ふみくたして候間、不下候、  
一何事も入道殿に申合られ候て、よきやうに計へく  
候、

一那良西阿城せめられけに候、此いくさ無何ひさし



くあらうするけに候へハ、敷入候、其外京都無殊  
事候、

一必と七八月比ハ可下候、早と城こしらへ候てをか  
るへく候、委細難盡狀候、恐と謹言、

壬四月四日

道恵(花押)

山田諸三郎殿

『上書』

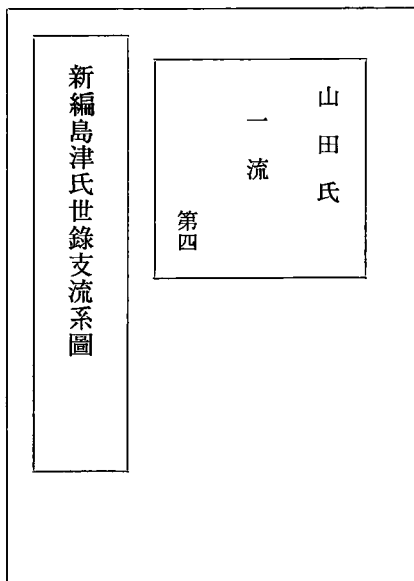
山田諸三郎殿

道恵

(本文書ハ「旧記雑録前編」一三二一〇号・「旧記雑録附録」一三四六号文  
書ト同文ナリ)

---

(表紙)



山田氏系圖第四

『正文在山田七郎右衛門久通』

○為奉息兩殿御意、所打立也、急速馳參、可致忠節

狀如件、

貞和六年九月廿二日

(真冬) (花押)

山田諸三郎殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」一三三二八号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津大隅式部諸三郎忠経謹言上

欲早且依傍例、且任當知行實、預安堵御下文、

備末代龜鏡、薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村

地頭職事、

副進

一通 関東御下知

一通 親父宗久法名讓狀  
道慶

一通 鎮西御下知

二通 繪旨同決断所御下知

二通 御教書

右、地頭職等者、忠経父祖代と相傳當知行無相違

之条、所進之文書等炳焉之上者、早預安堵御下文、

弥為致忠節、粗言上如件、

貞和七年四月 日

(本文書ハ「旧記雜録前編」一三三四二号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○下 嶋津山田諸三郎忠経

可令早領知薩摩國谷山郡山田・上別符兩村地頭

職下地事、

右、任関東鎮西度と下知并親父道慶讓狀、可令領

掌之狀如件、

観應二年六月十三日

(夏冬)  
源朝臣(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三三五号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅薩摩兩國凶徒事、急速馳越、可致退治忠節狀

如件、

観應二年七月廿八日

(夏冬)  
(花押)

嶋津大隅諸三郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三三四号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○三春之御慶猶重疊、抑 御屋形當所申良ニ入御候、

仍明日自是直ニ可有御渡海候間、御馬まハシ申候、

一宿飼口番等之事、可被仰付候、慶事、恐々謹言、

三月八日

経安(花押)

村田肥前守

経安

山田殿

御宿所

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」一六三号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○鹿兒嶋郡内上伊敷村地頭職事、為給分所宛行也、

任先例、知行不可有相違之狀如件、

正平十三年五月一日

氏久(花押)

山田諸三郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三五号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○鹿兒島郡内上伊敷・下田兩村地頭職得分事、以參分貳為給分所相計也、知行不可有相違之狀如件、

正平十三年七月一日 氏久（花押）

山田諸三郎殿

（本文書ハ「旧記雜錄前編二」三七号文書ト同文ナリ）

『正文在山田七郎右衛門久通』

○加賀守所望事、可奉申京都之狀如件、

應安七年五月廿二日 沙弥（今山了俊）（花押）

嶋津山田九郎左衛門殿

（本文書ハ「旧記雜錄前編二」二六一号文書ト同文ナリ）

『寫在山田七郎右衛門久通』

○嶋津山田加賀守忠経申

薩摩國谷山郡内山田・上別符事、譜代相傳之段、

無子細候、仍京都御吹拵所望仕候、可有申御沙汰

『在山田七郎右衛門久通』



いぬおもものてくミ至徳元  
犬追物手組十一十六

（本文書ハ「旧記雜錄前編二」二九九号文書ト同文ナリ）

進上（細川頼之）武藏守殿  
永和元年七月十八日 沙弥了俊（花押）

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津山田加賀守忠経申訴訟事、嶋津越後守氏久捧

拵狀候、謹進覽之候、可被経御沙汰候哉、於鎮西致忠節候之間、如此執申候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年五月十日 越後守氏久御判有

進上 齋藤六郎左衛門入道殿

（本文書ハ「旧記雜錄前編二」二九四号文書ト同文ナリ）

十三 十三 十三 十一 十二  
殿 うちひき 十二正

十 十 十 十 十  
平田新右衛門尉五疋  
ひらたのしんまもんのせう  
嶋津修理亮殿 十 十一 十二 十  
しまつのしゆりのすけ 五疋

十一 十二 二十 十  
伊地知彦六 三疋  
いぢ、ひこ六 十一 十一 十 十  
上井神五郎 二疋  
うへい、しん五郎

十二 十一 十二 二十 十  
又三郎殿 七疋  
また三郎とのせうおう 十一 十 十 十 十  
肥後法師丸 一疋

検見

嶋津九郎左衛門入道殿

しまつ九郎さへもんとの  
(本文書ハ「旧記雑録前編二」四二九号文書ト同文ナリ)

○法名禪開(貼紙) 冊イ

良久

彦六 三郎左衛門尉 加賀守 出羽守

○天性不順、以故不合於老父道慶心、既離於息男  
列、由是不得段歩領地讓於我也、

利久

友久

初伊久 周防守

龜三郎丸 式部孫三郎 掃部助 常陸守

○嶋津大隅式部龜三郎丸謹言上

薩摩國凶徒等、益山四郎入道并彦五郎入道子息

親類一族以下、率多勢、同國伊作庄内構中原城

郭、依立籠、以今年六月十一日、彼城攻合戰之

時、依致軍忠、若黨左衛門次郎友久左肩被統、次

同國阿多郡高橋松原口合戰之時、依致軍忠、友

久右股被統、彼両度合戰次第、隱岐七郎行眞(貞)存知

畢、次同國凶徒等構市采院城郭、依立籠、以今

年九月廿九日、御合戰之時、致軍忠、合戰之次

第、大将御存知上、遠矢次郎太郎入道圓也・大

隅國小濱十郎實名不知為同所合戰上者、令見知畢、

然者早為預御一見狀、且目安如件、

建武四年十一月三日

承了(川上頼久)  
(花押)

『上書』

(貼紙)

大隅式部龜三郎丸申狀

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八九三号文書ト同文ナリ)

361 『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津大隅式部龜三郎丸謹言上

薩摩國凶徒等、構市来院城郭、依立籠、以今年九月廿九日、御合戰之時、致軍忠、合戰之次第、大将御存知上、遠矢次郎太郎入道・大隅國小濱十郎、為同所合戰上者、令見知畢、次以同七月廿一日、同國阿多郡高橋松原口合戰之時、致軍忠、若黨左衛門次郎友久、右股被疵、如此兩度合戰之間、致軍忠上者、早賜御一見狀、為備後證、且言上如件、

建武四年十一月三日

362

承了(川上頼久)  
(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八九四号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○下 嶋津式部孫三郎友久

可令早領知薩摩國谷山郡山田・上別符兩村地頭職事、

右、任関東鎮西度々下知并親父道慶舍兄忠経正中二年四月十九日・今年四月三日讓狀、可令領掌之狀如件、

觀應二年六月十三日

源朝臣(直冬)  
(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三三五六号文書ト同文ナリ)

363

『正文在山田七郎右衛門久通』

○於國致忠節之由、嶋津越後守氏久所注申也、尤以神妙、向後弥被抽軍功者、可被抽賞之狀如件、

應安六年二月七日

嶋津山田掃部助殿

沙弥(今川了俊)  
(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二四四号文書ト同文ナリ)

『正文在伊地知縫殿重治』

○鹿兒島郡内 給分

田上村陸町此内一丁十河成、  
殘見作四丁九反册、

得分足米錢拾貫、此外聊無得分候、若此條偽申

候者、

日本國大小神祇冥堂御罰可罷蒙候、

明德二年三月二日

友久『式部三郎』  
(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」四八四号文書ト同文ナリ)

『正文在福昌寺』

○奉寄進

(島津元久)  
(花押)

薩摩國甕嶋郡給分小牧内中牟田事

右、彼所領者、式部常陸守友久為二親先考道興禪  
門老母通長

禪菩提料、永代所寄進福昌寺也、雖然為後代、

本寺大檀那陸奥守元久所取進加判也、次萬雜公

事諸役等悉停止之、仍寄進狀如件、

應永六年己卯三月廿一日 常陸守友久(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」六一九号文書ト同文ナリ)

久書

左京亮 参河守 ○法名聖流、

久依

孫五郎

伊作四郎左衛門尉勝久不合乎 太守久豊心、而有

追放命、于時從乎勝久、出乎他州、而再不還我國

也、

『六代』  
△久興

虎王丸 四郎 右京亮 出羽守 入道名玄威、

○延文四年己亥九月廿六日巳時誕生于覺島宮地也、

『正文在山田七郎右衛門久通』

○讓渡 嫡子とらわう丸所

薩摩國谷山郡内山田・上別符両村事

右所領者、重代相傳地也、亡父道慶讓狀并関東御下知以下證文等をあひそへてとらわう丸ニ讓渡ところ也、とらわう丸男子なくハ、わう丸ニゆつりあたへらるへき也、仍為後日、以自筆かきをくゆつり狀如件、

貞治六年二月十八日 忠経 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一六九号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○右京亮所望事、可孝申京都之狀如件、

應安七年五月廿二日

沙弥 (今川了俊) (花押)

嶋津山田四郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二六二号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ (元久) 『上書有之』  
(花押) 大あいら

定

段銭事 三十文  
寺社 五十文

右、来十一月可調進、三ヶ度可加催促、尙以有無沙汰輩者、所詮、八幡大菩薩御照覽候、未進分際田数可取放也、仍所定如件、

明德二年六月日

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」五〇〇号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 又帖佐源二郎方へ、萬被仰之由承候畏入候、

御札委細承候、就其者長々其堺ニ御番ニ御座候、

御辛勞察存候、万御意共可請子細多々候へとも、

今之時分此堺ニ逗留申候之間、無其儀候、いかゞ



に存候、兼又谷山之内山田之事、御本領御事に候、

今程吉田方、依不立御用候、吉田之事、所領共荒

所ニ成候間、先知行之由被申候程、可被遣候、當

知行にて御座候とも、屋形御難義之時者、可有借

御申候、先々為御心得内義申入候、又此方之時宜

者、巨細石井方へ申候、恐々謹言、

『應永八年』  
九月十一日 經安(花押)

山田加賀守殿  
御返報

『上包』  
山田加賀守殿 村田肥前守

御返報 經安

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」六七八号文書ト同文ナリ)

『案文當家ニ有之』

○ 契約

一自然而上方御上洛之時者、此衆中一味同心而國お

堅く踏、不殘聊所存、就大少事申談御下向之間、

諸事可相計事、

一匠作(公也)既御不忠現形之上者、此衆中如何様致方便、

可退治仕申事、

一如此申定候上者、成無二之思、仰 公方申、於私

者相互用ニ立被立可申候、若不慮喧嘩出来、又者

有讒者如何様虚説雖申候、各馳寄任理非、無為可

相計事、

右此条々偽申候者、

伊勢天照大神 正八幡大菩薩 諏訪上下大明神

霧嶋六所大権現 天滿大自在天神御罰お各可罷蒙

候、仍契約如件、

應永十六年三月二日 うハ井 善了在判

ひらた 玄親同

ほんた 元親同

やまた 玄威同

かは山 道春同

ちやうしう景仙同

さた 道三同

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」七八四号文書ト同文ナリ〕

にいろ 久臣同  
ほんかう 道旦同

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 給分

右、一成村入久両村田数之事

十九町三反卅口 此内寺社一町  
三反卅

段錢拾貫三百七十五文

此外聊偽申候者、

伊勢天照大神宮 熊野三所大権現 正八幡大菩薩

天満大自在天神 諏方上下大大明神御罰各可罷蒙

候、

仍起請文如件

應永十六年七月七日 沙弥玄威（花押）

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」七八九号文書ト同文ナリ〕

『卅案文在山田七郎右衛門久通』

○ 畏言上

一右、意趣者、若御御座時者、一身大綱存、可致奉

公候事、

一若御御座候共請御意、可致忠節事、

一蒙仰条々、於一身生涯不背上意、可立御用事、

一和讒荒説入御耳候時者、被仰下可申上事、

若此条々偽申候者、

日本國中大小神祇、殊者

伊勢天照大神宮 正八幡大菩薩 熊野三所大権現

天満大自在天神 諏方上下大大明神御罰可罷蒙候、

應永十八年八月廿八日 沙弥玄威

進上 伊地知殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」八二四号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 契約

一右、意趣者、若御御座時者、人々大綱存、可致忠節事、

一於此内不慮子細時者、其方御大事をハ身之大事と存、身之大事をハ御大事と被思、生涯不可有替篇事、

一和讒凶害荒説時者、相互ニ申承候ハて信用あるましき事、

此条々偽候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神 正八幡大菩薩

熊野三所大権現 天滿大自在天神 諏訪上下大明神

御罰可罷蒙候、

應永十八年八月廿八日 (久豊) 玄喜 (花押)

山田殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」八二五号文書ト同文ナリ)

『案文在山田七郎右衛門久通』

○畏言上

一背上方就別人不可身持事、

一或ゑん者、或近付よて御意そむき、其人ニ被引ましき事、

一於身二心なく御用立申へき事、ひとへニ公方ならてたのミ存外無他候、

若此条々偽申候者、

日本國中大小神祇殊ニハ

伊勢天照大神宮 正八幡大菩薩 熊野三所大権現

天滿大自在天神 諏方上下大明神御罰可罷蒙候、

應永十八年壬十月二日 沙弥玄威

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」八四七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○一右、意趣者、今度一大事刻、取分御志候上者、『牛玉』

身之於生涯無替篇、近付通し申へき事、

一如此申定候上者、御大事をハ、身之大事と可存事、

一於此内不慮和讒凶害荒說時者、直ニ申披候ハテ、不可有信用儀事、

若条々偽候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神 正八幡大菩薩 熊野三所大権現 諏訪上下大明神 天滿大自在天神御罰お可罷蒙候、

應永十八年潤十月十一日 久豊(花押)

山田殿

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」八四八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅國市成之内南持留事、為給分所宛行也、早任

先例、可令領掌之狀如此、

應永十八年十一月十八日 久豊(花押)

山田殿

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」八五六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○薩摩國山田之内上別符事、為本領上者、所不可有相違也、早任先例、可令領掌之狀如件、

應永十八年十一月十八日 久豊(花押)

山田殿

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」八五七号文書ト同文ナリ)

『寫在山田七郎右衛門久通』

○右、意趣者、

一三ヶ國如何様雖轉變、就是非申談、御大綱をハ存身の大綱と、不可有二心事、

一如此申談候上者、今程の習、若和讒凶害之仁出

来候者、其人を敵と存、一切無信用可成親子之

思事、

一条々申定候上者、本末他人案ニ不入して、一家

繁昌候様ニ可申談事、

若此条々偽申候者、

應永十九年十一月廿五日 久豊

(本文書ハ「旧記雜録前編二」八九三号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○右、意趣者、

- 一 今度荒説一切信用不仕候事、
- 一 此刻大綱候之處ニ最前より取分御志なされ申候、生涯悦喜、御方ハ又別而御大事あるへき事なく候間、其御用にハ立申えす候哉、身のうんを開、次第に力を付申、子と孫とまで身之代ニ合力を申候て、本末堅大小事可申談事、
- 一 三ヶ國如何様ニ雖轉變、就是非申談、御大綱をハ存身大綱、不可有二心事、
- 一 如此申談候上者、今程習、若和讒凶害之仁出来候者、其人を敵と存、一切無信用親子可成思事、一条と申定候上者、本末他人案ニ不入して一家繁昌様ニ可申談事、

若此条と偽申候者、

伊勢天照大神宮 正八幡三所大菩薩 熊野三所

大権現 諏方上下大明神 稻荷大明神御罰を可

蒙候、

應永十九年十一月卅日 久豊(花押)

山田殿

(本文書ハ「旧記雜録前編二」八九六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 契約

- 右、意趣者、
- 一 仰公方、一味同心之思お成申、可致忠節之事、
- 一 於私者、大小事不殘心底申承、自然御大事之時者、縁者親類ニもひかれず、一身之大綱と存、御用仁可立申事、
- 一 不慮之讒者出来、凶害お申事候者、即時ニ蒙仰申入、可散不審之事、 若此條と偽申候者、

日本國大小神祇、殊以

伊勢天照大神宮 熊野三所大権現 正八幡三所大菩薩

薩 諏方上下大明神 稻荷大明神之可蒙御罰候、

應永廿五年十二月二日 (平田) 右馬助重宗(花押)

山田殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二九七四号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 又西村方へ一日狀を遣候、為御心得令申候、

平田それへ進候狀、委細一見候了、仍御念比もた

せて給候、誠々令悦喜候、雖毎度申候、其塚事、

一事以上裏面憑存候外無他候、就其、岩川事共、

あしよハなとにつけ候て、内儀申談候て、あひし

らハれ候へと申て候、次岩川事、近所事候へハ、

不御心置、其塚事共可然様御談合肝要候、又ほん

かう御目出すしく被申候、尙々為其悦、樺山殿

をこし申候、次一日一段承候間、事不可子細之由、

於谷山申候へく候、来月八月の心ニかゝり候、今

月の中ニ人を可有御遣候、返々其塚事は、いまの

一しほハ大綱候、御一人の大事とおほしめされ候

ハてハ、敵案ニ入候へく候哉、恐々謹言、

十一月廿三日

久豊(花押)

山田殿

(本文書ハ「旧記雜錄附録」一五八七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 御札委細承候了、兼又新納殿より狀一見候了、御

慥懃もたせて給候事、為悦無極候、隨而一昨日進

使者候之處ニ、御念比承候事、悦喜仕候、諸事可

然様ニ御了簡候て可給候、返々千万憑存候、其餘

事ハ、御一人大綱と被思食、うらおもて御ほねを

られ候て、今度身せんとおとつけて可給候、又承

候品事ハ、一日御使ニ申候しことく、来月極月に

て候程、以吉日今月中ニ進候へと、たうしゆん三

郎二郎方へ、今日申遣候、恐々謹言、

十一月廿六日 久豊(花押)

山田殿 久豊

(本文書へ「旧記雜錄附録」一五八六号・五八八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○大隅國小河院内一成村六町・見作十二町・同持富

三町・山田内上別符村五町五反・中村内入久四町、

已上廿四町五反之段錢四貫九百文

此外聊偽申候者、

伊勢天照大神宮 正八幡大菩薩 諏方上下大明神御

罰可罷蒙候、仍狀如件、

應永卅年二月三日 沙弥玄威(花押)

(本文書へ「旧記雜錄前編」二一〇一八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 畏言上

大隅國小河院内一成村六町・見作十二町・同持富

三町・山田内上別符村五町五反・中村内入久四町、

已上廿四町五反之段錢四貫九百文

應永三十二年潤六月九日 沙弥玄威(花押)

(本文書へ「旧記雜錄前編」二一〇四六号文書ト同文ナリ)

忠繁

王大丸 式部彦七

○氏久公與渋谷氏鬪、而退之路、山引合戰之時、與

本田弥七俱遂戰死也、

△忠尙

初忠豊 百王丸 三郎四郎 式部少輔 出羽守

入道名聖栄、

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 讓渡 嫡子百王丸所

薩摩國谷山郡内山田・上別符西村之事、

右所領者、重代相傳地也、

亡父忠経讓狀并関東御下知以下證文等をあひそゑ

て、ひやくわう丸讓渡ところ也、若ひやくわう丸

男子なくハ、わう五郎丸ニ可讓也、仍為後日以自

筆かきおく狀如件、

應永十年二月七日

久興(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二七〇〇号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 加官

嶋津百王丸

三郎四郎忠豊

久豊(花押)

應永廿二年八月廿二日

『上包』

嶋津三郎四郎殿 久豊

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二九三六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 畏言上

大隅國小河院内一成村六町・見作十二町・同持富

三町・山田内上別符村五町五反・中村内入久四町、

已上廿四町五反之段錢四貫九百文

應永三十年六月日

藤原忠豊(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二一九号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 請取申

山田殿御方よりの段錢

四貫九百文、慥請取申候、

應永卅二年潤六月十一日

泊 久篤(花押)  
安樂四郎太郎  
久清(花押)



平山又六  
久武(花押)

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二一〇四七号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 畏言上

大隅國小河院内一成村四町五反卅・同持富一町三反・一成持富兩村五町八反卅、段錢一貫百七十二文

應永卅五年五月廿二日 藤原忠豊(花押)

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二一〇八〇号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 段錢請取事

合一貫七十二文

右、所定段錢之狀如件、

應永卅五年五月廿五日

時任十郎衛門三郎  
益山 米政(花押)  
淨久(花押)

安樂  
久行(花押)

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二一〇八一号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 『牛王』  
契約

右、意趣者、於自今以後者、就大小事可申入事、抑於私者、親類縁者又者國と傍輩中之儀にもひかれましく候、御大事之時者、身之大綱と存、御用ニ可罷立申候、か様申定候上者、聊不可替申候、若又和譏凶害之輩出来、如何様之子細を申候共、不可及信用候、則以面直申承、可散不審お候、若此条と偽申候者、

伊勢天照大神宮 正八幡三所大菩薩 諏方上下大明神 四十九所大明神之御罰お可罷蒙候、

永享二年八月吉日 河内守兼元(花押)

山田殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二一〇三三号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津御庄大隅方恒吉内三町并薩州谷山内山田先知  
行分事、右、為祈所所宛行也、早任先例、不可有  
領知相違狀如件、

永享四年十二月廿四日 好久(用久)(花押)

山田殿

(本文書ハ、「旧記雜錄前編」二二一九号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○『牛王』  
契約

一仰 好久、雖為世上如何様轉變、一味同心御用可  
罷立事、

一無謂自訴お申、公方お恨申候者、不可然通雖催促、  
無承引ハ、其仁一人お同心ニ可捨事、

一公方より無理之子細一人ニ被仰下者、同心ニ侘申、  
無承引者、身之大綱と存、相共ニ可為一味事、

一就境目所務等事、無謂事お他所へ申懸者、是又致

催促、無承引ハ、一向ニ合力申ましき事、

一如此申談候上者、大小事不殘心底可申承候、若不  
慮在讒者、和讒凶害荒説出来者、直申披き可承事、  
若此条と偽申候者、

日本鎮守伊勢天照大神 熊野三所權現 當國鎮守正  
八幡大菩薩 諏訪上下大明神 天滿大自在天神 霧  
嶋六所大權現 新田八幡大菩薩 開門九社大明神  
十五社大明神之御罰子と孫と可蒙罷候、

永享六年六月廿二日 右馬助(平田重宗)姓宗(花押)

山田殿

(本文書ハ、「旧記雜錄前編」二二二五号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○『牛王』  
契約

一仰 好久、雖為世上如何様轉變、一味同心御用可  
罷立事、

一無謂自訴お申、公方お恨申候之者、不可然通雖致

『正文在山田七郎右衛門久通』

『牛王』

○ 契約

催促、無承引者、其仁一人お同心ニ可捨事、  
一公方より無理之子細一人ニ被仰下者、同心ニ佗申、  
無御承引者、身之大綱と存、相共ニ可為一味事、

一就境目所務等事、無謂事お他所へ申懸者、是又致

催促、無承引ハ、一向に合力申ましき事、

一如此申談候上者、大小事不殘心底可申承候、若不

慮之有讒者、和讒凶害荒説出来者、直ニ申披き可

承事、

若條と偽申候者

日本鎮守伊勢天照大神 熊野三所権現 當國鎮守正

八幡大菩薩 諏訪上下大明神 天滿大自在天神 霧

嶋六所権現 新田八幡大菩薩 開門九社大明神 上

下大明神御罰子と孫と可蒙罷候、

永享六年六月廿二日 (野辺) 藤原盛豊 (花押)

山田殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二一一五号文書ト同文ナリ)

一仰 好久、雖為世上如何様轉變、一味同心御用可

罷立事、

一無謂自訴お申、公方お恨申候者、不可然通雖致

催促、無承引ハ、其仁一人お同心ニ可捨事、

一公方より無理之子細一人ニ被仰下者、同心ニ佗申、

無御承引者、身之大綱と存、相共ニ可一味事、

一就境目所務等之事、無謂事お他所へ申懸者、是又

致催促、無承引ハ、一向に合力申ましき事、

一如此申談候上者、大小事不殘心底可申承候、有讒

者、和讒凶害荒説出来者、直ニ申披き可承事、

日本鎮守伊勢天照大神 熊野三所権現 當國鎮守正

八幡大菩薩 諏訪上下大明神 天滿大自在天神 霧

嶋六所大権現 新田八幡大菩薩 開門九社大明神

上下大明神之御罰子と孫と可蒙罷候、

永享六年六月廿二日 (石井) 平忠義 (花押)

## 山田殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一一五六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

『牛王』

契約

一仰 好久、雖為世上如何様轉變、一味同心御用可  
罷立事、

一無謂自訴お申、公方お恨申候者、不可然通雖致催  
促、無承引ハ、其人一人お同心ニ可捨事、

一公方より無理之子細一人ニ被仰下者、同心ニ侘申、  
無御承引者、身之大綱と存、相共ニ可為一味事、

一就境目所務等之事、無謂事お他所へ申懸候者、是  
又致催促、無承引ハ、一向ニ合力申ましき事、

一如此申談候上者、大小事不殘心底可申承候、不慮  
有讒者、和讒凶害荒説出来候者、直ニ申披き可承  
事、若此条々偽申候者、

日本鎮守伊勢天照大神 熊野三所権現 當國鎮守

## 山田殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一一五七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

『牛王』

契約

正八幡大菩薩 諏訪上下大明神 天満自在天神  
霧嶋六所大権現 新田八幡大菩薩 開門九社大明  
神 四十九所大明神 将長大明神御罰子と孫と可  
蒙罷候、

永享六年六月廿二日

(肝付) 周防守兼政(花押)

伴 兼直(花押)

一仰 好久、雖為世上如何様轉變、一味同心御用可  
罷立事、

一無謂自訴お申、公方お恨申候者、不可然通雖致催  
促、無承引者、其仁一人お同心可捨事、

一公方より無理之子細一人ニ被仰下者、同心ニ侘申、  
無承引者、身之大綱と存、相共ニ可為一味事、

一就境目所務等事、無謂事お他所へ申懸者、是又致催促、無承引者、一向合力有ましき事、

一如此申談候上者、大小事不殘心底可申承候、若不慮有讒者、和讒凶害荒説出来へ、直申披キ可申事、若此条と偽申候者、

日本鎮守伊勢天照大神 熊野三所権現 當國鎮守正八幡大菩薩 諏訪上下大明神 天満大自在天神 霧嶋六所大権現 新田八幡大菩薩 開門九社大明神 中津宮大明神之御罰子と孫と可蒙罷候、

永享六年六月廿二日 興長武清(花押)

山田殿

(本文書へ「旧記雜録前編二」一一五八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○『牛王』 契約

一仰 好久、雖為世上如何様轉變、一味同心御用仁

可罷立事、

一無謂自訴お申、公方お恨申候者、不可然通致催促、無承引者、其仁一人お同心可捨事、

一公方より無理之子細一人ニ被仰下者、同心ニ佗申、無承引者、身之大綱と存、相共ニ可為一味事、一就境目所務等事、無謂事お他所へ申懸者、是又致催促、無承引者、一向合力申すましき事、

一如此申談候上、大小事不殘心底可申承候、若不慮ニ有讒者、和讒凶害荒説出来へ、直申披キ可申事、若此条と偽申候者、

日本鎮守伊勢天照大神 熊野三所権現 當國鎮守正八幡大菩薩 諏訪上下大明神 天満大自在天神 霧嶋六所大権現 新田八幡大菩薩 開門九社大明神 四十九所大明神之御罰子と孫と可蒙罷候、

永享六年六月廿二日 河内守兼元(花押)

伴 兼忠(花押)

伴 貴重(花押)

山田殿

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一一五九号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津御庄大隅方小河院之内恒吉之村六町并花田平坊五町、為新所と宛行也、早任先例、不可有領知相違之狀如件、

永享七季六月廿三日

(用久)  
好久(花押)

山田殿

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一一七四号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津御庄大隅方下大隅郡之内二河村之事、為給分宛行處也、早任先例、領掌不可有相違之狀如件、

永享八年五月廿日

(忠國)  
陸奥守(花押)

山田殿

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一一八七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○嶋津庄大隅方小川院内百引六町事、為新所所宛行也、早任先例、領知不可有相違狀如件、

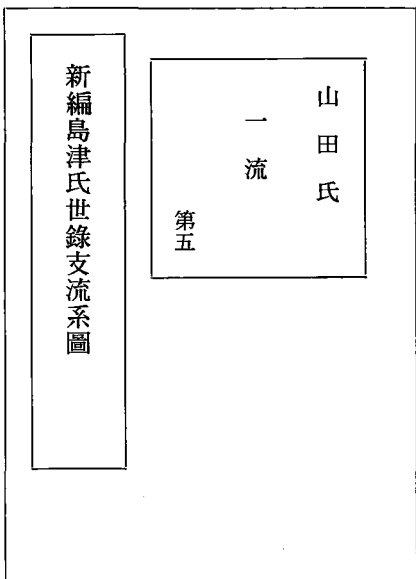
嘉吉二年三月十八日

(用久)  
持久(花押)

山田殿

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一二八一号文書ト同文ナリ)

表紙



山田氏系圖第五

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 老衰仕候へ共、いまも狩鷹心中計ハ数寄候、

同前候哉、

世上以後無音候、定而佗事候哉、隨而引目木望候、  
標

持せ候て給候者、歎喜候、恐々謹言、

六月九日

忠國(花押)

山田殿

『上包』

山田殿 忠國

(本文書ハ、旧記雜錄前編二〇二八三号文書ト向文ナリ)

○ 城州嵯峨大覚寺前往大僧正尊者有者、

將軍家義教卿號普光院、足利判官、義康十一世之孫也、令弟、縑素之冠上、

昆弟之交亦如水魚然、爰永享末年既會叛逆之得聲

矣、時運之不祥乎、天命之當然乎、未知所其然也、

于時 大樹痛懼闕于牆之有禍、而有矛楯之隔於生

胸宇、其起於內者、已著於外矣、尊有一窺見之、

則能知害之逮其身矣、是故潛出寺門、微服徒行到

于一浦、求得扁舟、遠渡西海、適于日州福島院、

主于野邊氏某家、深窺身體、厚韜聲名者也、傳聞

大樹脫寇於蕭牆中者、忽不忍令骨肉隱惡之陷罪、

以至于此矣、蓋夫然乎、人而破大倫、則隣于禽獸、

是可忍也、孰有一人之為眞服者哉、雖然欲為朝敵亂天下者、不可不誅、以不得已、而搜求者、自邦畿暨四海、未能得焉、漸經年月之後、漏聞于京師、則曰、是天所以與吾、敢勿徬徨、即差使節告誅戮之命於 太守、因茲 太守陸奥守忠國公、遣鹿屋氏・牧氏・恒吉氏・忠尙四輩為弑戮、且有命曰、大覺寺者、其身 大樹令弟、位階大僧正也、不可不敬、忠尙島津家之一族其源不卑、必可為梟首役云云、不獲固辭、而嘉吉元年辛酉三月十有三日、弑于福島院尊有享年三十七、且復近臣有別垂讚岐房有善者、役小角之流也、自他所歸其席、瞋目切齒呪囂當敵、以把獨古即刺己額立殉死畢、主從與俱嗚呼哀哉、忠尙熟謂、云 大樹連枝、云大僧正位、何莫所弑之罪乎、不如追跡殉死以子孫安泰之為陰謀、丁此之時、 忠國公使新納某・北郷某傳命曰、彼者朝敵、未嘗伐 朝敵不以干戈者也、唯汝何罪陷之有乎、敢勿自殺、及再三加制禁、是以全命、經八十

有餘歲霜也、

『在山田七郎右衛門久通』

○ 又長門介殿出陣之由、此方にも聞得候へ共、分明にハ無候、伊東衆之合戰ニ與有時宜共申候、誠ニ計略かと存候、然共世間ニ申候雜説ニより候之間、不審千万に候、此方無音ニ罷過候、御無心元候、但御意ニ被懸候間、御免可有候、其方憑候之外無余儀候、自然之時ハ可申入候、預御助候者可畏入候、御狀委細ニ致披見候、如仰伊東衆飮肥へ打出、如前ニ陣取候、江州之難儀不申及候、尤か様之御左右、可令申候處ニ、長尾之御番之由承候間、遅々仕候、今度者、前よりも指寄陣取候、日々ニ城秀之候、去十日大手犬馬場之下江之城戸ニ着候て、既ニ城戸取可退候處ニ、向會防候程ニ、又一手大龍寺之内より切上候所を、征矢鷹俣にて仕候間、



殊外之大手負ニ成候て引退候、少く牆越ニ太刀打  
共申候、又同十二日水手より責上候を、身命を捨  
防候程ニ、是も殊外之手負ニ成候て、

『自此奥欠』

(本文書ハ、「旧記雜錄附録二」一六四号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 尙とおひの事、何と御座候らんと存候、今程

北郷殿是ニ御座候、おひのうしろまきの御談  
合にて候、相州・薩州御座候、又地かねの事  
うけ給候、今程者持不申候、上船ニたつね候  
て下候者、可申談候、

如仰此間不申入候處、此之音問畏入存候、殊犬皮  
・鹿皮以上六枚もたせ預候、恐悅至極候、兼又一  
日於吉田境目、當所之若衆はかり野伏ニ被出候朝、  
吉田衆出合付送候、さ候處、當所迎野伏少く走着  
候間、合戦候、敵餘多討取候、身方一兩人討死候、

一人者中俣十郎にて候、其外者非差者候、此方衆  
殊外之若衆はかりにて候か、近来能被仕候、已後  
勝利候、外聞實御大慶此事候、就中、飢肥ニ陣取  
候、彼境御難儀たるへく候、迷惑此之事、又京都

より薬師竹田法印被下候、取合可有御推量候、次  
ニ一日如申候、末吉之荷物召よせ度候、人足之事

可申候、恐く謹言、

『文明十七年』

壬三月廿二日  
(平田) 兼宗(花押)

山田殿御返報

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」一六〇九号文書ト同文ナリ)

○ 福島院中土人、往々會不測菑害怪異、則曰、是前  
大覚寺尊靈之所為也、因茲、故有司美作守藤原直  
久相攸於城外、高築壇新建社以崇其靈、會忌日之  
運、則致敬畏以為祭神之禮矣、其後島津豊後守忠  
朝、恐祀其神敬之不足、差使節於京師、依神祇長  
從二位上大中臣卜部兼俱、謹請神號、兼俱應諾以

達

天聰、明應七年九月廿五日、賜福島大明神嘉號、其冊翌年到于當院、是故、撰于夏五吉日良辰、齊明盛服以設非常祭祀、無貴無賤群集濟濟焉、於茲發揚

宣旨神號、則洋洋乎、如在其上與左右矣委曲有緣起也

○永正十二年乙亥、太守又三郎忠治公島津莊內薩摩方覺島郡、建立梵宇號大興寺、令權大僧都法印頼盛定開基始祖、為大覚寺大僧正菩提所、是又曾祖父陸奥守忠國、奉大樹之命、忽弒於法體、迄於子孫其恐銘於心肝、故如斯云云詳在宇寄進狀

式久

王五郎丸 太郎三郎 信濃守 入道名聖祐、

忠通

式部少輔

女子三人

久基

右京亮

忠秀

左京亮

忠重

義種

又助

女子

義種室、

又三郎

忠方

信濃守

○大隅國肝付院於小原城遂戰死、法名成準號揆觀、

式部少輔

泰久

治部少輔

『八代』  
△忠廣

三郎四郎 式部少輔 加賀守

秀久

弥次郎 淡路守

『九代』  
△忠豊

四郎 式部少輔 河内守 安藝守 母西谷讃岐  
守久信女也、

405 『正文在山田七郎右衛門久通』

○夫よりの御狀くハしく見申候、これニもうけ給候  
へハ、ほん所領候とて申され候、是こそさいわい  
此事候、御はんほうたい候て、しんしゃくなく、  
大かくの御判おとなニ御目ニ御かけ候へく候、こ  
とにきもつきの兼重のときのちはつ、高氏の時御  
はん、京都きやうとより貞久、しきふ儲三郎所御下、  
其もんしよをももちて候、今度之次ニ、所領を給  
候ハす、あまりニうまれかへりニ罷成候、せめて  
ハ今さふらへニ御なり候へかすと存候、くハしく  
よく御見ひらき候へく候、ふるき御はんをもたし

406

なミもちて候ハ、かやうの時ため候、いそきく  
御さううけ給候へく候、恐と謹言、

三月二日

(山田忠尚)  
しやうえい(花押)

河内殿

しやうえい

『上書』山田河内守殿 聖栄

(本文書ハ「旧記雜録附録二」一六六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○今度之弓箭、從最前被成御志候、依其寄郡從坂上  
于今相拘候、忠節之至無比類候、於子と孫と不可  
有忘却候、弥憑入候、此度之弓箭執拔候者、可致  
其礼候、委細者、若狹守方可被申候、恐と謹言、

七月十九日 忠昌(花押)

山田河内守殿

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一七四一号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○先年弓矢之時敵同心候事、至于今者、改其心中、於自今以後、不可有二心之者、加神名被遣證文候、恐悦候、如此之辻、於無相違者、聊茂不可存等閑之儀候、恐と謹言、

十月十三日

忠昌(花押)

山田河内守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一七五五号・「旧記雜錄附録一」七〇一号文書ト同文ナリ)

『在山田七郎右衛門久通』

大追物手組事

十一十一十一十一二足  
参河守殿

十三十二十一十一七足  
子と法師殿

十一十一十一一四足  
黑法師殿

十二二十三十三二九足  
與次郎殿

十二十一十一一七足

十一十一十一一足

『在山田七郎右衛門久通』

兵庫助殿

竹井宗左衛門尉

十一十二十一一十四足  
刑部少輔殿

十一十二十一一十四足  
竹井才次郎

十二二十三十二二十足  
式部少輔殿

十一十一十一十二足  
中河宮法師

検見

喚次

幸阿弥

延徳貳年九月十八日

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一六九六号文書ト同文ナリ)

大追物手組事

十二二十三十一七足  
参河守殿

十二二十三十三十一廿一足  
子と法師殿

十三十一十一一十九足  
式部少輔殿

十一十一十一一十五足  
與次郎殿

『在山田七郎右衛門久通』

○ 犬追物手組事

左衛門佐殿十三疋 次郎三郎殿六疋  
 嶋津左馬助十六疋 嶋津助四郎七疋  
 嶋津六郎二疋 嶋津治部少輔八疋  
 渋谷太郎次郎十疋 梁瀬源五七疋

(本文書へ「旧記雜錄前編」二一六九号文書ト同文ナリ)

幸阿弥 検見

延徳三年正月廿一日

喚次

十一十一 十一十一 十一十一 十一十一  
 十一十一 十一十一 十一十一 十一十一  
 黒法師殿 四郎次郎殿  
 十一十一 十一十一 十一十一 十一十一  
 刑部少輔殿 兵庫助殿  
 十一十一 十一十一 十一十一 十一十一  
 十一十一 十一十一 十一十一 十一十一  
 七郎殿 竹井宗左衛門尉  
 十一十一 十一十一 十一十一 十一十一  
 十一十一 十一十一 十一十一 十一十一

『在山田七郎右衛門久通』

犬追物手組事

近江守殿四疋 豊後守殿八疋  
 四郎殿十疋 嶋津式部少輔三疋  
 嶋津次郎三郎十三疋 嶋津治部少輔五疋  
 嶋津六郎五疋 羽嶋越前介六疋  
 嶋津左馬助十一疋 嶋津助四郎二疋  
 嶋津六郎三郎二疋 平田平三郎十一疋  
 渋谷太郎次郎七疋 梁瀬源五一疋

(本文書へ「旧記雜錄前編」二一八六号文書ト同文ナリ)

検見

喚次

嶋津六郎三郎二疋 羽嶋新三郎五疋  
 嶋津式部少輔四疋 平田平三郎七疋  
 四郎殿十二疋  
 嶋津兵庫丞 嶋津藏進  
 永正十三年三月十三日

左衛門佐殿十二疋

検見 喚次

嶋津兵庫丞 嶋津藏進

永正十三年三月十六日

(本文書ハ「旧記雜録前編二〇一八六九号文書ト同文ナリ」)

『在山田七郎右衛門久通』

○ 犬追物手組事永正十三年六月一日

嶋津左衛門尉 吉田若狭守

嶋津助六 本田三河守

税所左衛門尉 本田刑部少輔

廻兵部少輔 桑波田孫六

石井中務少輔 伊地知又七

加治木刑部少輔 平田五郎左衛門尉

嶋津源左衛門尉 肝付三郎五郎

嶋津太郎左衛門尉 嶋津又七郎

検見 喚次

嶋津十郎左衛門尉 伊地知四郎左衛門尉

(本文書ハ「旧記雜録前編二〇一八七六号文書ト同文ナリ」)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 又一昨日其方へ御狩物立候由承候て、刀落申

候、此方物立事かけん仕合候、近比思出仕度

候へ、又御用ケ間敷申事候へ共、くまでのゑ

にことをかき申候、しいの木のぬきやなど候

ハ、のそミ存候、たのミ存候、有合候ハ、

今日使ニ可給候、又くしらの御きふん承度候、

大年様御心得候て可給候、

二三日者不申承候、何事共候哉、此方無指事候、

中野方昨日こそしふしへ被罷越候、貴所様彼方へ

御越いか候哉、内者御急候て可然存候、殊ニ大

年様被仰候子細兵右急度被仰、則可為目出候、我

等も中野方万事頼候由申候間、為御心得候、恐々

謹言、

仲春廿三日

久利(花押)

『上書有之』

山田安藝守殿御宿所

久利

『右裏有之』

新納尾張守

(本文書ハ「旧記雜録附録」三二九号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 尙と爰元之活合之用心尤可入候、御油断有ま

しく候、北原殿へ御音信候、定先と親類

可被進候哉、又殿さま御出頭候ハ、西堅御

指有へき之由間得候、返と彼御合力頼存候

く、

音書之趣得其心候、仍從廻豊州之依御意見、野臥

可被停止候哉、尤可然候、隨而廻之者五六人自此

方指候、忠朝無為御料理候處ニ、下と如此之動曲

事候由、御意候て可有御返にて候、され共直ニハ

如何候と被思召候之間、豊州まで可被進にて、如

垂水取入御遣候、定豊州御調法有へく候哉、さ様

之時義ニ付候て、鹿兒へ使僧御上らせ候、被帰候

者可聞得候、折節 殿さま道場法事ニ御詣候、爰

元子細存仕候間、不請御意候ても大概令申候、今

度組衆皆同御出頭、殿様御同道候へと被仰出候、

此間ハ樺山殿・北原殿両人之前、御屋形様御意不

窺候て相滞候、頻に豊へ被仰候間、豊も又屋もし

へ堅御申候条、御赦免之由候、彌・肝ハ所領之事被

申候へとも、殿さま豊御談合候て御申候間、御承

引候、此上ニ肝ハ尙と所領被望候、不是非候、御

出頭者今月末たるへく候也、其時分以參上御目ニ

御懸可然候、さのミく夏大鹿多被聞召候てハ、

腹中可有御煩候也、將又、我等かこ嶋御供ニあた

り候、當病与申老衰与申、迷惑此事ニ候、賢察之

前ニ候哉、萬期後音候、恐と謹言、

五月十六日

匡久(花押)

『上書有之』

山田安藝守殿御返報 匡久

『右裏ニ有之』  
隈江

(本文書ハ「旧記雜錄附録」一三三〇号文書ト同文ナリ)

415 『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 又(マ)かなかみに迎御返候て、舟にもめせず候、

えせ御合力にてこそ候へ、但かこへ御音信可有候歟、又庄内へ番之事、已四郎殿にて被仰候處、所より無沙汰候とて、ことのほかの御述懐に候、為御心得申候、

貴殿さま此境就御越、御音書則懸御目候、御悦喜之由申せとて候、仍早く可有御渡海候之處ニ、禰寝殿・肝付殿御待候之間延引候、来十六舟津まで両家可被立にて候、相州へ飛脚御まいらせ候、去十一帰来候、又六郎殿可有御出頭候、順逆殿様御法第と御頼にて候、世中先く可然こそ候へ、此節

境目く一段用心可入事ニ候、恐々謹言、

六月十三日 匡久(花押)

『上書』  
山田安藝守殿御返報 隈江 匡久

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二一五四号、旧記雜錄附録「一三三三号文書ト同文ナリ)

416 『案文在山田七郎右衛門久通』

○ 又此狀夜前認候、今朝巳刻肝付三郎殿渡海候、

今日者悪日候間、定明日可被懸御目候哉、次ニ樺山殿未渡海候、尚候覽と存候、隨而庄内之時義、御左右可然候、禰寝殿ハ例之延にて候哉、未承着候、(舟之)

去十六日、從肝付殿被進使僧、同十七御出頭、可目出度之由候条、同十七巳刻程、被解纜候從時、分思之外吹晴候て、安くと御出船候、一里程紀伊守殿被挽出、御迎御出候、一遠千かたにて候間、御座舟從渚遙被留候、然處、



地下之海士共餘多御舟ニ添手、汀ニ引のほせ候、  
 一見物貴賤多と合手おかミ候キ、且者そゝろおも  
 はゆく、一御舟着候へハ、從豊州以大村方、舟本  
 ニ御禮候、一御宿に御出候へハ、以二郎四郎殿  
 豊州へ御禮御申候、一此前にて候者、老中まで御  
 着之御禮雖可被仰候、そ忽之狀、被思召候間、斟  
 酌ニ候、此等之趣、以大寺方豊州へ被仰候、無其  
 御返事、同從御屋形様大寺治部少輔方にて、遮而  
 着之御禮被仰候、其御禮以二郎四郎殿御申候、老  
 中へ恒吉佐渡方にて被仰候、一御宿ニ最前伊地知  
 殿・梶原殿被參候、其後池袋殿・平田殿被參候、  
 其後實久御内之方河田飛彈殿被參候、  
 一殿様御宿ニ遮而豊州御出候、其後以紀伊守殿御屋  
 形様ニ早と殿様御對面可有之由、被仰出候、其御  
 覚悟候へと内義候条、如佳例御酒御上候、豊州戊  
 刻程ニ御屋形へ御指出候て、早と御參候へと被  
 仰候条、やかて殿中へ御參、御目御懸候、目出度

候、一殿中被明御隙、御退出之刻、眞幸使僧・本  
 田紀伊守殿・同又五郎殿以同船參着候、音信御門  
 外にて被聞召、豊州以談合此等之趣被窺候處、緯  
 深候間、無對面候、明日者惡日候、来十九可有御  
 覽之由、被仰出候間、殿様各々ニ先以御見參候、  
 一此間者、連日風雨以之外ニ候つる處、御出船之砌よ  
 り天氣能候て、爰元仕合如意満足ニ候、偏ニ天道  
 ニ御相叶候歟と頼敷存刻候、何事もく被任御心  
 候、却おそろしく存候、此方之時儀ハ可然候、至  
 爰庄内三ヶ所之間一ヶ所も越度候てハ、何之曲も  
 有間敷候、御油断有ましく候、一周防殿・壹岐殿  
 以別紙雖可申候、此方取乱、又者便舟急候間、不  
 能巨細候、此等之由可預御心得候、又此狀を兩所  
 へ可有御遣候哉、しふしへハ申上候、為御心得候、  
 萬期後音候、恐と謹言、

六月十七日

匡久在判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五六号、「旧記雜錄附録」三三二号文

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 尙と世間之躰無心元候也、其方城誘御用心専

一候、あもしへも申度候也、

如仰此度參候て、面談本望満足ニ候、世間之時義

何と可成候哉、終ハ於弥可破候敷、西賢様愚宿ニ

御座候、無會尺不及申候、又貴所様御傳言候由可

申候、次ニ山こはう候とて無曲こそ候へ、事と取

乱候て不能巨細候、恐と謹言、

六月廿八日 匡久(花押)

『上書有之』  
大年御同章

匡久  
『右裏有之』  
限江

(本文書ハ、「旧記雜錄附録」一三三三号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 尙と申候、御名乗之事、御校量可然候、但不

可過御恩安候、

殿様此境就御滞留、御音信御申之趣、致披露候、

御祝着之由被仰候、

一御屋形様(忠兼)殿様江被召御酌候、然者則 殿様御腰

物御進上候、則 御屋形様御腰物殿様江御取せ候、

其外色と御懇之儀ニ候、

一時久御奉公如前代御申候へと、以面御頼候、如此

条、殿様威勢不及申候、一相州御出頭相定候、

一祢・肝座敷之上下依被争候、出頭延引候、豊殿

色と御辛勞、御屋形様江被懸御目候、目出度

候、一實久・相州御間、御和融之義、是又御料理

最中候、一貴様御名乗 御屋形様御名乗ニ候、如

何之御分別候哉と、殿様 御意に候、為御心得候、

每事期後音候、恐と謹言、

七月十日

匡久(花押)

『上書』

山田安藝守殿御返報

隈江 匡久

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二一五八号・「旧記雜錄附録」三三四号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 尙々急々可有御帰候、

芝方其境へ御番之由候、此前有方へ手仕可有候間、芝方者可有御遣之由、上井但馬方へ御意候つか不被申届候哉、来廿三可為仕役候、大崎人衆悉御帰候へと申せとて候、此之由各々へ可被仰聞せ候、此境無何事候、恐々謹言、

七月廿一日 匡久(花押)

『上書有之』

山田安藝守殿御宿所

匡久

『右裏有之』

隈江伊勢守

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ やはり鞍ニ成候する皮御所持候ハ、一枚可

給候、不申共にて候へ共、冬毛望ニ候、万事頼存候、衆中ニ所持候ハ、御所望候て可給候、

書狀之趣得其心候、仍初千代殿御下ニ被參候人衆、四ヶ所衆蒲生方・邊河殿・佐多殿此等にて候、額娃方何方共不見得候、又北郷殿・北原方和融未成候、此節番城誘無油断様にと御意候、次三夜留之用意諸人ニ可被仰付候、依一左右御動あるへく候、萬期後音候、恐々謹言、

霜月廿一日 匡久(花押)

『上書』

山田安藝守殿御返報

隈江 匡久

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二〇七〇号・「旧記雜錄附録」三三五号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 又番城誘堅被仰付候へと御意候、

来十五可有御動候、五日之可為誘候、依今一左右可被打出之由、御意候、御油断有間敷候、又境目ニ敵見え候哉、人衆出時義を見せられ候へと申せとて候、次自清水音信候、當時無何事候、眞幸之様今日及者、不聞得候、為御心得候、恐と謹言、

三月十一日 歳信(花押)

匡久(花押)

隈江  
中野

『上書』  
山田安藝守殿御宿所

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二〇二二号・「旧記雜錄附録一」三三六号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 又本田紀伊殿伯耆方へ為礼被越候、被及聞召候哉、為御心得候、

其方之人衆少と清水之番ニ御たて候へと御意候、

来月三たるへく候、十日番ニ候、巨細之条、重而可申候哉、毎事期後音候、恐と謹言、

卯月廿八日 匡久(花押)

『上書』  
山田安藝守殿御宿所 隈江  
匡久

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二〇二五号・「旧記雜錄附録一」三三七号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 又今日中ニ(い脱カ)たるも、山東よりの使僧、從志和(衍カ)

知より使僧、池袋殿よりの使僧、自都城之使者、更不得寸隙候、御察之前候哉、其様御活計不及申候、御うらやましく候、

尾州清水ニ可有御立候、十日かハリにて候、今明日此方へ御越有へき事候、遅こそ候へ、其かハリに、其方之衆ハ可被立にて候、其覚悟肝要ニ候、

424

姫木此方ニ現形候、下大隅邊も現形之由候、待居候、又北郷殿曾於郡番衆御入候、如何ニこそ候へ、又我等長在京ニはやくたひれてこそ候へ、そと御指出候て、世間之時義被聞召候て可然候、恐々謹言、

五月四日

匡久(花押)

『上書』

山田安藝守殿御返報

くまへ  
匡久

(本文書ハ「旧記雜録前編二」二〇二八号・「旧記雜録附録一」三三八号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 尙々北郷殿心替候者、都城へ可取懸候、御油断有間敷候、今明日之間、物之躰みえ候へく候、

北郷殿以談合、曾於郡格護可有ニ相定候之間、去廿日、以両計矢被射初候處ニ、本衆北郷殿人衆ニ

425

城戸をひらき成合候、此方之番衆をハ子細候て、少被相待候へと被申候間、内々この人衆末吉寄候、萬一北郷殿心替候者、都城へ可懸指覚悟ニ候、為御心得候、十二九八日出度可成行候哉、萬期後音候、恐々謹言、

五月廿三日

匡久(花押)

『上書』

山田安藝守殿御返報

くまへ  
匡久

(本文書ハ「旧記雜録前編二」二〇三三号・「旧記雜録附録一」三三九号文書ト同文ナリ)

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 又一昨日末吉より罷帰、肝付へ罷越候、辛勞中く無申計候、殿さま昨夕御帰候、為御存知候、三俣雜説火急ニ候間、豊州急度御参會あるへきにて候、面白弓矢之躰にてこそ候へ、

去九伊地知方・梶原方・池袋方以同心、垂水ニ被  
相動候、彼城幾程有間敷候、自然廻・敷禰邊之足  
輕つゝくへく候哉、其武略として境自邊ニ足輕御  
出候て可然之由、御意候、御油断あるましく候、  
恐と謹言、

六月十一日

匡久（花押）

『上書』

山田安藝守殿御宿所

隈江  
匡久

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二〇三三号・「旧記雜録附録一」三四〇号文  
書ト同文ナリ）

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 尙と堅可被仰付候、又樺山殿・三河殿被越候、  
あましたる事にてこそ候へ、返く御ほんそう  
あるへく候、

来十三廻へ可有御動候、然者、殿・四郎殿御出張  
候、十五以前六十以後、出家も不殘被立候へと、

御意候、御油断有ましく候、恐と謹言、

七月十日

匡久（花押）

『上書』

山田安藝守殿御宿所

くまへ  
匡久

（本文書ハ「旧記雜録前編二」二〇三四号・「旧記雜録附録一」三四一号文  
書ト同文ナリ）

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 尙と三日より御動有へく候、又去廿三夜、相  
州伊作城へ被切乘、究竟之人多く被打取、南  
郷も知行候、為御心得候、

来月三日至廻・敷禰、打つゝき三日御動あるへく  
候、其方之人数奔走候へと 御意候、御油断有間  
敷候、恐と謹言、  
『大永七年』  
七月卅日

匡久（花押）

『上書』

山田安藝守殿御宿所

くまへ  
匡久

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二〇四号・「旧記雜錄附録」三四二号文  
書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 尙と蒲生衆・祇答院衆高名無是非候、又壹岐  
守方一昨日從眞幸被帰候、北原殿弥急と被申  
候、又自豊州も急と被仰候、今明之間、遠州  
為使者、可有御越候、伊地知方ハ明日可被参  
候、本田方いまた逗留候、又於内城護摩にて  
候、又山口神前にてハ、眞説般若にて候、萬  
辛勞仕候處ニ、霜女鹿にて活計のミ候、御浦  
山敷候く、  
御家景中神水被仰付候、案文進之候、今月中可然  
候歟、但御遠慮不可過候、又 御屋形衆蒲生へ三  
千程被寄候處ニ祇答院統候て、合戦二度候而 御  
屋形衆廿人之上越度候、手負切捨などハ不知数候  
之由、自清水注進候、目出度こそ候へ、恐と謹言、

八月廿八日 匡久（花押）

『上書』 匡久 くまへ

山田安藝守殿御宿所

〔本文書ハ「旧記雜錄附録」三四三号文書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 如仰至廻被得勝利候、目出度候、此節一段御用心  
肝要ニ候、将又俄ニ山東へ之義被仰出候、迷惑御  
察之前候哉、就中御鷹鷹取候、旁以被得利候、目  
出度候、御同前候哉、毎事期後首候、恐と謹言、  
九月七日 匡久（花押）

『上書』 隈江 匡久

山田安藝守殿御返報

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二〇六二号・「旧記雜錄附録」三四四号文  
書ト同文ナリ〕

『正文在山田七郎右衛門久通』

○ 尙々前日御使者畏入候、右馬頭ニ然々申与候、

委得其意候由被申候、次從肝付境聞得候雜説、

八朔比可被相動趣之由候、彼雜説者、毎々申

散候、可有如何候哉、事實之由候、御方御格

護之城ニ御用心可入之由も申候、可為何方候  
之哉、

先日者不寄存知候之處、以御使節覽鳴之覺、御内

儀乍勿論忝存候、仍貴久様之御老中御存分之趣、

益房殿様右馬頭家景可有御光儀事、眞幸ニ御逗留

以来被承候、盡種々詞、難渋雖被申候、去年秋之

末御越候、何共不及了簡、御逗留候、家景之迷惑

不過之候、然處、北郷殿・右馬頭以談合、三ヶ國

旁被頼存候、此人衆不被相加衆、樺山殿・肝付殿

・北原殿・伊地知殿此四人之由候哉、驚存候、我

等頼候、右馬頭企不被申候事、各々御存知之前候、

日本國中諸神・諸佛、殊者正八幡大菩薩 鵜戸六

所大権現 霧嶋大権現 天満大自在天神可罷蒙御

罰候、少茂偽不申候、右馬頭存分無覚悟候、ケ様

之虚言、貴久老中へ從何方被申入候哉、無念之至

候、如此之儀被聞召置候上ニ、北郷殿御難儀を可

有御尋之由、貴久様仰事通承及頼候者、於身上子

孫迄も御憑敷難有存候、次自肝付之使僧高崇寺、

肝付玄蕃允方為使者越候時、拙者可有様之存分申

出候と于今存知、右之段、肝・鹿へ虚言被申上候、

ケ様之儀者毎之事情間、中々無申事候、世上之

躰迷惑之ま令申候、万一之時者鹿・伊之老中へ

御心得憑存候事候、恐々謹言、

『天文四年歟』  
七月廿六日

久参（花押）

『上書』

山田殿

敷称殿

御宿所

日置伊勢守

久参

(本文書ハ「旧記雜録前編二」二三四九号文書ト同文ナリ)



<p>『十代』 △久親</p>	<p>初久義 三郎二郎 式部少輔</p>	<p>『正文在山田七郎右衛門久通』</p>	<p>○ 小名字号山田</p>	<p>藤氏鳴津三郎二郎殿</p>	<p>實名</p>	<p>久義</p>	<p>于時天文三曆<small>甲午</small>三月日</p>	<p>南樵雪 (花押)</p>	<p>(本文書ハ「旧記雜錄前編二」三二二四号文書ト同文ナリ)</p>	<p>忠通</p>	<p>式部大輔 上總介</p>	<p>久武</p>	<p>又七郎 忠時依無世子為猶子也、</p>
---------------------	----------------------	-----------------------	-----------------	------------------	-----------	-----------	-----------------------------------	-----------------	------------------------------------	-----------	-----------------	-----------	------------------------

<p>『十一代』 久老 久辰</p>	<p>久左衛門尉 備後守 久左衛門尉</p>	<p>比志島彦太郎室、</p>	<p>『十一代』 △忠時</p>	<p>出羽守</p>	<p>(44)</p>	<p>駿河守</p>	<p>僧</p>	<p>日州綾道場住持、</p>	<p>女子</p>	<p>本田源右衛門尉室、</p>	<p>『十一代』 △久武</p>	<p>又七郎 民部少輔 次郎右衛門尉</p>	<p>○永祿三年庚申正月廿四日誕生、</p>
----------------------------	----------------------------	-----------------	----------------------	------------	-------------	------------	----------	-----------------	-----------	------------------	----------------------	------------------------	------------------------

○忠時無可統家統之子、故為猶子、連続彼家、實上總介忠通子也、

『正文在山田七郎右衛門久通』

○急度令啓入候、仍從 御前可申之旨候、子細者、

御産之弓被遊候御當家之日記御所持之由、被聞食付候、到其儀者、有御 上覽度由候、早々御持參

可為肝要候、御延引有ましく候、猶期後首之時候、

恐々謹言、

『天正年間』

三月一日

經定（花押）

村田越前守

山田殿

參宿所

經定

（貽紙）

經定ハ貴久公御代ノ義久公御代迄御家老

『上包』  
山田殿

村田越前守

曾於郡

進

かこしまより

（本文書ハ「旧記雜録附録二」一一六八号文書ト同文ナリ）

『正文在山田七郎右衛門久通』

○高麗渡ニ付条ト事但手火箭百ちやうノ仕立

一ころろさしにて可被參人ハ、其心さしのほどを身

にかへ可申上候事、

一御めにかゝらさる人ハ、御目にかけて候て、後日歸

朝之時、御扶持を申遣へき事、

一如何とかある人なりとも、令同道候て、御めにか

けへく候事、もしならぬ事候ハ、永代我等同心

たるへく候事、

一火箭持候て可被參人ハ、向後其首尾一途可申立事、

一御歸朝之時、一途御扶持を可申遣事、

一御扶持なく候ハ、我等知行を立衆合中ニ可遣候

事、

一いつれもぎりをおもふ人に在いては、身にかへ可

得御意候事、

右条々偽申ニをいてハ、諸軍神之御罰をかふむ

るへく候也、仍如件、

高麗立衆中

参  
〔本文書ハ「旧記雜錄後編三」一七七号・「旧記雜錄附録二」一六九号文  
書ト同文ナリ〕

上井仲五(兼政)  
(花押)

「十三代」  
△久通

七郎三郎 七郎右衛門尉

○天正廿一年癸巳正月廿一日誕生、

○慶安元年戊子孟春、薩・隅・日三州

太守薩摩守光久公、令有司自高祖忠久至當今一族  
本支苗裔、撰集忠功恩賜之書、以編大系圖、今年  
秋冬之交、自家之書亦有可帶出之命、故元祖式部  
少輔忠繼以往帶未泯而所有之雜書數百、久通發於  
日州救仁院志布志私宅、經於海陸、呈薩陽覺府之  
官家、其中逸要者殆挾拔貳百許、使數輩書寫焉、  
以返賜本書於己、是間留滯者兩三月、且復有自家  
古譜文字紙繆書寫脱略而不審多般者、備之於國老

忠増

島津圖書頭久通之一覽、而請去邪婦正、久通許諾  
以考於郡譜、而後其是者存之、其非者刪之、改古  
譜之紙繆、賜新寫之系圖、珍戴百拜曰、自他與俱  
子孫繁茂壽筭龜鶴、且祝萬萬歲、敢莫措牟、

權兵衛 覚太夫 入道名宗心、

○慶長元年丙申五月二十八日誕生、母加久藤士伊

地知筑後重則女、

○太守光久公徵忠増於志布志而為鹿兒島之士、忠

増献御太刀・御馬代、而奉謁謝徵拔之事於公、

從是子孫代代進御太刀、

○忠増數十年之間、勤仕納殿役、

○貞享四年丁卯五月八日死、享年九十六、法名宗

椿居士、

忠張

七郎三郎 權兵衛

○元和七年辛酉六月三日誕生、母志布志土岩崎八郎兵衛女、

○寛文八年戊申八月二十二日死、法名秋山清江居士、

女子

帖佐次左衛門宗秀妻、

○母同前、

女子

家村彦左衛門重種妻、

○母同前、

忠時

豊松丸 六兵衛

○寛永十九年壬午四月二日誕生、母同、

○為木脇次郎兵衛祐昌之智養子、

女子

伊勢治郎右衛門貞繼妻、

○母床次勝左衛門正種妻、

忠次

豊千代 七郎兵衛

○母同、

○延寶四年丙辰五月八日死、法名一無正吐居士、

女子

山田七郎右衛門久陳妻、

○母同、

豊千代

○母大野休左衛門女、

○天和二年壬戌八月二十九日死、法名無相幻心童子、

忠昉

初忠時 豊松丸 六兵衛 覚太夫

○忠昉初雖相統木脇祐昌之家、甥七郎兵衛其子豊

千代父子相繼早世、而無可継家者、於是忠昉訴

公蒙恩免、使嫡子六兵衛祐明嗣木脇家、天和二

年壬戌九月九日復本家、翌年十月拜謁 太守綱  
貴公、奉謝繼目之事、時御太刀一腰獻之、  
○元祿十年丁丑正月六日病死於播州赤穂、享年五  
十六、法名春翁是光居士、

眞雄

初忠詮 中忠雄 三五郎 覚太夫

○貞享元年甲子五月二十日誕生、母御船手附小野  
木次郎兵衛義昌女、

眞房

九郎

○寶永七年庚寅二月八日誕生、母大馬場正左衛門景  
但入道休可女、

(十四代)  
△久貞

諸三郎 次郎右衛門

○元和九年癸亥三月十六日誕生、母志布志士若松駿  
河女、

○元祿七年甲戌十二月二十五日死、法名寶山宗徳居  
士、

忠持

三十郎 次郎兵衛

○寛永十二年乙亥十一月十二日誕生、母日州松山  
士吉田仁右衛門清房女、

○寛文十年庚戌十二月八日死、法名骨寒想徹居士、  
女子

伊勢治部右衛門貞継妻、

○母同前、

眞昌

初忠知 三郎兵衛 次左衛門

○寛文八年戊申二月七日誕生、母岩正卜淵宗明女、

眞常

初忠次 三七 次郎兵衛

○元禄六年癸酉六月十五日誕生、母日州松山土吉田  
五左衛門清名女、

眞盛

初忠次 三十郎

○元禄十四年辛巳三月九日誕生、母同前、

女子

○母同前、

女子

飯隈山救仁郷蓮繼坊朝賢妻、

○母飯隈山救仁郷深仙坊朝昭女、

△久陳(十五代)

諸三郎 七郎右衛門

○明曆三年丁酉十一月十三日誕生、母同前、

○久陳之家先祖以來代代御太刀献上、

○正徳三年春 公命曰、當家於嫡流者、避忠字以久

字代代用實名有 高免、自今以后至二男以下之庶

子、避久忠之兩字、而以眞字可為實名之通字、因

二男以下改眞字、

○同年十二月有 公命、吾庶流之中、從祖先為他家

臣、如無忠義之功勲者、子孫使寢山田稱號、更以

新賜武通之家號、於是乎改號者多多、

女子

志布志之士平田半之丞宗方妻、

○母同前、

眞詳

初忠就 七郎 七左衛門

○寛文九年己酉七月十七日誕生、母同前、

眞香

初忠堯 覺弥 七兵衛

○元禄八年乙亥八月十二日誕生、母志布志土貴島源

右衛門女、

眞春

初忠次 小平太

○元禄十三年庚辰七月十二日誕生、母同前、

女子

○母同前、

(十六代)  
△久福

三次郎 次郎右衛門

○天和二年壬戌二月廿五日誕生、母山田權兵衛忠張

女、

眞用

初忠臣 次助 次兵衛

○元禄六年癸酉二月十一日誕生、母同前、

女子

○母同前、

眞從

初忠次 九左衛門

○寶永元年甲申八月四日誕生、母同前、

久房

諸三

○寶永七年庚寅四月六日誕生、母滿尾休左衛門貞安

女、

山田氏支流系圖百引之士山田休左衛門

『六代家督』  
久興

字虎王丸 四郎 右京亮 出羽守 入道名玄威、

『七代家督』  
忠尙

初忠豊 字百王丸 三郎四郎 式部少輔 出羽

守 入道名聖栄、子孫略之、

式久

<p>字王五郎丸 太郎三郎 信濃守 入道名聖祐、 子孫略之、</p>	<p>忠通 式部少輔 女子三人</p>	<p>久基 右京亮</p>	<p>忠秀 左京亮 義種 又助</p>	<p>忠重 又三郎 女子</p>
--	-----------------------------	-------------------	---------------------------------	--------------------------

<p>義種室、</p>	<p>久時 飛彈守</p>	<p>久綱 淡路守</p>	<p>女子 島津兵庫久住家臣本田源助妻、 久俊 右京</p>	<p>○大崎士、 ○天正十四年於豊州船川戰死、 女子 玉子 ○太守龍伯公之官女、</p>
-------------	-------------------	-------------------	--	--



久信

弥次郎 蚤死而無子孫、

久次

弥右衛門

○志布志之士、

久安

右京

○養子、實同氏伊豆久重之二男也、

久次

弥太兵衛

○久次因愚蒙甚不和吾家之所自出、只以自為嫡家之思、以嫡家久陳為非質、久陳構無理之訟遂上訴狀、於是命有司推根由、則久次立屈伏而無一言之陳對、乃依其罪、元祿十六年十月十日梟首于志布志、

眞次

弥左衛門

眞次

弥五右衛門

○兄

共俱由父罪科、剝落士列而入親屬之家、

○正德五年、嫡家久福以 公格使弥左衛門兄弟及

弥七左衛門避山田家號、而為武道號、

久次

弥右衛門

眞次

弥七左衛門 ○號武通、

○依伯父久次罪、剝落士列而入親屬之家、

久重

千吉 久左衛門 伊豆

○母大崎之土志和池勝左衛門女、

○百引之土、

○法號湖岳壽珊居士、

久次

弥左衛門

○為蒲生之土山田駿河養子、

久賢

孫三郎 休左衛門

○慶長八年癸卯誕生、母内之浦土内山肥前女、

○寛文四年甲辰四月二十二日死去、享年六十二、法

名賀翁良圓居士、

久安

右京

○母同前、

○祖叔父山田弥右衛門久次養子、而為志布志之土、

久次

新十郎 孝左衛門

○母同前、

○為百引之土江口市之丞養子、

女子

高隈之土吉岡駿河兼孝妻、

○母同前、

女子

恒吉之土堀切覚左衛門妻、

女子

志布志之土秋末甚四郎妻、

眞富

初久恭 松千代 喜右衛門

○正保元年甲申十二月二十五日誕生、母志布志之土

村原源六女、

○養子、實高隈之土吉岡駿河兼孝二男、

女子

○母百引之土蘭牟田次郎右衛門重時女、

眞福

初久軌 千吉 治左衛門

○延寶三年乙卯正月二十八日誕生、母同前、

眞奉

初久敬 孫三郎 喜左衛門

○延寶九年則天和元辛酉十月二十日誕生、母同前、

女子

母同前、早世、

眞武

孫兵衛

○元祿十四年辛巳三月二十五日誕生、母百引之土唐

鎌弥七左衛門祐運女、

眞茂

弥平次

○寶永四年丁亥六月十六日誕生、母同前、

女子

○母同前、

山田氏支流系圖

山田駿河

○山田嫡家十代式部少輔久親二男、

蒲生七、

久次

弥左衛門

○養子、實同氏右京久俊之二男也、

彌兵衛

病人故不家督、

女子

溝邊士町田傳兵衛妻、

忠廣

弥左衛門

○元禄十二年己卯四月二十四日死、享年七十二、法號本岩一源居士、

忠常

弥七左衛門

○慶長二年己丑三月誕生、母蒲生之土梶原清右衛門景保女、

○元禄九年丙子二月二十九日死、享年四十八、法號

無參禪位居士、

女子

蒲生之土原田喜右衛門妻、

○母同前、

權之丞

早世、

○母同前、

眞行

始忠行 弥三郎 弥市

○寛文十一年辛亥誕生、母同前、

眞昌

初忠明 幼名千吉 弥四郎 弥三右衛門 仲兵衛

衛

○天和二年壬戌九月十三日誕生、母蒲生之土北村總右衛門國友女、

眞次

弥太郎

○寶永八年則正 德元辛卯正月十日誕生、母蒲生之土田代

仲右衛門清的女、

不知所自出山田忠廣一流系圖

忠廣

助左衛門 外記

○阿多之士、

○慶安二年己丑九月十六日死去、法名幸慶宗忠、

忠晴

刑部左衛門

○阿多之士、

○寛永十五年戊寅十一月二十八日死去、法號笑翁道

觀、

女子

田布施之士鮫島雅樂之助宗利妻、

重時

右近

○阿多之士中馬甚四郎重次之養子、

忠能

外記 五兵衛

○母者、田布施之士遠矢勝右衛門良英女、

○阿多之士、

○貞享元年甲子六月二十八日死去、法號松山太祝、

女子

加世田之士桑畑木工之助是政妻、

女子

加世田之士泊六郎左衛門重利妻、

景治

五郎兵衛 但馬

○慶安三年庚寅八月二十日誕生、母加世田之士久采

徳右衛門公利女、

○阿多之士黒江但馬景住養子、

女子

阿多之士兒島次兵衛盛重妻、

○母同前、

眞親

初忠倚 三次郎 次郎兵衛

○萬治三年庚子十二月十九日誕生、母同前、

○阿多之土、

忠正

權之丞

○寛文四年甲辰二月十一日誕生、母同、

○元禄二年己巳正月四日死、法號久雲全丕、

忠俊

平三郎 五兵衛

○天和三年癸亥十一月十八日誕生、母加世田之土有

馬半左衛門純政女、

○寶永二年乙酉五月二十日死去、法名夏屋涼天、

女子

○母同前、

眞信

嘉茂次郎 五郎左衛門

○元禄五年壬申九月二十日誕生、母同前、

女子

○母同前、

不知所自出山田忠善一流系圖

忠善

三郎兵衛

○阿多之土、

○法名全英、

忠武

市之丞 佐渡

○法名宗圓、

忠利

藤兵衛

○寛永五年戊辰六月二十九日死去、法名正林、

忠興

軍兵衛 喜之助

○寛文八年戊申五月七日死去、法號齡安、

忠見

助四郎 民部左衛門 藤左衛門

○寛文元年辛丑十一月十五日死去、法號明室玉光、

忠相

利兵衛

○母阿多士山下壹岐清次女、

○明曆元年乙未八月二十七日死去、法名宗壽、

女子

秋目之士生駒式部左衛門忠實妻、

○母同前、

女子

田布施之士濱田宮内左衛門義次妻、

○母同前、

眞正

長次郎 喜右衛門

○母同前、

忠膺

助四郎 半右衛門 武右衛門

○母阿多士逆瀬川平右衛門安次女、

○元禄六年癸酉二月二十六日死去、法號能山林藝  
居士、

女子

市来之士高洲弥右衛門光有妻、

○母同前、

眞春

藤八

○元禄二年己巳八月二十五日誕生、母阿多之土有馬

仙右衛門純次女、

女子

○母同前、

女子

○母同前、

女子

加世田之土高田傳兵衛妻、

○母鹿兒島土伊地知為右衛門重次女、

忠榮

内記 十郎右衛門

○元和七年辛酉正月十六日誕生、母同前、

○元禄十一年戊寅五月十七日死去、法號貴室道意居

士、

女子

田布施之土丸田式部左衛門妻、

○母同前、

眞因

初忠祐 市之丞 藤兵衛

○寛永二十年癸未三月二十一日誕生、母田布施士武

元郷兵衛重清女、

眞純

初忠與 次右衛門 喜之助

○承應三年甲午七月九日誕生、母同前、

女子

○母加世田之土春成休左衛門久持女、

女子

○母同前、

女子



○母同前、

眞安

十郎右衛門

○寶永四年丁亥十一月十五日誕生、母同前、

眞元

權八

○寶永八年則正徳元年辛卯六月八日誕生、母同前、

眞長

初忠意 休右衛門

○明曆三年丁酉五月十五日誕生、母同前、

眞明

藤十郎 喜三右衛門

○貞享二年乙丑四月十二日誕生、母田布施土川畑

勘兵衛女、

○為田布施之士榊弥三兵衛吉次養子、

眞祐

休左衛門

○元禄二年己巳九月十二日誕生、母同前、

眞一

半之介

○元禄十五年壬午九月十四日誕生、母同前、

女子

加世田之士黒江甚右衛門妻、

○母同前、

女子

阿多之士丸田覚左衛門久知妻、

○母同前、

女子

阿多之士山内治左衛門實次妻、

○母阿多之士森覚右衛門重好女、

眞成

初忠記 權之助 市左衛門

○延寶三年乙卯八月二十三日誕生、母同前、

眞辰

三八 次右衛門

○元祿二年己巳四月二十日誕生、母同前、

圓海

出家、

○延寶八年庚申九月二十六日誕生、母同前、

○元祿十二年己卯二月十三日死、法名盛以法師、

女子

阿多之士橋口七郎次郎住次妻、

○母同前、

女子

○母阿多之士田中源兵衛國政女、

女子

○母同前、

不知所自出山田加賀入道系圖

山田加賀入道

初與市

山田加護右衛門

○於伊集院戰死、

山田加藤兵衛

○供奉 太守公上洛、而病死于上國、

山口勘介

○勘介幼没父、養于外祖山口某、長冒外祖家號、

○慶長十五年庚戌二月八日死、法號隆屋存盛居士、

山口筑前

○高岡之士、

○亡父勘介因外祖養毓之恩、措父家號、而雖冒母家

之號、以不順祖先故、筑前胥議一子勘左、而寬永八年父子相共雖請復本名山田、於宗家山田久武同久通父子、其事未成矣、

○寬永十五年戊寅五月十四日死去、法名月山宗傳居士、

山口勘左衛門

○母池袋傳右衛門女、

○先是、父相共雖請復本名山田之號、於嫡家山田久武同久通、未遂其事矣、

○慶安五年則承應元年壬辰七月十四日死去、法名無外宗有居士、

山口慶右衛門重堅

○母(マ)

○正保四年丁亥正月二十五日死去、法名傳翁良的居士、

山口筑兵衛重次

○母同前、

○為(マ)

久備

勘左衛門

○寬永十九年壬午六月二十日誕生、母堀次郎右衛門女、

○高祖山口勘介自冒外祖家號至久備、五代雖稱山口、以重字用實名字、寬永八年曾祖筑前祖父勘左父子胥議而請復本名山田、於宗家山田久武同久通父子、則以許可之、故雖訴旨趣於時之地頭新納久了、因循而至于茲、於是乎、久備再訴則蒙恩許、天和元年復本氏、而改號山田久備、於是乎、遂曾祖筑前以来志者也、

○元祿十六年癸未五月十六日死去、法名節巖英忠居士、

山田氏庶流武通氏系圖

不知所自出

加賀守

○法名雲山宗白居士、

真親

久次郎 嘉兵衛

○延寶八年庚申十二月二十日誕生、母種子島内記時

昌女、

久次

四郎

○元祿四年辛未正月十一日誕生、母同前、

○同十四年辛巳十一月九日死去、法名歛山常喜居士、

女子

○母 (2人)

真澄

休次郎

○寶永二年乙酉四月十四日誕生、母同前、

山田氏庶流武通氏系圖

不知所自出

加賀守

○法名雲山宗白居士、

參河守

○后為山伏號善心坊、

○為山田家嫡家之後見、有故於市成自殺、

河内守

○依父事而退市成、為北郷讚岐守忠相之臣、

忠常

大膳 新右衛門 四郎兵衛

○寶島津豊州家臣日置與一郎久義之四男也、河内守

無男故、以忠常為養子、

○八月十六日<sup>年號</sup>不知死、享年八十七、法名梅翁善芳居

士、

忠利

新右衛門 和泉守 入道宗桂、

○天正六年<sup>月日</sup>不知誕生、母北郷時久家臣萩原甚兵衛入道妙秋女、

○寛文元年二月二十二日死、法名圓誓宗桂居士、

女子

北郷時久臣早崎藤七兵衛妻、

○母同前、

久之

源七 筑後守

○母同前、

○北郷時久臣日置左近將監久種養子、

久賀

源六 四郎兵衛

○慶長七年<sup>月日</sup>不知誕生、母北郷時久臣財部延壽院實成

女、

○延寶五年十月十五日死、享年七十四、法名山室月高居士、

高居士、

女子

北郷時久臣樺山藏之助忠通妻、

○母同前、

女子

北郷式部太輔忠直家臣土持筑右衛門貞綱妻、

○母北郷忠直臣荒河大煩助儀定入道休意女、

忠珍

三郎右衛門 太郎右衛門

○寛永三年<sup>月日</sup>不知誕生、母同、

○寶永四年八月十二日死、法名穩室宗安居士、

眞昌

始久正 善左衛門

○寛永十五年戊寅六月十五日誕生、母同、

眞試

始久高 四郎右衛門 新右衛門

○慶安二年九月十五日誕生、

○養子、實町田出羽家臣兒玉内記家増二男也、久

正無男、故嫁其女相統家矣、

女子

眞試妻、

○母北郷忠眞家臣本田佐介親廣女、

眞信

始久之 源六

○天和三年癸亥四月十五日誕生、母久正女、

眞時

始久繼 庄兵衛

○元祿元年戊辰四月十六日誕生、母同、

女子

○母同、

眞乘

始久年 孫六

○元祿八年乙亥五月五日誕生、母島津外記忠長家臣

兒玉長右衛門女、

○忠珍無嗣子故為養子、實島津筑後久龍臣土持六兵

衛則成二男也、

○正徳三年六月、有嫡家久陳之示旨曰、如自今以後

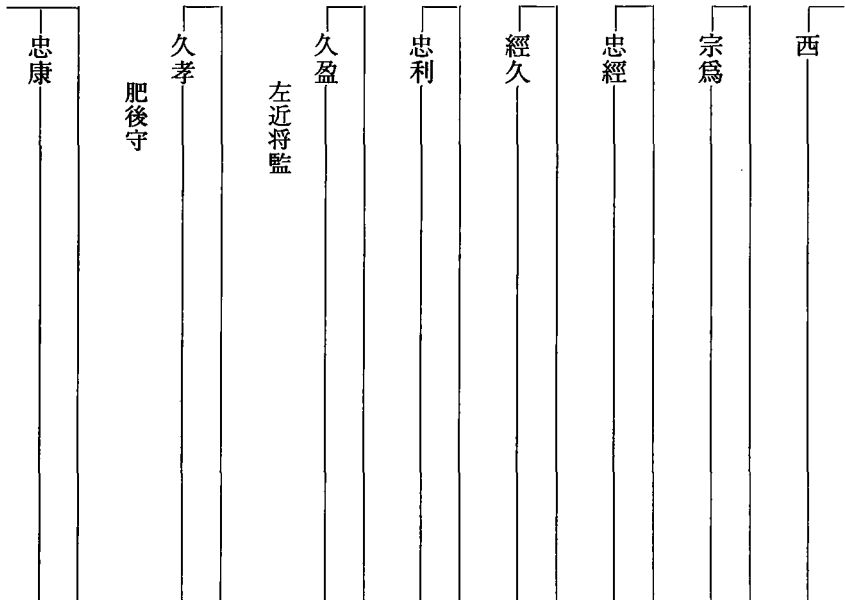
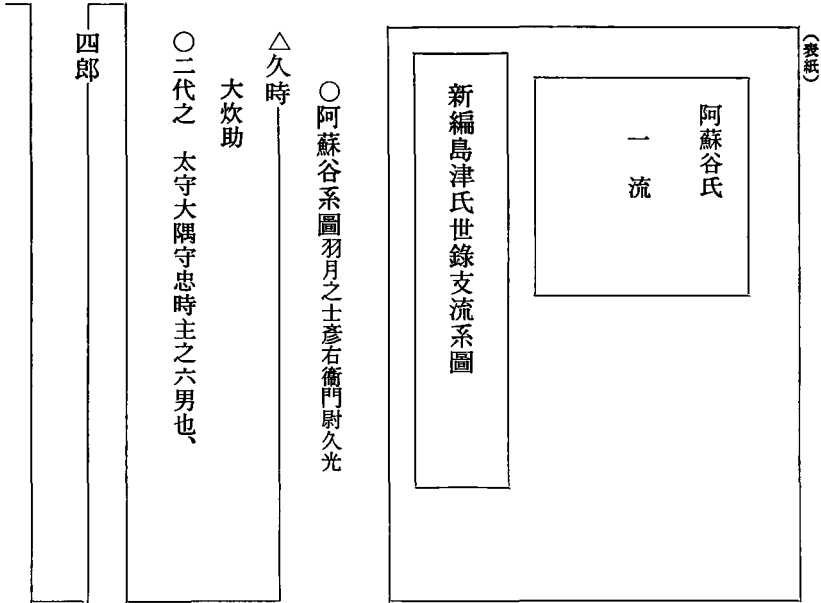
兩字而用眞字、須為家之通字、故改實名於眞乘、

乃吾家之庶子亦僉改實名、

○同年十二月、久陳又示曰、措山田之稱號、自是、

以武通可為家號、於是乎、吾庶流相共皆改號武通、

阿蘇谷氏



六郎左衛門尉

忠明

雅楽助

忠俊

○為吉田氏之猶子、

忠

源右衛門尉

○忠明依無子為猶子、實薩州羽月土北原用喜兼遠

二男、

○元祿十四年辛巳十月二十八日死、法名嘉山性蓮

居士、

忠

主馬

○母薩州大口土樺山氏之女、

○元祿十四年辛巳十一月二十九日死、法名天岩幽

眞居士、

時春

平八

○元祿十三年庚辰十一月二十三日誕生、養母薩州大

口土上村助左衛門女、

○主馬依無子為養子、實薩州羽月土北原五兵衛兼家

二男、

久堅

久左衛門尉

忠盈

彦右衛門 羽月之士也、

○寛文九年己酉正月十四日死、法名梅林香嶺上座、

時昉



初忠致 左京 彦左衛門

○萬治元年戊戌五月二十三日誕生、母薩州大口土井  
手籠吉右衛門重昌女、

○正徳三年癸巳四月、 太守吉貴公以肝屬主殿兼柄  
降 命曰、當家實名避於 御家字以時字宜為實名  
字、仍賜時字證帖、

女子

薩州羽月土鯨島筑右衛門妻、

○母同前、

時意

初忠知 藏之丞 休左衛門

○元禄三年庚午八月十五日誕生、母薩州大口土関田  
弥右衛門家次女、

女子

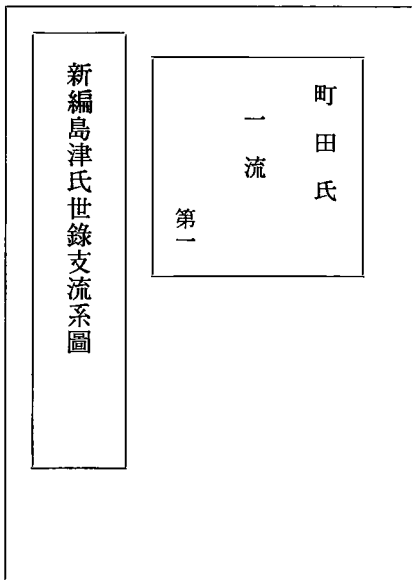
○母同前、

時眞

初忠堯 彦八

○寶永二年乙酉六月朔日誕生、母同前、

(表紙)



町田氏系圖

忠經

五郎 常陸守

○二代太守大隅守忠時公七男也、

宗長

號給黎、彦三郎 左京進

忠繼

三郎兵衛

△忠光

號町田、五郎太郎

○二代太守忠時公七男常陸介忠經之三男也、

俊忠

侍從房

△光俊

五郎

△經俊

五郎太郎

△道俊

五郎 入道

△實氏

五郎 常陸介

△助久

五郎兵衛尉

△清久

五郎

△忠良

五郎 法名道傳、

直久

土佐守

○應永二十年十二月七日、從伊集院彈正少弼賴久之

軍、戰死於鹿兒島小野、

久清

號阿多、五郎 飛彈守 子孫記別紙、

孫四郎

久親

伊賀守

則久

左京亮 土佐守 子孫記別紙、

忠好

助三郎 土佐守 子孫記別紙、

△成久

五郎 伊賀守

△俊久

五郎 早世、

△高久

號石谷、左京亮 出羽守 法名善仲、

○領石谷為履、故號石谷、

○嫡家俊久早世而無嗣子、故高久為家督、

○高久奉仕于 久豊公・忠國公二代太守、于時伊集

院大隅守庶久嫉之讒 太守、招高久于伊集院、高

久馳到、庶久兼伏兵於妙圓寺前、圍高久、高久力

戰數回而遂死、熙久掠取高久之遺領矣、

胤久

五郎左衛門尉 周防守 子孫記別紙、

△頼本

左京亮 法名月谷、

○高久為熙久被害、時頼本在覺府、奉訴高久無罪被

害、以蒙恩免、而後不數歲熙久積惡發覺 太守以

大軍攻擊之、熙久矢竭刀屈奔他邦、維大哉、

貴亮

八郎左衛門尉

忠光

三郎五郎 子孫記別紙、

正安

出家、

△梅吉

伊賀守 法名淨栄、

○太守立久公使令弟式部太輔久逸後被任河内守守日州福島

院、時梅吉奉 太守之嚴命、從吏部移居福島、賜

稱吉松在所、文明十七年初秋、久逸應 太守忠昌

公之命、去福島移居本領伊作庄、梅吉亦賜本領石

谷矣、

△梅久

八郎左衛門尉 伊賀守 法名心傳、

○大永七年丁亥六月中旬、島津八郎左衛門尉實久發

陰謀、掠取伊集院・日置兩城、加之奉襲 太守貴

久公、失防禦之術退去於鹿兒島、實久奉迎 前太

守勝久公、自執權恣振威、國人不服、

○天文四年乙未十月十日、實久以下逆徒亂入鹿兒島、

放火村市、 勝久公却之出奔帖佐、實久押領鹿兒

島、而後弥奮逆威、時 貴久公密賜一封于梅久父

子、其旨不忘舊好可抽忠節、梅久・忠栄奉應 嚴

命俟時、

○天文五年丙申三月七日之夜、貴久公攻取伊集院城、在之奮威于遠近、梅久父子潛進使節、數奉內

通、

○同年十二月六日、忠榮馳飛脚於鹿兒島告梅久曰、

兼奉約 貴久公密謀既顯、故明日將舉旗速退來、

依之梅久攜嫡孫忠梅、及深更潛出鹿兒島、自千手

堂前經小野之徑路退去、使忠梅直參伊集院城、梅

久者要野趣石谷城、失道徘徊夜將白、不圖會實久

之旗下肥後助西之兵於萩別府、梅久奮戰而後為長

山某被討、相從一族家臣共戰死、

△忠榮

助太郎 兵部左衛門尉 伊賀守 長門守

○忠榮改石谷之號復本氏町田、氏族皆同焉、忠榮奉

應 貴久公之嚴命、公感其志、天文五年之七月、

忝賜御證判、忠榮頂戴弥欲抽忠志、時實久疑忠榮、

使大寺壹岐入石谷城為警衛、其兵六十許、且招寄

老父梅久幼子忠梅以下一族、於鹿兒島質之、以故

不能起事、窺其隙、

○石谷城者介谷口・竹山兩城間、谷口地頭肥後周防・

竹山地頭肥後助西者無二實久旗下也、相議欲攻石

谷、事已急、忠榮察其機、(貼紙)天文ノ誤應(伊地知季安筆力)天正五年十二月七日曉

天、招入伊集院軍衆、擊殺大寺以下警衛之士、因

之谷口・竹山敵兵來攻城、且實久將大軍屯二本松、

谷口・竹山之兵乘機攻之甚急、忠榮慮不能保城、

擊破敵之圍向伊集院退去、敵兵募之攻擊、一族家

臣戰死者多、貴久公感忠榮之忠功、蒙安堵本領

町田石谷、加賜神殿之高命、再入石谷城、而傳其

榮于子孫、

○法名悅峯源怡居士、

忠成

三郎四郎 兵部左衛門尉 因幡守 子孫記別

紙、

○貴久公使忠成為令弟右馬頭忠將之家老、永祿四年辛酉七月十二日、供奉忠將戰死於廻竹原山、

△久德

始忠梅 助太郎 兵部左衛門尉

○大永元年辛巳誕生於石谷城、

○天文五年十二月六日之夜、從祖父梅久退去於鹿兒

島、時梅久使忠梅直參謁于伊集院上達其情、貴

久公御感不斜、其後被侵疾病、不能拔攻城野戰之

策、空忠志、不幸哉、

○法名香中玄通上座、

忠房

中務少輔 子孫記別紙、

津風

雪岑和尚、

○伊集院廣濟寺住持、

○始賜建仁寺息帖、後住南禪寺、

助三郎 子孫記別紙、

忠實

藤十郎

為兄助三郎之養子、

女子

△久倍

初久增 助太郎 伊賀守 出羽守 入道名存松

○母伊集院刑部少輔久盈女、

○天正年間、太守義久公退治于薩・隅・日三州之

逆徒、攻伐於豊・肥・筑六國之強敵、久倍無時不

從軍、摧身粉骨之勞不可勝計矣、

○天正十五年、殿下秀吉公發向富國、義久公一

戰之後相和睦、雖然未知安否、危急存亡之秋也、

五月六日、公發鹿兒島、將參向 秀吉公之陣千

臺泰平寺、時久倍為伊集院地頭、以故路次警固以

下久倍沙汰之、攜嫡子左京忠綱・二男助太郎久幸、

加供奉之列抽忠志、同八日、義久公謁 泰平寺見 殿下、而後賜安堵之御判以帰城、其後 殿下帰陣、 太守公亦上京、久倍攜二子供奉、七月中旬、 太守公謁聚楽城見于 殿下、時應 台命、 奉見于 殿下者、伊集院幸侃(忠徳)・久倍以下僅数人而已、

覚

(葵心)  
(花押)

- 一 進上斛之事、付大豆之事、
- 一 一代米之事、
- 一 高麗・名護屋・京都見次之事、
- 一 軍衆立かきミの事、
- 一 夜白談合可入精事、
- 一 被仰付御下知ニ利くつ可申仁ハ、籠者をもいたし、
- 一 稠急ニ可扱事、
- 一 耕作無油断可申付事、

一 舟作未進之諸所糺明之事、

一 一反米人別徳役米かり賣地首尾の事、

一 返地配當可急事、付原最すましき事、

一 諸所上所領可相糺事、

一 右之條々、不事濟内ハ、為何自用有といふ共、帰宅すましき事、

付皆究而の後ハ、拙斎・肱枕・利安・鎌雲事ハ、  
二番替ニ二人宛、在鹿兒嶋たるへき事、

天正廿年五月四日

(本文書ハ「旧記雜録後編」二八八〇号文書ト同文ナリ)

今度唐入之儀被仰付、既武庫父子被致渡海候之上、拙者亦名護屋可参由承候之條、即應其儀候、寔数年在京故、國家雖令困苦、各以熟談、高麗へ之見次、并なこや在陳京都調其外執代等、又者船手之儀、夜白無油断可指上事頼入候、當家一難儀相及事眼前候、然處不入精仁有之者、任京儀可其成敗候、併各於入

魂者、當家可令連続之条、弥才覚専一候、仍證據差出候之上者、縦令雖有無理之儀、國家之為たらハ、善惡可同心之間、可心易候、然時者捨遠慮可扱者也、仍狀如件、

天正二拾年

五月四日

龍伯(義久)  
(花押)

伊地知伯耆入道殿(重秀)

本田右衛門佐殿(親貞)

新納旅庵(長住)

山田越前入道殿(有信)

税所越前守殿(親利)

鎌田出雲守殿(政近)

本田因幡守殿(正親)

川上參河入道殿(忠智)

新納武藏入道殿(忠元)

平田美濃守殿(光宗)

町田出羽守殿(久倍)

〔本文書ハ、「旧記雜錄後編二」七八七号文書ト同文ナリ〕

○義久公感久倍之忠貞被捕家老職、且又改伊集院賜顯娃地頭職、加之新恩之地・不時之賚許多也、

○文祿元年壬辰、大閤秀吉公遣諸將伐朝鮮、自在肥前名護屋、遙指鷹朝鮮、義弘公・久保公者師朝鮮、義久公者在名護屋、使平田美濃入道舜廬・存松等為留守、時梅北宮内左衛門國兼者後義弘公之軍、欲渡朝鮮到於肥前平戸、忽變心企一揆、偽稱太守命、招聚薩隅邊境之惡黨亂入肥後、以故浮說雲興群疑泉涌、存松令曰、是豈太守命只雜流言、漫勿動心、國人信之如靜、不經數日梅北偽謀發覺被誅、肥後之趣告来、其後義久公與細川幽齋蒙秀吉公嚴命、下國搜索梅北之黨誅戮焉、太守令弟左衛門督歲久入道晴蓑者、秀吉公征西之時罹風疾不能謁柳營、其後起居不快、故闕參觀之禮、大閤常疑有叛心、今度因梅北一揆、滿腹疑



慮弥起謂非梅北一夫所為、歲久為之張本、故命幽齊討之、幽齋相讓太守及國老、招歲久于魔府、歲久來府、訝人情不常、家臣等諫之歸焉、乘夜解纜著船于脇本、欲歸那答院、時存松奉嚴命將士卒屯吉田、壓近鄉塞歲久之歸路、且備殘黨之蜂起矣、歲久察不得入居城、去脇本據瀧个水固、暫遂防戰終伏討、而屬無為矣、細川幽齋奉 太閣之嚴命、滯在于當國、改舊規出新法恣政事、丁此時或諂之貪新恩、或讒之亡舊臣者多、存松惟慮國家平安、不求自己榮達、書三个條誓詞、以獻 太守公、公亦賜盟書、維時文祿二年二月二十八日也、存松拜戴之為家珍矣、

今度三ヶ条、以神載深甚被頭心底、誠為當家之為、我等旁神妙候、春日 八幡 天滿天神 茂御照覽、何様同心之儀、毛頭不可有忘却者也、

『文祿二年』  
二月廿八日

(義心)  
竜伯 (花押)

一今度普請之事大儀之段候、然者上下共ニ普請奉行之下知ニまかせ精を入へき儀、可為肝要候事、  
一普請奉行衆互以熟談精を入へき事專要たるへく候、自然普請衆法度をそむき難渋いたす族等於有之者、即可被致成敗候、但於日用者可有捨事、  
一存松事、京都へ殘置候間、每篇彼下知次第、留守居衆可相勤事肝要候事、  
右条之旨、相そむく族於有之者、依輕重可處罪科者也、

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」二〇二号文書ト同文ナリ)

九月四日 (義心)  
竜伯 (花押)

尙以彼書狀檢地衆前ニ可被指出事ハ、無用たる

町田出羽入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編二」一〇七六号文書ト同文ナリ)

掟

へく候、如此申遣候通ハ、被申入可然候、以上、東郷城之事、可被破却之由候歟、其謂石左殿へ申入候、薩摩取次之事、幽齋老・石治少老にて候由、無

其隱儀候、然者去年夏之時分、幽齋老為 上使被成下向、去正月迄滞在ニ而、置目等被相改候キ、其節破却させられ候城之事ハ、暗く破却被成之候、并被立置城之事ハ、如前く無吳儀被召置候、其内之東郷城之儀候處、そばより彼城破却させられへき由、一向不及合點、幾度承候ても、御侘可申覚悟候、併預破却させられ候へて、不叶城にて候者、幽齋老・石田殿へ被仰理、彼兩人之墨付などを以承候者、不可及吳儀候歟、其外誰人承候共、難致得心候之由申理候、依之、寺志摩守殿・長大藏殿より墨付被指遣候間、以此旨可被得其意事專一候、恐く謹言、

八月六日

龍伯(義心) (花押)

町田出羽守殿(入信)

鎌田出雲守殿(取近)

龍伯

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」一三〇三号文書ト同文ナリ)

條々

一千臺川切ニ御檢地并刀狩上使衆於可被仕者、不及吳儀可申付事、付那答院境指出之儀、従上使前被申出候之歟、就知行泉ニ入組、曾而無之所ニ候、殊幽齋老去年為上使被指下、被成檢地候在所候之条、又く可被改事、雖無得心候、疑於承者不及是非事、

一平泉・羽月・山野同前、檢地刀狩可被申付之由、是又不可及吳儀事、  
一泉領之内、山野并高城・水引境目を新儀ニ相立、雖被踏分候、互當知行分之田畠出分共、以指出之上、可為知行候間、此方之知行何程檢地候而も不苦候、刀狩之儀者、諸國被 仰付候間、是又不苦候、湯川八右衛門尉・町田出羽守・村田雅樂助兩三人、不及分別儀被申懸候者、以其上此方へ可申

越候事、

七月十日

(義久)  
竜伯(花押)

(本文書ハ「旧記雜録附録二」一〇四号文書ト同文ナリ)

頃國元之儀一圓不相聞得候条、指遣使書候、

一 拝領之御朱印条書數多此方へ不見得候、其元へ涯分入念被見出、早々可被持候、

一度々以使申下候、相届候哉、無心元候、鹿兒嶋普

請之儀、未被指止被申付躰候歟、於其分者曲事候、

此度三奉行 大明勅使兩人以同心被成帰朝候、就

夫安三兵も被罷帰候、彼普請之事被聞付、不可然

之由、深々と被申事候、是非共普請可被指留事肝

要候、右之旨切々以使雖申下候、有之儘ニ可致口

達事、無覚束候之条、態染筆候、

一 高麗表年々無人之由候間、又々立かきミ之儀申付

候、必来月中旬比ニハ此地へ越着候様、肝煎可給

候、

一 石治少老も近日高麗へ可為渡海之由候、於其儀者、

愚老事も可罷渡覚悟候之間、何篇無油断其校量專

一 候、

一 替米船之儀毎度申下候処ニ、鎌雲仕立候而、高麗

へ指渡候之船壹艘參着候、其後一圓船不指登候、

如此致遅々候之事、さりとしてハ曲子細候、諸事無

緩可被申付事尤候、恐々謹言、

五月十八日

(義久)  
竜伯(花押)

鎌田出雲守殿

町田出羽守殿

長壽院

(本文書ハ「旧記雜録後編二」一〇一〇号文書ト同文ナリ)

諸舟皆々着揃候之条、片時モ急可致出船之処、此荒

けにてハ湊口出し候する事モ中々難成由候て、徒之

逗留何共迷惑不及申候、今晚モ少風やハラキ候者、

出船之地躰候、然者國役之儀、各不相濟候哉、安宅

三滞在中ハ談合所ヘモ無油断様ニと被申候、又諸所  
ヘモ其理被申越候ヘハ、大方者御行様ニ候つれ共、  
打立候以後ハ皆緩之心持にて弥不閑候、然者宮之城  
ヘハ自是直ニ申通候、菟角至鹿兒嶋懇ニ相談肝要之  
由申遣候、又清水ヘモ書狀被遣之候、早可被持せ  
候、巨細之段ハ自其元可被達由申候、將又出船モ遅  
候之条、名護屋表之任合必定可惡候、せめて進物  
にて相補儀モ歟候す覽と存候ヘ共、是モ當分ハ、不  
如意迄ニ候、然時ハ談合衆其調別而可被人精事ニ候、  
各如存知我ト諸篇六ヶ敷申事、連ト不相叶候ヘ共、  
國元ヘ一難儀ニ罷成故、有之儘申事ニ候、第一者談  
合衆の覚悟肝要ニ存候、其故ハ、朝ハ『關』參候て、  
自然晝ハ他行モ候之哉、又晚ニハはやく帰宅候てハ、  
寔無甲斐始末候歟と存候、大閤様御渡海候者、某  
御供事ハ遁間敷事にて候間、各可被人念事、向後頼  
入迄、恐々謹言、

五月廿一日

(義心)  
龍伯(花押)

町田出羽守殿

龍伯

諸談合衆

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」一二〇五号文書ト同文ナリ)

○秀吉公命定 太守居城于大口、雖然 太守不欲移

居之、占宅地於富隈徒焉、使存松為大口城代、存

松奉嚴命、文祿四年移大口城守之者有年矣、時轉

石谷賜市山一所、且又加賜一之宮村・長羽村等矣、

○忠恒公簾中者 義久公之御姫也、數年為質在京師、

存松亦奉 太守嚴命、攜妻女在洛、故奉仕 簾中

抽忠志、依之 兩尊公數賜書簡、其書意頗懇、其

外 義久公及 義弘公・久保公・忠恒公所賜之貴

簡若干也、

○慶長五年庚子秋、罹大病、故賜暇辭京師、揚帟帆

到於播州明石浦、疾病太重、而八月二十五日卒、

法諱帷仙宗蓬居士、

宗秀

蘭叔和尚 始諱慈圓 號月尚、

○天文二十二年癸丑閏正月二十二日誕生、母同、

○為大德寺古溪和尚弟子、始住廣濟寺、後住于大德寺、

久政

初忠頭 源六 源左衛門尉 子孫記別紙、

○母同、

○慶長三年戊戌十一月十八日、 太守義弘公會戰大明番船於朝鮮（ナハライ）南海海上、時久政奮戰而討死、法號劍叟紹鐵居士、

△忠綱

五郎太郎 左京亮

○永祿八年乙丑誕生、母高崎播磨守能宗入道有閑女、

○天正十五年五月八日、 太守義久公降參 殿下秀吉公、時忠綱供奉、

○文祿二年癸巳之春、奉嚴命出陣朝鮮、於舊都奉見

義弘公及久保公、而後 兩公陣于巨濟（唐稱之） 忠綱供奉、

供奉、

○文祿二年癸巳八月二十四日、病死于唐島之陣中、享年二十九歲、法號玉龍宗活居士、

久幸

助太郎

○元龜三年壬申誕生、母前（同脱カ）

○始為肥後山城守盛家之養子、而後兄忠綱早世無嗣子、故辭肥後氏統兄之後、

女子

△久幸

助太郎 勝兵衛尉 圖書頭

○兄忠綱早世、故久幸為後嗣、

○初室島津圖書頭忠長女、後之室稅所宮内少輔篤正女、

○天正十五年丁亥四月下旬、 殿下秀吉公著陣于千

臺泰平寺、五月八日、太守義久公降參于 殿下、時久幸持 太守之太刀而扈從、太守謁見畢、歸城、留久幸為質、以故則奉見于 殿下、頂戴羽織而退出、此時久幸十六歲也、而後 太守公上京、久幸亦供奉、

○慶長四年己亥六月二十三日、太守羽林忠恒公將大軍、攻屠伊集院源次郎忠眞之山田城、時久幸率大口衆、自乘城抽戰功、久幸之軍町田新介・木場民部左衛門以下戰死者多矣、

○同六年辛丑、被補伊作地頭職、為市山返地賜本領石谷村、且又為一之宮返地賜與倉・中原兩村之内、同八年、賜長羽村返地、

○同十六年辛亥、奉 家久公嚴命、住家老職勤仕國政、來往武城、久幸忝被浴 太守之恩波、數奉拜大相國家康公及 大樹秀忠公・家光公之尊顏、不榮乎、

○轉伊作賜伊集院地頭職、其後又改被補高山地頭職、

其外賞賜恩惠<sup>(許)</sup>居多也、

○寬永元年甲子六月十七日卒於武藏國江戸、享年五十三、法號江山隣月庵主、

△忠尙

初忠共 梅千代丸 出羽守

○元和七年辛酉二月二日誕生於武城、母宮原吉兵衛尉景辰女也、養母者稅所宮内少輔篤正女、

○久幸無嗣子、故以忠尙為後嗣、實 太守家久公庶子也、

○寬永元年甲子之冬、連統當家、時忠尙四歲也、

○同九年壬申之春、太守渡御梅千代之館、使梅千代元服、號出羽守忠共、應嚴命島津下野久元為加冠、

○同十六年己卯、太守光久公賜薩州伊作地頭職、

○延寶四年丙辰九月二日病死、享年五十六、法號提卯忠攜大禪伯、

忠清

梅千代 助太郎

○寛永十五年戊寅七月十五日誕生、母三原左衛門重  
饒女也、

○正保四年丁亥元服、號助太郎忠清、依 太守之高  
命、入来院伯耆重高為加冠、

○慶安四年辛卯十二月十三日早世、享年十四、法諱  
梅隱主庵居士、

△久孝

米壽丸 勝兵衛

○明曆元年乙未正月十日誕生、母妾、

○寛文二年壬寅十二月二十五日元服、 太守公忝自  
為加冠、鎌田藏人政勝為理髮、時拝領御脇指、

○兄忠清早世、故久孝相統當家、

○寛文九年己酉十一月五日早世、享年十五、法號即  
空是心居士、

△久東

初忠記 米松 孝左衛門

○萬治元年戊戌十二月十一日誕生、母同前、

○寛文二年壬寅冬、 太守公加冠米松、號孝左衛門  
忠記、賜脇刀、喜入休右衛門久守勤理髮之役、

○依兄忠清・久孝早世、相統當家、  
○任與頭、

○勤年頭之御禮使・歸國之使節等、

米松

○延寶四年丙辰十二月二十八日誕生、母肝付主殿久  
兼女也、

○同六年戊午四月朔日夭亡、法名花隱清心童子、

女子

町田源左衛門久孝妻、

○母同前、

△久居

初忠英 又忠知 米鶴 米袈裟 助五郎 助太夫

○延寶八年庚申六月十七日誕生、母同前、

○元祿三年冬、太守公首服米袈裟、號助五郎忠英、

賜脇刀、佐多豊前久達勤理髮、

○任番頭・與頭、

○補于隅州末吉之地頭職、

女子

○母同前、

△久儔

初忠通 米鶴 郷九郎

○元祿十二年己卯十一月九日誕生、母桂外記忠昶女、

○寶永四年冬、太守公首服米鶴、號郷九郎忠通、

賜脇刀、理髮者島津大藏久明也、

○同年十一月二十八日、依 太守公之嚴命家督矣、

○正徳三年春、太守公以肝付主殿兼柄降 命曰、

當家嫡子代代免許久字、且於氏族中無久字恩免家者、以俊字宜為實名字、仍書俊字賜證帖、氏族同焉、

○此家至初及家督等之時、拜謁于 太守公、則奉獻

御太刀・三種二荷、

町田氏庶流

町田源左衛門久政一流系圖

△久政

始久頭 源六 源左衛門

○母伊集院刑部少輔久盈女也、

○町田氏十六代家督兵部左衛門尉久徳之二男也、

○兄町田出羽守久倍入道存松時勤家老職補大口地頭職之時、久政應 命代久倍為在番、因攜妻子移于大口

監諸事、

○太守義弘公渡楫于朝鮮國時、久政含 命將大口之

士供奉、攻城野戰其功不少也、



○慶長三年十一月十八日、義弘公自朝鮮國班軍之時、明・鮮兩國之兵船逼海口、欲遮討公之乘船、是則危急存亡之秋也、時久政會戰數回、竟戰死於南海之海上、法名靛叟紹鐵居士、

△久則

始久慶 源六 勘解由 伊賀

○天正十二年甲申六月誕生、母長倉氏女也、

○太守忠恒公賞父久政之忠死、以采地百石賜久則也、

○慶長四年、忠恒公莊內御出陳久則供奉、山田之

城落居時、久則中鐵炮蒙疵喉下退去、時城兵一人揮勇

會戰、久則雖蒙疵不屑之挑戰、而斬獲敵首也、後

聞姓名稱黒木越前勇名士也、

○轉補於山田薩摩郡・大崎・隈之城・阿久根等之地頭

職也、

○慶安二年己丑七月、於江府任家老職也、

○延寶四年丙辰十一月十日死、享年九十三、法名聲

前院明叟石心大居士、

盛次

平五郎 早世、

○母同前、

○家嫡町田出羽守久倍之二男助太郎久幸後勝兵衛為肥後

山城守盛家之養子、久幸之兄町田左京亮久綱病死

於朝鮮國、以故附屬肥後家於平五郎、而久幸者復

本家稱町田勝兵衛久幸、

○慶長十四年己酉五月二十六日死、法名固峯宗堅上

座、

盛行

長次郎 長左衛門入道盛歌、

○慶長二年丁酉正月十日誕生、母同前、

○兄平五郎早世、故為肥後家之後嗣、

○延寶八年庚申十一月十六日死、法名吟昌盛歌居士、

女子

相良新右衛門長貞妻、

○母米良權之助女也、

△忠代

始久昌 亦忠貞 愛德 源六 源左衛門 勘

解由 伊賀

○元和二年丙辰六月二日誕生、母同前、

○勤仕横目頭今改大御目附及御談合役等、

○寛文三年癸卯八月、慈父伊賀守久則家老職免許之時、則令忠代被補家老職、賜阿久根之地頭職也、

○轉補於加世田・出水・谷山等之地頭職、

○寛文九年五月二十八日、於江戸奉謁于

將軍家綱公、献上時服三・御太刀・馬代金也、

○元禄十三年庚辰九月十二日死、法名長徳院傑山玄

英大居士、

忠饒

清兵衛 伊右衛門

○母同前、

○忠饒之繼母者伊集院刑部少輔久光之女也、數年奉

于 龍伯公・忠恒公之御簾中、拜領新恩之地、後

件之采地讓于忠饒、故忠饒為外叔父刑部左衛門久

武之弟、冒伊集院號也、

○寛文十一年辛亥八月二十三日死、法名桂間宗月居士、

女子

佐多又四郎久孝妻、

○母蒲地備中入道女也、

○明暦元年乙未十月二日死、法名月心妙鏡大姉、

久盛

始久英 愛德 源六 勘右衛門 源左衛門

○寛永十四年丁丑七月十七日誕生、母同前、

○明暦二年丙申八月、依 命為家嫡町田出羽守忠尚

之家督代也、翌年丁酉正月、辭家督代也、

○同四年二月、為證人在江府、翌年五月、奉謁于

將軍家綱公、拜領時服三、且賜歸國之暇、

○寬文元年辛丑二月、為證人到東都、翌年五月、奉

謁于

大樹家綱公、拜戴時服三及御羽織、賜歸國之暇、

○同四年甲辰二月、為證人在江府、翌年八月、奉謁

于

將軍家綱公、拜領帷子・單物及御羽織、賜歸國之

暇也、

○寬文六年、久盛兼役寺社奉行・橫目頭今改大・御

談合役等也、

○天和元年辛酉九月六日死、享年四十五、法名清照

院月巖一山大居士、

女子

伊集院將監久孟妻、

○母同前、

女子

樺山權右衛門久行妻、

○母寺尾新左衛門女也、

○寶永七年庚寅七月二十二日死、法名實姓院圓室成

清大姉、

俊堅

初久貫 愛壽 源六 源右衛門

○寬文四年甲辰十一月二十六日誕生、母同前、

○俊堅有故而隱居也、

忠陽

初忠英 長兵衛 弥市右衛門

○寬文二年壬寅九月二十二日誕生、母妾、

○忠陽之母忠代之妾也、母身忠陽而辭忠代之家、

如伊集院之中石谷村、乃生忠陽、於是町田賀右

衛門忠政配偶忠陽之母、以忠陽為養子、其後經

年、而初取謁於忠代、是故雖為俊堅之兄、以忠

陽為三男也、

○寶永元年甲申八月二十三日死、法名自得院一超

宗心居士、

女子

町田勘左衛門俊央妻、

○母高尾野之土本田十郎左衛門親則女也、

女子

○母同前、

俊武

始久次 源六

○元祿十三年庚辰四月十八日誕生、母同前、

○為町田勘左衛門俊央之弟也、

女子

○母本田六左衛門親武女也、

○嫁島津主税久近産男子二人、而後離別也、

忠次

愛徳丸 早世、

○寛文三年癸卯二月二十四日誕生、母同前、

△久孝

千壽丸 源左衛門 甲斐 宇右衛門 勘解由

○延寶七年己未九月二日誕生、母鎌田左京政喬女孝久

之實母者薩州阿多之土森八郎、左衛門女也、雖然養之爲子、

○貞享三年丙寅正月二十八日、太守綱貴公首服千

壽丸、稱源左衛門久孝、賜御脇指頂戴玉盃、佐多

豊前久達為理髮、

○貞享三年丙寅九月晦日、太守光久公賜家督於久

孝、同年十月十五日、奉謁 公奉謝賜家督之忝、

献上御太刀・二種一荷、相良主税奏達之也、

○元祿六年癸酉二月九日、被補三番組頭及番頭、平

田清右衛門傳 命也、

○同七年甲戌十一月三日、為年首之御禮使發覺島到

江府、同八年乙亥三月二十二日歸國、

○同九年丙子九月四日、賜野尻之地頭職也、

○同十年丁丑、禁裏御入内、因二月六日、發江府

到京師、勤御名代之御使者、同閏二月二日、於長

橋局献上御太刀、松野河内守執奏焉也、同三月十

九日帰國、

○寶永三年丙戌正月二十二日、轉野尻賜阿久根之地頭職、

○同七年庚寅正月二十五日、補御勘定奉行、種子島彈正伊時傳 尊命也、

○正徳二年壬辰九月六日、轉阿久根賜蒲生之地頭職也、

○同三年癸巳三月二十五日、久孝伺候御家老座、肝属主殿兼柄傳 命曰、以久孝之家嫡子代代久字可實名、二男以下實名字者、自當家之嫡流可傳之云云、以故久孝二男以下、皆以俊字為實名之字、

俊央

始久與 龜徳 勘左衛門

○延寶七年己未九月六日誕生、母同前俊央之實母者隈之城之士松元弥左衛門女也、雖然養之爲子也

○町田源右衛門俊堅有故隠居、以故以俊堅之采地、

附屬俊央、是祖父忠代兼日訴之、蒙恩免如是也、

俊武

始久次 源六

○寶永七年庚寅閏八月十一日、蒙 太守公之恩免、為勘左衛門俊央之弟也、島津十郎左衛門久置傳 尊命也、

女子

○母町田源右衛門俊堅女也、

俊次

袈裟徳

○正徳元年辛卯十二月三日誕生、母同前、

女子

島津宮内久通妻、

○母町田幸左衛門久東女、

女子

○母同前、

久芳

鶴壽丸 宇右衛門

○元祿十五年壬午七月二十八日誕生、母同前、

○寶永七年庚寅四月十五日、 太守吉貴公如冠鶴壽

丸、稱宇右衛門久芳、賜御脇指頂戴玉盃、島津將

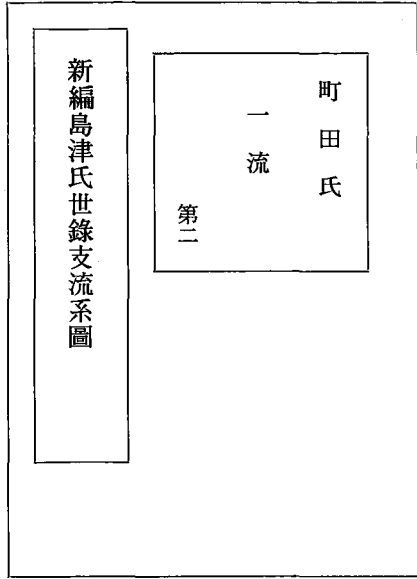
監久富理髮、

俊次

鶴二郎

○寶永二年乙酉三月十日誕生、母同前、

(表紙)



町田氏庶流  
町田土佐守則久一流系圖

左京亮 土佐守

○町田家七代家督五郎清久之六男也、

忠幸

忠重

左京亮

盛久

又七 六郎左衛門尉

○文明十七年二月十一日、戰死於薩州郡山、

久用

又七 治部少輔 中務少輔

○久用黨于實久守伊集院城、天文五年三月七日、

貴久公率軍攻落焉、

女子

忠林

又七 縫殿助 加賀守

○奉 貴久公之嚴命、為島津右馬頭忠將之家老、

○永祿四年七月十二日、於隅州廻竹原山戰死、法號

孝播良忠居士、

甚六

早世、

久家

兵部少輔 讚岐守 ○子孫記左、

女子

忠豐

又七 縫殿助 加賀守

○父忠林入右馬頭忠將之家、時使忠豐奉仕 太守公、

○天正二年甲戌五月二日死、法號節安宗忠居士、

又次郎

早世、

女子

山田藏人有德妻、

忠次

軍四郎

○母島津伊豫介忠友姉、

○永祿四年辛酉七月十二日、與父忠林俱於廻竹原

山戰死、年十九、法號儀翁常忠禪定門、

久辰

初忠兼 孫次郎 弥助 七郎左衛門尉 石

見守

○天文十六年丁未誕生、母北郷藏人國久女也、

○久辰實島津伊豫介忠友之二男也、軍四郎忠次

戰死之後、忠林後室養久辰、使為軍四郎弟冒

町田之稱號、

○住隅州清水、其後為百引之士、

○慶長十八年癸丑九月十五日死、法號寶山宗珍

居士、

忠倍

彦七 七左衛門 石見

○永祿十一年戊辰誕生、母百引士豎山弥八左衛

門頼元女、



○寛永十九年壬午二月十九日死、法號寶山上珍居士、

忠賞

七左衛門 采女

○慶長元年丙申誕生、母隅州横川土下村主計女也、

○延寶元年癸丑三月二十四日死、法名淨圓亮清居士、

忠衆

彦七 弥左衛門 市郎右衛門

○百引之士、

○元和元年乙卯七月十二日誕生、母同前、

○元禄四年辛未閏八月二十三日死、法名松巖

宗久居士、

俊員

初久實 米千代 関右衛門 弥左衛門

○寛永十八年辛巳六月二十日誕生、母百引士二之宮隱岐入道貞吉女也、

○町田孫七郎康久之後數代断絶、寛文七年、家嫡出羽忠尙使久實為後嗣連続焉、

綱規

八郎左衛門

○正保四年丁亥五月二日誕生、母同前、

○為百引士中島治右衛門綱治之猶子、

女子

百引士園田孝右衛門頼豊妻、

○母同前、

忠雄

初忠備 長千代 貞右衛門 九郎兵衛 采

女

○寛永八年辛未四月二十日誕生、母島津小源太

(44) 家臣二之宮十郎左衛門貞通女、

○元祿十一年戊寅二月十五日死、法名道安芳珍居士、

僧

號快憲、 ○母同前、

女子

百引士町田弥左衛門俊員妻、

○母同前、

俊房

初忠展 長千代 七郎右衛門 市右衛門

○萬治元年戊戌十二月二十四日誕生、母隅州恒

吉士津之地及右衛門祐周女也、

○雖為百引之士辭彼地、為薩州市來之士、

女子

隅州恒吉士肥後權之助妻、

○母同前、

忠朝

彦七郎 藤左衛門

○寬文五年乙巳七月十二日誕生、母同前、

○為百引士鶴田喜左衛門重中之養子、而連統夫

家、

女子

百引士山本七左衛門綱固妻、

○母同前、

俊香

初忠致 長千代 長右衛門

○貞享三年丙寅二月六日誕生、母飯隈山細山田乘

玄坊女、

女子

百引士江口弥右衛門重住妻、

○母同前、

忠秀

八郎左衛門

○軍四郎於隅州廻遂戰死、故忠秀連続夫跡、實町

田中務忠房之二男也、

○島津相模守忠仍家臣也、

○寛永十六年己卯十一月四日死、法名久翁全昌、

久康

隼人

○背島津相模守忠仍出奔佐土原、仕島津右馬頭忠興、

子孫延住于日州佐土原、○子孫記別紙、

女子

佐土原土加世田小兵衛妻、

久明

次郎兵衛

○母佐土原土相良来祐院女也、

○隼人佐出奔而無後嗣、以故久明相統忠秀之家、

實同家臣町田勘左衛門忠照之三男也、

俊辰

初久綱 又久智 源三郎 八郎左衛門 弥左

衛門 次郎兵衛

○寛永十一年甲戌五月誕生、母鹿兒島士小島壹岐

綱次女也、

俊親

號梅本、初久高 小源太 次右衛門

○寛永十五年戊寅正月四日誕生、母同前、

○此家受家嫡之令號梅本、

女子

同家臣和泉小兵衛忠誠妻、

○母同前、

女子

同家臣安山清兵衛親妻、

○母隅州櫻島土鎌田佐五右衛門政辰女、

俊尊

初久武 源五郎 伊織 五郎右衛門 十郎

兵衛

○延寶三年乙卯九月十五日誕生、母同前、

俊英

初久通 八十郎 十太夫

○貞享四年丁卯九月四日誕生、母島津市太夫久

雄家臣濱崎藤太重時女、

俊眞

五郎次郎

○寶永三年丙戌二月十二日誕生、母同家臣末野藤

左衛門俊映女、

女子

○母同前、

俊尙

初久道 八郎左衛門 後角 十左衛門

○萬治三年庚子九月二十三日誕生、母同家臣川上

主殿久清女、

○此家者 太守貴久公所附屬右馬頭忠將之士也、

以故此家自今以後、嫡子代代冒町田氏、二男以

下避町田氏、當號梅本、家嫡郷九郎久儔受法令

傳之、故庶流號梅本矣、

源八

○母同前、早世、

久喜

長十郎 休右衛門 七郎右衛門

○寛文九年己酉二月九日誕生、母島津甲斐久武家

臣平川茂右衛門慶鎮女、

○元祿十二年己卯十一月十七日死、法名法屋無幻

居士、

女子

垂水家臣安藤代右衛門秀宗妻、

○母桂太郎兵衛忠澄家臣西郷藤右衛門友清女、

俊典

初忠達 源三郎 軍四郎 源六郎 軍八 弥左  
衛門

○貞享五年戊辰五月十一日誕生、母伊勢兵部貞栄家

臣牧之瀨刑部左衛門秀元女、

女子

○母同前、

又八

早世、法號丘山春仲居士、

女子

山田越前守有信妻、

久門

初久充 孫七 縫殿助 駿河

○永祿四年辛酉正月十五日誕生、

○轉補薩州百次・隅州曾於郡之地頭職、

○寛永二十年癸未七月二十八日死、法號忠宅道節居

士、

久英

弥八郎 八左衛門 長右衛門

○永祿十一年戊辰正月十八日誕生、

○元和九年癸亥十一月十二日死、法號玄需無三居

士、

久堅

八左衛門 ○無子孫、

久一

初久里 長右衛門 ○無子孫、

久岑

縫殿助

○文祿二年癸巳四月十一日誕生、母坂本平右衛門入道法眞女也、

○補薩州百次之地頭職、

○寛永七年庚午九月二十七日、於武州江戸死、法號忠谷省庵居士、

女子

村田與五郎經高妻、

○母留主左衛門佐景親女也、

忠朗

源七郎 勘解由 六郎右衛門

○慶長十三年戊申二月二日誕生、母同前、

○為阿多勝右衛門忠増之養子、

忠供

孫七

○元和二年丙辰十二月三日誕生、母津留十郎右衛門女也、

○寛永十年己酉八月十九日、於武州江戸死、法號節山宗忠居士、

忠堯

右京 八右衛門

○元和五年己未十一月朔日誕生、母同前、

○補隅州曾於郡之地頭職、

○延寶五年丁巳十一月十七日死、法號一忠晴心居士、

忠代

次兵衛

○寛永三年丙寅三月二十三日誕生、母同前、

○貞享二年乙丑正月二十九日死、法號即空宗心居士、

久包

次左衛門 次兵衛

○承應二年癸巳八月二十八日誕生、母隅州國分士伊地知作左衛門重朝女也、

○元祿十四年辛巳十月三日、於武州江戸死、法號  
別殊玄旨居士、

俊良

初久良 七右衛門 次郎左衛門

○明曆二年丙申六月二十二日誕生、母同前、

女子

薩州樋脇士伊地知孫八左衛門重宗妻、

○母同前、

女子

島津小源太家臣町田與市右衛門俊方妻、

○母隅州日當山土兒玉作左衛門女也、

俊長

小八

○元祿十一年戊寅八月二十日誕生、母同前、

俊茂

初久重 次左衛門

○元祿二年己巳閏正月二十七日誕生、母北郷作左衛

門久嘉家臣安藤弥五左衛門實安女也、

俊央

伊右衛門

○元祿六年癸酉九月十六日誕生、母同前、

俊方

初久寛 或忠以 或忠白 左京 五郎右衛門

孫七 八右衛門

○寛永十九年壬午十二月十一日誕生、母平田狩野介

宗弘女也、

○轉任于吟味役・用人役・與頭用人役  
如本等之職、

○轉補於隅州横川・同大根占等之地頭職、

○正徳三年四月、此家實名以俊字宜為實名字、家嫡

郷九郎久儒受 命傳之、故改俊字、庶族同之、

○此家初拜謁 太守公、至家督等之時、奉獻御太刀

且勤小番、是則此家之例也、

女子

隅州國分士加治木善助兼建妻、

○母大隅正八幡宮神職留主右衛門佐景種女也、

久通

三左衛門 八左衛門

○明曆元年乙未十一月十三日誕生、母同前、

○轉任于近習役・江戸留主居役・側目附役等之職、

○補薩州川邊之地頭職、

○寶永六年己丑七月朔日死、法號精忠玄廉居士、

久次

角之允

○寛文四年甲辰四月三日誕生、母同前、

○天和二年壬戌正月六日早世、法號吟霜貞寒居士、

俊昌

初久矩 權左衛門 八左衛門

○貞享四年丁卯七月九日誕生、母菱刈孫兵衛重敦

女、

○久通依無世子為養子、實菱刈新五兵衛重格之二

男也、

○任側目附、

○此家初拜謁于 太守公、至家督等之時奉獻太刀、

且勤小番、是家例也、

女子

○母押川十郎右衛門公秀女也、

俊常

萬袈裟

○正徳三年癸巳七月二十三日誕生、母同前、

俊香

初久迢 中久品 源八 孫右衛門

○寛文十一年辛亥五月十日誕生、母田尻八兵衛種昌



町田氏

女也、

女子

早世、母同前、

俊在

神之助

○寶永二年乙酉八月十一日誕生、母妾、

俊相

初久芳 孫太郎

○元祿十年丁丑二月二十二日誕生、母海江田十郎右

衛門信相女也、

女子

○母同前、

俊昌

八十郎

○寶永二年乙酉七月九日誕生、母同前、

町田氏庶流

町田讚岐守久家一流系圖

久家

兵部少輔 讚岐守

○町田則久四代中務少輔久用之二男也、

○此子孫延為島津淡路守惟久之家臣、住于日州佐土

原、

久延

源七 城之助 半兵衛

○永祿四年辛酉誕生、

○寛永四年丁丑六月十一日死、享年七十七、法名孝

山栄忠、

女子

村田角助妻、

忠正

源七 六郎兵衛

○慶長十六年辛亥三月六日誕生、

○萬治二年己亥七月十六日死、享年四十九、法名教

心自頓、

女子

向井八右衛門盛仍妻、

久充

虎千代 内匠 吉左衛門

○寛永十一年甲戌十一月十八日誕生、母飯田莊兵衛

正重女、

○延寶元年癸丑十一月二日死、享年四十、

久次

軍四郎 内記 九郎兵衛 母同久充、

○為猿渡左近四郎養子、

久置

讚岐 加左衛門 母同前、

○為甥源七忠義之後嗣、

忠義

加賀 源七

○寛文元年辛丑正月八日誕生、母中尾兵左衛門女、

○天和二年壬戌六月二日死、享年二十二、法名静安

壽嶺、

林置

初久置

○慶安三年庚寅九月六日誕生、母同久充、

○忠義弱冠死、無繼、故以林置為忠義之後嗣、

林建

初久建 又七 縫殿 城之助

○延寶七年己未七月十八日誕生、

○實島津又右衛門久遐妾腹之子也、為林置之養子、

町田氏

○正徳三年癸巳十一月九日、惟久應三州 太守吉貴  
公命告曰、於久建家者、避久忠兩字、摘其先祖所  
用之字、宜為實名之字、故改林建、

林次

龜太郎

○正徳元年辛卯四月十九日誕生、母富田織部通全女、

女子

早世、

町田氏庶流  
町田隼人久康一流系圖

久康

隼人

○町田則久五代加賀守忠林之二男軍四郎忠次二代八

郎左衛門忠秀之長子也、

○背島津相模守忠仍、出奔佐土原仕島津右馬頭忠興、

子孫延住于日州佐土原、

○寛永十八年辛巳十二月二日死、法名傑傳宗英、

久次

早世、

○母志布志之住川上氏女、

久次

早世、

○母同、

女子

伊集院三右衛門忠貞妻、

○母同、

女子

久達妻、

○母同、

久達

初忠房 弥次右衛門 瑞現

○元和四年戊午八月二十八日誕生、母飮肥之住矢野

河内入道閑清齋女、

○久康依無嗣子為智養子、實伊集院權之助忠光之子也、

○延寶元年癸丑八月、依忠高之命、勤家老職、

○元祿二年己巳七月晦日死、享年七十二、法名道勝

瑞現、

女子

宇宿六郎兵衛久定妻、

○母久康女、

久近

初權七 隼人

○明曆元年乙未三月十日誕生、母日高談兵衛重教女、

○延寶五年丁巳正月八日死、享年二十三、法名見外

領德、

碧龍

出家、

○明曆三年丁酉三月二十三日誕生、母同、

女子

久置妻、

○母同前、

久置

宗七 左太夫 弥次右衛門

○萬治三年庚子十一月十二日誕生、母伊集院權之助

忠光女、

○久達依無嗣子為智養子、實樺山清右衛門久主之子

也、

○元祿十一年戊寅四月、奉惟久之命勤家老職、

○寶永元年甲申七月四日、於武州江府死、享年四十

五、法名節心宗忠、

女子

早世、

○母久達女、

房郷

初久郷 千代丸 権七郎

○寶永元年甲申三月十日誕生、母井上十兵衛良恭女、

○久置依無實子為養子、實島津淡路守惟久他腹之子

也、

○正徳三年癸巳十一月九日、惟久應 太守吉貴公命

告曰、於久郷家者、避久忠両字、摘其先祖所用之

字、宜為實名之字、故改房郷、

○房郷為島津主殿久睦之後嗣、故令伊集院権之助教

道之次男熊次郎連統於當家、

房恭

初久次 教宅 熊次郎

○元禄十六年癸未三月十六日誕生、母渋谷清太夫重

泰女、

○房郷為島津主膳久睦之後嗣故連統於當家、實伊集

院権之助教道之次男也、

町田氏庶流

町田土佐守忠好一流系圖

忠好

助三郎 土佐守

○町田氏七代家督五郎清久之七男也、

隣久

弥七郎 左京亮 讚岐守

忠恒

助三郎 右京亮 讚岐守 法名浄忠居士、

忠明

伴五郎 左衛門尉 越中守

信春

出家、

康久

孫七郎

良久

助次郎

女子

俊員

初久實 米千代 関右衛門 弥左衛門 百引

之士也、

○寛永十八年辛巳六月二十日誕生、母隅州百引士

二之宮隱岐貞吉女、

○康久之後数代断絶、寛文七年丁未、家嫡出羽忠

尙使久實為後嗣連統焉、實百引士町田市郎右衛

門忠衆之長男也、

女子

隅州高隈士久保清右衛門之照妻、

○母百引士町田宋女忠賞女、

俊昭

初忠堯 米千代 七左衛門 佐兵衛

○寛文七年丁未二月十四日誕生、母同前、

女子

隅州百引士山本源右衛門綱昆妻、

○母同前、

忠充

源三郎 市左衛門 市郎右衛門

○延寶五年丁巳八月十一日誕生、母同前、

○正徳二年壬辰六月十二日死、年三十六、法名

清雲道叶居士、

俊方

初忠隆 長次郎 休八

○貞享元年甲子正月二日誕生、母同前、為兄忠

充之養子、

俊商

金八

○元禄十四年辛巳四月二十二日誕生、母同前、

俊方

初忠隆 長次郎 休八

○貞享元年甲子正月二日誕生、母同忠充、

○兄忠充依無男子為養子、連続夫跡、

女子

○母隅州百引士松脇莊左衛門女、

女子

○母同前、

俊佐

初久武 市十郎

○元禄十三年庚辰二月六日誕生、百引士郷六弥左衛

門種善女、

女子

○母同前、

忠辰

助三郎 宮内少輔 越中守 入道名一步齋、

忠運

又十郎 越中守 入道名乘傳齋、

忠温

又十郎 式部少輔 久左衛門尉

忠倫

助七

女子

久綱

助三郎 宮内少輔 久左衛門 入道名宗傳、

助七

早世、

女子

久成

千左衛門 隆右衛門

○元和九年癸亥五月朔日誕生、母隅州清水土高橋石

見清自女、

○助七早世而無嗣子、故為後嗣、實薩州高城土稅所

因幡篤經之男也、

○元祿十一年戊寅八月十五日死、年七十六、法名心

月一圓居士、

久武

千吉 治左衛門 孫兵衛

○正保二年乙酉六月二十五日誕生、母南雲順右衛門

良勝女、

○任兵具奉行物頭、

○正德二年壬辰六月七日死、年六十八、法名一至道

山居士、

俊昌

初久張 千吉 越右衛門

○延寶五年丁巳七月五日誕生、母若松十左衛門久東

養女、實薩州大口土佐藤五兵衛清栄女、

○正德三年四月、此家相避於久忠之字、以俊字宜為

實名字、家嫡郷九郎久儔受 命傳焉、故改俊字、

○此家代代初拜謁 太守公、至家督等之時、奉獻御

太刀、且勤小番、是家例也、

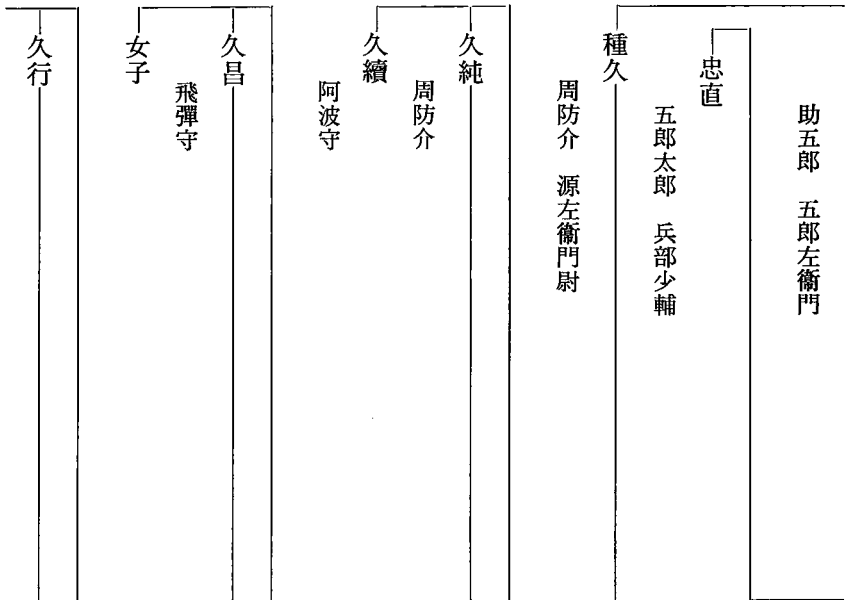
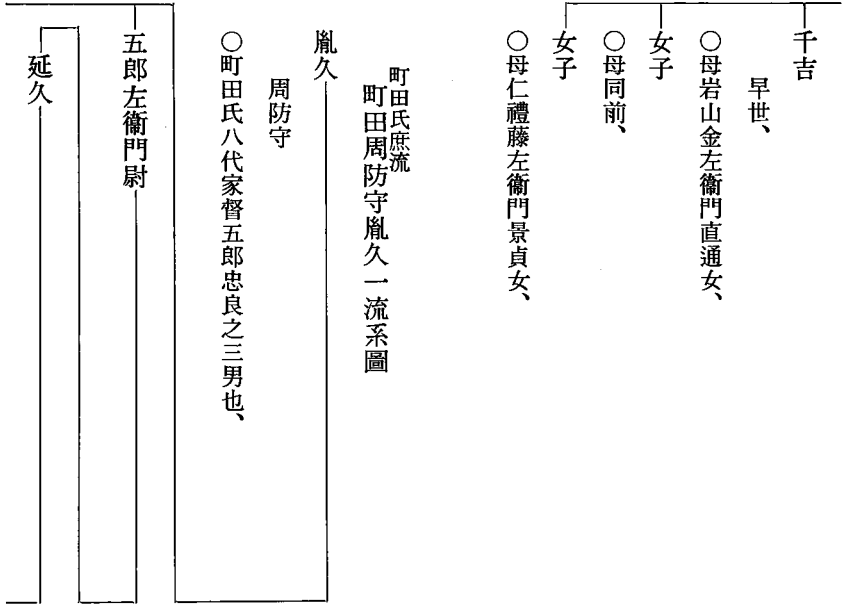
俊陽

千次郎

○元祿十四年辛巳二月八日誕生、母妾、



町田氏



阿波守

女子

久充

阿波守

久治

源左衛門尉

久成

淡路守

久棟

周防介

久胤

周防介

忠元

安房守

忠綱

織部祐

○隅州申良之士也、

○四月二十三日病死年號不傳、法名喜雲宗良居士、

忠玄

新介

○天正六年戊寅誕生、母隅州末吉土東郷伊豫女也、

○慶長四年己亥六月二十四日、於莊内山田城戰死、

年二十二、法名英岩樹雄居士、

忠直

新五郎 安房介

○天正十六年戊子七月十五日誕生、母同前、

○兄忠玄戰死、故忠直相統當家、

<p>○寛文元年辛丑六月二日死、法名繁翁休昌居士、</p> <p>女子</p> <p>日州志布志士日高源左衛門妻、</p> <p>女子</p> <p>隅州末吉士本山分右衛門妻、</p>	<p>忠晴</p> <p>長萬 織部</p> <p>○寛永五年戊辰九月二十日誕生、母申良士東丹後女、</p> <p>○元禄八年乙亥四月十日死、法名相猷大圓居士、</p> <p>女子</p> <p>日州松山士早川郷左衛門妻、</p> <p>女子</p> <p>申良士平岡權兵衛義重妻、</p>	<p>久紀</p> <p>長萬 次郎右衛門 平内</p>
--	---	------------------------------

<p>○明曆三年丁酉九月六日誕生、母申良士小野田土佐女、</p> <p>○貞享三年丙寅十二月十五日死、法名豪林良英、</p> <p>女子</p> <p>申良士平岡傳兵衛義治妻、</p> <p>○母同前、</p>	<p>俊常</p> <p>初久名 長萬 新八</p> <p>○延寶三年乙卯四月十一日誕生、母申良士平山宗仙正武女、</p> <p>○正徳三年癸巳四月、此家實名相避於久忠字、以俊字宜為實名字、家嫡郷九郎久儔受 命傳焉、故改</p> <p>俊字、</p> <p>女子</p> <p>日州大崎士小野四郎右衛門家通妻、</p> <p>○母同前、</p>
---	--

安俊

初久供 平七 休兵衛

○貞享四年丁卯正月五日誕生、母同前、

女子

○母申良士若松四郎右衛門長堯女、

俊

長萬

○正徳三年癸巳五月六日誕生、母隅州高隈士久保市

右衛門之盛女、

忠光

町田氏庶流

町田三郎五郎忠光一流系圖

三郎五郎

○町田氏十一代家督出羽守高久之三男也、

忠儀

三郎五郎

忠親

左京亮 八郎左衛門尉

○文明八年丙申誕生、

○天文五年丙申十二月七日、於薩州伊集院石谷戰死、  
年六十一、法名淵已宗源上座、

永福寺

三郎右衛門尉

○天文五年丙申十二月七日、與兄忠親俱戰死于石

谷、

忠房

源三郎 左京亮

忠右

三郎次郎 主馬助 備後守

忠貞

三郎次郎 大炊助 藤右衛門

大仙坊

山伏也、

○為薩州伊作士町田助次郎久次之後嗣、

忠次

三郎四郎 早世、

忠堯

才兵衛

○兄早世、以故忠堯嗣焉、

忠辰

三右衛門

○元和六年庚申誕生、母薩州伊作士月野平兵衛女

也、

○延寶八年庚申閏八月二十三日死、年六十一、法

名樹山常慶居士、

忠繼

正右衛門

○母同前、

○為薩州市來土岩重木工之丞之養子、

忠次

小平次

○寛永九年壬申八月二日誕生、母同前、

○寶永四年丁亥十月朔日死、法名遊山常閑居士、

女子

伊地知太郎右衛門重待妻、

○母町田郷九郎久儔家臣川野源八通常女也、

權左衛門

○母同前、

○為竹廻藤右衛門武次之後嗣、

俊明

初忠道 小兵衛 才右衛門

○寛文十一年辛亥九月九日誕生、母同前、

俊博

才次郎

○寶永三年甲申四月二十二日誕生、母臺所附隈元

宇兵衛女也、

女子

○母興國寺門前者松山六左衛門重孟女也、

女子

稅所次兵衛篤義妻、

○母二木林太夫女也、

忠周

伊十郎 市兵衛 三郎兵衛

○正保四年丁亥十二月二十四日誕生、母同前、

○延寶八年庚申七月九日死、年三十四、法名慶芳

理圓上座、

忠近

權之助 藤右衛門

○母同前、

○為野村弥三郎國綱之後嗣、

俊純

初忠盈 藤左衛門

○寛文三年癸卯十一月二十一日誕生、母同前、

○正德三年冬、家嫡郷九郎久儔依令傳曰、俊純家

衰勤履足輕之際、避町田氏以梅本可為稱號、自

今以往至勤士職之時、可從其時宜矣、

俊方

初忠養 三五郎 三右衛門 才庵

○寛文十三年癸丑四月十七日誕生、母薩州東郷士

宇多左衛門貞栄女也、

女子

○母同前、

○先嫁薩州伊作土竹下郷兵衛常清、後為顯川清右

衛門龍住妻、

女子

川上平右衛門親央妻、

○母伊藤才仙祐全女也、

俊村

初忠暁 龜之丞 喜之助

○元禄十四年辛巳八月十六日誕生、母同前、

俊房

才之丞

○寶永二年乙酉六月二十四日誕生、母同前、

女子

○母同前、

久吉

新五郎 新左衛門 丹後守

○補隅州菱刈郡市山之地頭職、

○天正十七年己丑五月十日死、法號滿室大圓居士、

守寶

江月寺住持、

忠英

十郎左衛門

○於薩州吉田戰死、

如意坊

山伏、

賞悅

浄土宗、

久興

神五郎 弥兵衛

○承應三年甲午八月九日死、法名光雲清文庵主、

久次

助次郎

○戰死於高麗、

女子

大仙坊妻、

大仙坊

○助次郎久次戰死於朝鮮國、而後無嗣子、故嫁

久次之妹為後嗣、實町田主馬助久右之二男也、

○薩州伊作士也、

○正保三年丙戌六月十五日死、法名大仙法印、

男子

早世、

男子

早世、

久治

長兵衛

○大仙房男子二人早世、故為後嗣、實同所土松

田權右衛門之二男也、其後久治辭去當家、

久能

新兵衛

○正保三年丙戌十一月二十五日誕生、母同所土

田尻内匠祐重女也、

○久治辭當家、故為後嗣、實同所土田邊四郎左

衛門為從之男也、

○元祿十四年辛巳六月十九日死、法名祥林芳瑞

居士、

俊名

初久重 源之助 十郎兵衛

○寛文十二年壬子十一月七日誕生、母同所土山



之内勝兵衛時綱女、

俊西

初久喜 孫三郎 孫左衛門

○延寶七年己未三月朔日誕生、母同前、

俊喜

初久利 新五左衛門

○貞享三年丙寅七月二日誕生、母同前、

女子

○母同前、

俊米

源七

○元祿十四年辛巳十二月十四日誕生、母同所土

玉利民部左衛門重貞女、

俊息

十兵衛

○寶永六年己丑正月一日誕生、母同前、

俊餅

十助

○元祿十六年癸未二月五日誕生、母同所土川野主

兵衛女、

俊盈

新七兵衛

○寶永三年丙戌十二月二十八日誕生、母同前、

女子

○母同前、

久榮

弥兵衛 早世、

女子

川上彦左衛門久秀妻、

女子

相良助太夫頼常妻、

忠貞

甚五郎 甚左衛門

○慶長十七年壬子誕生、母曾木甚右門重正女、

○延寶五年丁巳正月十二日死、年六十六、法名大

翁陽石居士、

女子

女子

奈良原清左衛門源長妻、

○母鹿島郷兵衛國途女、

久隆

千菊 弥兵衛

○寶永十八年辛巳五月三日誕生、母同前、

○元祿十三年庚辰四月二十七日死、年六十、法名

福庵玄海居士、

女子

吉田傳右衛門清方妻、

○母同前、

俊伯

初久伯 萬龜 休右衛門 甚兵衛

○慶安四年辛卯六月二十四日誕生、母同前、

○為町田休右衛門久延之養子、

女子

○母阿多仲右衛門忠充女、

○初嫁菱刈仲藏重宜生二女、而後為菱刈次郎兵衛重

興妻、

忠次

千菊 甚平

○寛文十一年辛亥四月二十四日誕生、母同前、

○貞亮五年戊辰八月二十日死、年十八、法名即傳俊

覚居士、

久當

甚五郎 甚左衛門

○延寶五年丁巳四月四日誕生、母同前、

○元祿五年壬申十月三日死、年十六、法名英岩全雄居士、

俊員

初忠員 弥次郎 甚左衛門 平覚

○元祿五年壬申四月二日誕生、母島津將監久當家臣

河野治左衛門通春女、

○兄二人早世、故相統父久隆之後、

○此家至初及家督等之時、拜謁于 太守公、則奉獻

御太刀、且勤小番、是家格也、

三郎五郎

○天文六年丁酉誕生、

○弘治元年乙卯四月朔日、於隅州帖佐岩劔城戰死、

年十九、法名玉室善珍居士、

忠繼

新五郎 新左衛門

○天文八年己亥誕生、

○兄三郎五郎戰死、故忠繼連續當家、

○永祿十年丁卯十一月二十四日、於隅州馬越城戰死、年二十九、法名康心祐泰居士、

久泰

仙翁

○寛永六年己巳二月九日死、法名忍山仙翁上座、

久寛

仙隆

○慶長十二年丁未誕生、母妾、

○慶安元年戊子八月三日死、法名一峯玄清居士、

俊武

初久苞 初次 仙隆 仙阿弥 又仙隆

○寛永十七年庚辰二月四日誕生、母竹之下内藏丞女、

女子

俊房妻、

○母坂元吉右衛門純直女、

俊房

初盛辰 久明 長松 市右衛門 甚左衛門

善助

○寛文三年癸卯八月八日誕生、母野村宗兵衛女、

○俊武依無男子為智養子、實坂元徳右衛門盛昌之

二男也、

俊方

初久門 助千代 正左衛門

○元禄六年癸酉十一月十日誕生、母俊武女、

女子

○母同前、

女子

○母同前、

俊

長亀

○寶永三年丙戌七月二十五日誕生、母同前、

久直

初久泰 三郎五郎 新左衛門

○弘治二年丙辰誕生、

○元和二年丙辰十一月二十一日死、年六十一、法名

桃岩秀見居士、

女子

女子

町田圖書久幸室、

○母木脇刑部左衛門祐昌女、

久守

初久時 三郎五郎 甚兵衛

○母同前、

○補隅州肝屬郡田代地頭職、

○寛永十年癸酉五月十三日死、法名光室宗瑞居士、

女子

菱刈休兵衛隆豊妻、

○母同前、

忠利

源左衛門

○母同前、

○為阿多源左衛門忠俊之後嗣、

女子

鹿島郷兵衛國途妻、

久延

新左衛門 休右衛門

○母高崎大炊助能廣女、

○補隅州肝屬郡田代之地頭職、

○萬治二年己亥五月二日死、法名心安林中居士、

女子

東郷十左衛門重仍妻、

○母同前、

女子

汾陽正右衛門光昌妻、

○母同前、

女子

○母同前、

○先嫁伊東佐兵衛祐守生一女離別、而後為汾陽正右

衛門光昌後之妻、

久次

新左衛門

○母兒玉筑後利昌女、

○正保二年乙酉二月九日早世、法名臨嶽了機上座、

俊伯

初久伯 萬龜 休右衛門 甚兵衛

○慶安四年辛卯六月二十四日誕生、母鹿島郷兵衛國

途女、

○久延之二子久次早世而無嗣子、故為養子、實町田

甚左衛門忠貞之二男也、

俊春

初久澄 萬龜 甚五右衛門

○元祿九年丙子十一月二十二日誕生、母浦生十郎兵

衛清賢女、

○俊春者俊伯之嫡孫也、父休右衛門久重於武州江戸、

殺害同役若松彦兵衛久龜、此其失禮大咎也、於是、

正徳三年四月、家嫡郷九郎久備受 命告曰、於父

久重、依咎被削除世系、至俊春貶家格新樹家、系

祖先如元、故寝太刀獻中紙、且勤大番矣、

○正徳三年四月、當家之實名避 御家字、以俊字宜

為實名字、家嫡郷九郎久備受 命傳之、故改俊字、

庶族僉然焉、

町田氏庶流

町田因幡守忠成一 一流系圖

忠成

三郎四郎 民部左衛門尉 因幡守

○町田氏十四代家督伊賀守梅久之二男也、

○依 太守貴久公之高命、為島津右馬頭忠將之家老、

○永祿四年辛酉七月十二日、於隅州廻竹原山戰死、

忠秀

二郎四郎 兵部少輔 因幡守

忠資

三郎四郎 刑部少輔 助右衛門

○蒙 龍伯公之嚴命移居于隅州國分、子孫為國分之

士、

忠重

阿波助

○家嫡町田出羽守久倍為薩州大口地頭時、忠重相  
属而移居大口、其後從家嫡圖書久辛勤與力、而  
後為家臣、子孫僉然、

○寛永九年壬申五月二十五日死、法名實山良英禪  
定門、

久秀

少次郎 木工之助

○移居隅州溝邊、子孫為溝邊之士、

女子

忠知妻、

忠知

九兵衛

○久秀無男子、故為智養子、實隅州湯之尾土獅  
子野權左衛門之嫡子也、

○寛文七年丁未七月十七日死、法名梧山全桐居

士、

俊從

初忠致 傳兵衛

○寛永五年戊辰七月八日誕生、母久秀女、

女子

隅州國分土市来宗右衛門家喜妻、

○母隅州蒲生土山田弥兵衛女、

忠質

新兵衛

○明曆二年丙申十月七日誕生、母同前、

○正徳三年癸巳正月四日死、法名香雲理清居士、

女子

溝邊土岩本佐太夫篤政妻、

○母同前、

俊淨

初忠置 萬兵衛 溝邊士、

○寛文五年乙巳六月二十六日誕生、母同前、

女子

溝邊士宗方伊左衛門秀信妻、

○母同前、

女子

隅州蒲生士久保武兵衛昌洗妻、

○母同前、

女子

○母三原諸右衛門家巨坂本勘右衛門女、

俊在

勘之丞

○寶永四年丁亥八月二十七日誕生、母同前、

俊省

木工次郎

○寶永七年庚寅八月十七日誕生、母同前、

俊財

九兵衛

○天和二年壬戌正月二十八日誕生、母島津兵庫

久住家臣鳴海十兵衛女、

女子

○母同前、

俊自

傳之丞

○元祿八年乙亥三月二十六日誕生、母同前、

女子

○母溝邊士藺田助左衛門長珍女、

俊全

傳八

○寶永五年戊子九月四日誕生、母同前、



俊實

休次郎

○正徳元年辛卯七月三日誕生、母同前、

忠宗

助四郎 掃部

○延寶二年甲寅正月二十三日死、法名昌岩清久居

士、

忠行

仲次郎

○寛永元年甲子二月九日、於江戸死、法名春溪隣

芳居士、

女子

薩州樋脇士大井十右衛門實廣妻、

○母薩州郡山士久保田利右衛門女、

俊房

初久長 清六 掃部

○寛永十五年戊寅十二月四日誕生、母同前、

女子

樋脇士溝邊仲之丞重路妻、

女子

島津内記久貫家臣和田善右衛門義知妻、

○母町田出羽忠尙家臣益滿外記永治女、

俊賢

初忠致 十兵衛 十郎右衛門

○寛文五年乙巳十一月二十八日誕生、母同前、

○正徳三年冬、家嫡郷九郎久儔依令告曰、於俊賢

家者、自以前隨臣于家嫡、以是嫡子代代可冒町

田之稱號、於二男以下不許焉、以梅本可為稱號、

若雖為俊賢之嫡子、仕于他家則可避町田氏、

俊政

初久重 次兵衛 佐左衛門

○延寶元年癸丑十一月十六日誕生、母同前、

○島津内記久貫家臣也、

○依令避町田氏號梅本、

忠次

清八 早世、

○母町田郷九郎久儔家臣山本兵右衛門重治女、

俊方

五郎八 市郎右衛門

○元祿十六年癸未十二月二十七日誕生、母同前、

忠歳

甲斐

○慶安三年庚寅四月五日死、法名天山道一庵主、

女子

隅州福山土永吉伴右衛門妻、

○母隅州國分土町田權右衛門女也、

久矩

刑部

○母同前、

○元祿十六年癸未九月二十四日死、法名源清道高居

士、

女子

國分士加世田市郎兵衛頼益妻、

○母福山土久富長左衛門女、

俊建

初久建 助十郎 助右衛門

○寛文五年乙巳十一月八日誕生、母同前、

○正徳三年四月、當家之實名避御家字、以俊字可為

實名字、家嫡郷九郎久儔受 命傳之、故改俊字、

庶族同之、

女子

國分士竹廻三右衛門武義妻、

○母同前、

女子

○母島津主水久輔家臣川添勘解由兵衛女、

俊

助太郎

○元祿十年丁丑正月二日誕生、母同前、

町田氏庶流

町田新左衛門久滿一流系圖

久滿

新左衛門尉

○永祿六年癸亥六月朔日誕生、

○町田因幡守忠成者、町田氏十四代家督伊賀守梅久

之二男也、奉 太守貴久公之高命、為島津右馬頭

忠將之家老、時永祿四年七月十二日、忠將於隅州

廻竹原山、結子路之纓、忠成亦隨之戰死、忠成之

子孫嫡嫡相統奉仕于 太守公、而雖在隅州國府、

忠成戰死之後、右馬頭忠興自令新左衛門久滿、號

忠成之躡、樹家於佐土原、依茲久滿者、為忠成家

之二男者也、子孫延為島津淡路守惟久家臣、而住

于日州佐土原、

○正保二年乙酉九月十日死、享年八十三、法名蘭香

全芳居士、

久房

源之允

○慶長十四年己酉六月十五日誕生、母迫田九郎左衛

門尉女、

○延寶三年乙卯閏四月十一日死、享年六十七、法名

家山式仙居士、

久高

金千代丸 刑部左衛門

○寛永十九年壬午十月二十日誕生、渡師久内正盛女、

○寶永元年甲申五月二十九日死、享年六十三、法名

徳岩良本信士、

博親

初久清 亀次郎 新左衛門

○慶安四年辛卯十二月二十八日誕生、母同、

博舊

亀太郎 新之允

○元禄元年戊辰三月二十四日誕生、母長嶺千左衛

門道國女、

女子

立山楚兵衛妻、

久武

千代丸 源左衛門

○延寶二年甲寅二月二十四日誕生、母押川宇右衛門

速方女、

○元禄十三年庚辰七月二十六日死、享年二十七、法

名碧雲源潭信士、

房明

初久博 新吉 源太左衛門

○貞享元年甲子十一月十五日誕生、母同、

○正徳三年惟久應 太守吉貴公之高命令曰、於久博

家者、避久忠兩字、摘其先祖所用之字、宜為實名

之字、故改房明、庶族亦同之、

房

源太郎

○寶永三年丙戌四月四日誕生、母向井次郎兵衛正春

女、

女子

○母同前、

町田氏庶流  
町田周防守忠房一流系圖

忠房

中務少輔 周防守

○大永七年丁亥誕生、

○町田氏十五代家督長門守忠榮之二男也、

○蒙 太守貴久公之高命、為島津右馬頭征久之家老、依之子孫皆為彼家臣、

○慶長十五年庚戌十月十六日死、年八十四、法名香

山良徳、

忠堯

傳右衛門 周防

○弘治三年丁巳誕生、母垂水臣蘭牟田監物秀重女也、

○元和三年丁巳六月十九日死、年六十一、法名長運

壽伯、

忠秀

八郎左衛門

○永祿五年壬戌誕生、母同前、

○連続垂水臣町田軍四郎忠次之後、

女子

初嫁垂水臣伊集院吉左衛門久教、後離別為同臣

川上出羽忠貞妻、

○母同前、

忠照

太郎右衛門 助兵衛 勘左衛門

○天正四年丙子誕生、母垂水臣川上宮内忠光女也、

○元和九年癸亥六月三日死、年四十八、法名雲峯宗

朝、

忠長

平左衛門

○天正八年庚辰誕生、母同前、

○此子孫垂水之臣也、

○寛永十九年壬午十二月十二日死、年六十三、法名隆雲全昌、

忠常

覺左衛門

○天正十七年己丑誕生、母同前、

○同家臣也、

○明曆二年丙申四月十三日死、年六十九、法名

喜山良慶、

忠尙

半右衛門

○慶長七年壬寅誕生、母同前、

○同家臣也、

○寛文九年己酉六月二十日死、年六十八、法

名寛山良祐、

久章

傳右衛門

○元和八年壬戌誕生、母同家臣徳田大助豊盛女也、

○為同家臣伯父町田覺左衛門忠常之養子、

忠相

八左衛門

○寛永三年丙寅誕生、母同前、

○元禄十年丁丑七月二十五日死、年七十二、

法名雲岳宗祥、

女子

同家臣川上平左衛門忠貞妻、

○母同前、

俊種

初久和 六郎右衛門

○寛文二年壬寅十月七日誕生、母同家臣川崎

藤兵衛良住女也、

○忠相依無男子為智養子、實同家臣町田傳右

衛門久章二男也、

○此一流依令避町田氏號梅本、

女子

俊種妻、

○母同家臣高野右近兵衛重堅女也、

女子

○母祖父忠相女也、

俊榮

半右衛門

○元祿八年乙亥十月十三日誕生、母同前、

女子

同家臣伊集院十左衛門忠行妻、

○母日州佐土原土科木工右衛門利清女也、

久章

傳右衛門

○元和八年壬戌誕生、母同家臣德田大助豐盛女也、

○忠常依無男子為養子、實同家臣町田半右衛門忠尚之嫡子也、

○元祿九年丙子正月十三日死、年七十五、法名喚松龜三、

俊益

初久精 覚左衛門

○明曆二年丙申九月二十日誕生、母同家臣川崎

藤兵衛良住女也、

○此一流依令避町田氏號梅本、

俊種

初久和 六郎右衛門

○寛文二年壬寅十月七日誕生、母同前、

○為同家臣町田八左衛門忠相之養子、

俊商

初忠屋 茂平次 五郎右衛門

○貞享元年甲子八月十四日誕生、母同家臣伊集院半左衛門久代女也、

忠寧

太郎兵衛

○慶長十一年丙午誕生、母同家臣有馬宮内女也、

○延寶六年戊午七月七日死、年七十三、法名梅翁正養、

久宣

五左衛門

○慶長十五年庚戌誕生、母同前、

○延寶六年戊午九月二十四日死、年五十七、法名月峯宗皎、

久豐

覚右衛門

○元和五年己未誕生、母同前、

○元祿十三年庚辰六月十六日死、年八十二、法名月(ツキ)昌心、

女子

同家臣川上大炊忠精妻、

○母同家臣上田勘解由篤信女也、

久英

次左衛門 清左衛門

○正保四年丁亥四月三日誕生、母同前、

○元祿十五年壬午正月二十六日死、年五十六、法名興山雲陽、

俊度

初久度 源五左衛門 作右衛門

○承應三年甲午三月十八日誕生、母同前、

○此家依令避町田氏號梅本、



俊

仲次郎

○元禄六年癸酉十二月十八日誕生、母同家臣  
中原正翁院重慶女也、

女子

○母同前、

女子

鹿兒島土吉井七左衛門妻、

○母同家臣厚地仁左衛門政盛女也、

俊鑑

初久渥 長次郎 八郎右衛門

○延寶七年己未六月五日誕生、母同前、

○此一流依令避町田氏號梅本、

女子

○母同家臣田代兵部左衛門持清女也、

俊

平三郎

○寶永六年己丑三月三日誕生、母同前、

女子

同家臣高野市左衛門重昌妻、

○母鹿兒島土大井正鐵女也、

女子

同家臣海老原諸兵衛為清妻、

○母同前、

俊尙

初忠為 三五郎 刑部左衛門 長右衛門

○正保四年丁亥九月六日誕生、母同前、

○此一流依令避町田氏號梅本、

俊春

初忠俊 三次郎 五左衛門

○天和二年壬戌九月十九日誕生、母同家臣蘭牟田大炊兵衛重常女也、

俊晴

初久清 平左衛門

○寛永十二年乙亥七月二十六日誕生、母鹿兒島士

野村但馬辰綱女也、

○此一流依令避町田氏號梅本、

兼利

初久廣 源十郎 藤右衛門

○寛永十五年戊寅十二月四日誕生、母同前、

○為同家臣橋口彦兵衛兼有之養子、

俊充

初忠通 式部左衛門 武右衛門

○寛文三年癸卯八月二十四日誕生、母隅州國分士

福永佐左衛門祐共女、

○俊晴依無男子為智養子、實同家臣町田監物久常之二男也、

女子

俊充妻、

○母同家臣和泉小兵衛忠親女也、

女子

鹿兒島士野村吉兵衛高房妻、

○母同前、

久次

彦九郎

○元禄六年癸酉誕生、母祖父俊晴女也、

○正徳二年壬辰五月十日早世、法名関機一跳、

俊次

長吉

○元禄十三年庚辰十二月二十五日誕生、母同前、

忠清

太郎右衛門 監物 勘左衛門

○慶長二年丁酉十二月二十五日誕生、母日州佐土原  
士相良来祐院女也、

○寛文十三年癸丑三月二十一日死、年七十七、法名  
天桂正運、

忠朝

七郎兵衛

○慶長七年壬寅誕生、母同前、

○此子孫垂水之家臣也、

○寛文九年己酉九月十四日死、年六十八、法名心  
路正安、

久明

次郎兵衛

○慶長十四年己酉八月朔日誕生、母同前、

○為同家臣町田八郎左衛門忠秀之養子、

女子

同家臣野口孝左衛門直武妻、

○母同前、

久住

弥次右衛門

○寛永四年丁卯誕生、母國分土豎山丹後女也、

○延寶八年庚申十二月十三日死、年五十四、法名

松雲浦竹、

俊尊

初久林 千右衛門 源太兵衛 太兵衛

○寛永十年癸酉誕生、母同前、

○此一流依令避町田氏號梅本、

俊恒

初忠為 仲之丞 七郎兵衛

○寛文三年癸卯十一月二十八日誕生、母同家臣

伊集院藤左衛門忠盈女也、

女子

同家臣川上八郎兵衛忠為妻、

○母同前、

俊政

初久雅 荒五郎 権五右衛門

○延寶三年乙卯十月二十七日誕生、母同前、

俊哉

荒五郎 瀧兵衛

○元禄十二年己卯六月五日誕生、母同家臣伊集

院藤左衛門俊映女也、

女子

同家臣町田弥左衛門妻、

○母同家臣田中五左衛門綱實女也、

俊信

初忠知 五市郎

○元禄九年丙子七月二日誕生、母同前、

俊盈

初久解 弥次兵衛

○明曆二年丙申誕生、母同家臣川南休右衛門兼明女也、

○此一流依令避町田氏號梅本、

兼好

初久休 孫七

○寛文三年癸卯五月三日誕生、母同前、

○為同家臣川南弥五左衛門兼康之養子、

女子

島津市太夫久雄家臣安楽太郎右衛門兼達妻、

○母同家臣山下仲右衛門清成女也、

俊副

初忠雄 弥十郎 宗壽

○貞享二年乙丑正月十三日誕生、母同前、

久常

太郎右衛門 監物

○元和五年己未六月五日誕生、母鹿兒島土三原七左衛門女也、

○延寶二年甲寅六月二十八日死、年五十六、法名隆

山良盛、

女子

同家臣川上市兵衛久清妻、

○母同前、

久寛

源四郎 次郎右衛門

○寛永十二年乙亥正月二十二日誕生、母同前、

○此子孫垂水之家臣也、

○元禄四年辛未四月二十二日死、年五十七、法名月堂浄心、

俊勝

初久建 助八 仲納右衛門 次郎右衛門

○寛文六年丙午三月十七日誕生、母同家臣樺山藏

右衛門忠誠女也、

○此一流依令避町田氏號梅本、

俊展

初久氏 源助 六左衛門 八兵衛

○寛文十二年壬子十月十日誕生、母同前、

○此一流依令避町田氏號梅本、

久敬

源四郎 茂右衛門

○延寶七年己未三月十六日誕生、母同前、

○為同家臣八木善助信令之養子、

俊平

源五

○元禄十六年癸未四月三日誕生、母同家臣中条六右衛門義征女也、

俊助

初忠則 助八 納右衛門

○元禄四年辛未八月十一日誕生、母同家臣蘭牟田清右衛門重相女也、

俊

仲九郎

○元禄十二年己卯十月十三日誕生、母同前、

女子

隅州國分士鎌田新右衛門政武妻、

○母鹿兒島黒田用右衛門女也、

忠顯

太郎右衛門 勘左衛門 監物 五郎左衛門 助兵衛

○萬治元年戊戌十二月二十九日誕生、母隅州國分士福永佐左衛門祐共女也、

俊充

初忠通 源四郎 式部左衛門 武右衛門

○寛文三年癸卯八月二十四日誕生、母同前、

○為同家臣梅本平左衛門俊晴之養子、

俊熙

初忠熙 源六 傳右衛門

○寛文八年戊申六月二十二日誕生、母同前、島津小源太(ト)家臣也、

○此一流依令避町田氏號梅本、

俊教

初忠喜 正大夫 傳兵衛  
○元禄七年甲戌六月二十日誕生、母垂水臣安山次郎

左衛門親征女也、

女子

○母同前、

俊方

初忠成 又俊房 五郎次郎 源五右衛門 勘左

衛門 與市右衛門

○貞享二年乙丑三月朔日誕生、母鹿兒島加世田弥五

左衛門景延女、

○正徳三年四月、當家之實名避久忠字、以俊字可為

實名字、家嫡郷九郎久儔受 命傳之、故改俊字、

庶族皆然、

○同年冬、此家 太守貴久公所附属右馬頭征久、仍

嫡子代代冒町田之稱號、於二男以下之家者、以梅

本宜為稱號、家嫡郷九郎久儔受 命傳之、故庶族

皆改梅本、

久教

源七 休兵衛

○貞享四年丁卯正月十一日誕生、母同前、

○為鹿兒島加世田諸兵衛景但之養子、

女子

鹿兒島伊集院小十郎(A)妻、

○母同前、

町田氏庶流

町田助三郎一流系圖

助三郎

○大永二年壬午四月二十八日、於薩州伊集院誕生、

○町田氏十五代家督長門守忠榮之三男也、

○慶長六年辛丑五月十八日死、

忠實

藤十郎 右近將監 越後守 入道名月岑、

○享祿元年戊子誕生于薩州伊集院、

○助三郎無實子、故為養子、實助三郎之弟也、

○慶長十四年己酉十一月二日死、法名意清宗香居士、

久武

藤十郎 右近將監

○永祿五年壬戌誕生、母稅所弥右衛門姉也、

○寬永十三年癸酉十二月九日死、法名元仲守榮居士、

久利

長千代 藤十郎 喜左衛門

○慶長十五年庚戌十一月一日誕生、母山口氏女、

○元祿十年丁丑三月二十七日死、法名了盛元智居士、

久近

長千代 助右衛門 勝右衛門

○寬永十一年甲戌十一月三日誕生、母窪田利右衛門

盛長女、

○寬文四年甲辰三月十一日死、法名實相無山居士、

久貞

藤次郎 勘兵衛

○寬永十六年己卯八月六日誕生、母同前、

○貞享元年甲子四月十日死、法名祖天龍心居士、

俊滿

初忠箸 熊助 源右衛門

○寬永二十年癸未十月十八日誕生、母同前、

忠參

源五郎 喜右衛門

○延寶二年甲寅十月二日誕生、母伊集院土前田

慶左衛門國房女、

○寶永七年庚寅三月二十七日死、法名花山昌英

居士、

俊精

助次郎



○天和三年癸亥七月誕生、母同前、

俊

源五郎

○寶永二年乙酉二月十日誕生、母伊集院士四本龍  
右衛門女、

女子

柏木甚兵衛家長妻、

○母薩州市来士大迫佐左衛門女、

俊武

初久里 字左衛門 次郎左衛門

○延寶三年乙卯九月二十七日誕生、母同前、

久行

少左衛門 納右衛門 ○母同前、

○寶永元年甲申八月八日死、法名淨秋月心信士、

順峯

俊昌

初忠許 中久輔 源兵衛 勘七 五郎左衛門

○寛文二年壬寅九月三日誕生、母肝付彦兵衛兼供女、

○正徳三年四月、此家相避於久忠字、以俊字宜為實  
名字、家嫡郷九郎久儔受 命傳焉、故改俊字、

女子

大田八郎兵衛妻、

○母隅州馬越士武木工左衛門重宣女、

俊辰

藤十郎

○寶永元年甲申十一月十二日誕生、母同前、

俊房

藤八

○寶永七年庚寅正月二十三日誕生、母同前、

光宗

自得 七郎左衛門尉

○初為浮屠氏稱自得、出鄉留滯于紀伊國、后還俗號

七郎左衛門尉光宗、

光秋

○光秋代歸于薩州、時擔負於大明神、來而為氏神、

伊集院氏以免許、奉崇飯牟禮嶽、以飯牟禮為家號、

而后遷同所野田名、

光昌

對馬守

光弘

七郎兵衛尉

光時

三郎兵衛尉

光冬

七郎

光貞

對馬守

光吉

太郎右衛門尉

彈右衛門尉

光成

九郎兵衛尉

光政

忠辰

初光秀 權右衛門尉 薙髮名道意、

○嘗奉仕于 義久公之御女家久公御籙中、住隅州國府、也、稱國府

○自元祖光宗至忠辰、代代雖冒飯牟禮氏、本出自町

田氏故、蒙 太守家久公之恩免、為町田氏、

○寬永七年庚午、携妻子去國府、移居于鹿兒島、

○同十三年丙子六月九日死、法名照山常眞居士、

忠繼

勝次郎 掃部助

○寬永二十年癸未、奉 命最上善次郎相共渡指八重

山島、監諸般白濱平次郎・岩崎主水、山下慶左衛門等從于忠繼、雖然不竟任、

正保二年乙酉六月十一日、於于彼島死、享年四十

五、法名月松守・心居士、

忠清

權八 權右衛門

○母白濱角左衛門重政女、

○寬文五年乙巳三月二十四日死、享年三十七、法名 瑚月清珊居士、

忠政

乙千代 嘉右衛門

○母同前、

○貞享五年即元祿元戊辰六月四日死、享年五十七、法

名永学仙翁居士、

女子

家村弥左衛門住重妻、

○母同前、

忠陽

初忠英 長千代 長兵衛 弥市右衛門

○寬文二年壬寅九月二十二日誕生、母町田孝左衛

門家臣山田土佐女、

○忠政無子故為養子、實町田勘解由忠代妾腹之子也、

○寶永元年甲申八月二十三日死、享年四十三、法名自得院一超宗心居士、

俊能

初忠仲 權六 長兵衛

○忠陽無子死、故為後嗣、實町田權右衛門俊意二男也、

○此家嫡子代代勤小番、是家格也、

女子

城井甚左衛門友次妻、

○母辻孫左衛門女、

俊意

初忠奧 鶴千代 權右衛門

○萬治三年庚子二月二十五日誕生、母同前、

○正徳三年癸巳四月九日、家嫡郷九郎久儔受命傳之曰、自今以後於忠奧家者、避久忠之兩字、以俊

字宜為實名字、以故改俊意、

○此家嫡子代代勤小番、是家格也、

正盈

初忠依 勝次郎 勝右衛門 吉右衛門

○為津留休右衛門之後嗣、

俊陽

初忠香 權八 權兵衛

○貞享三年丙寅二月二十一日誕生、母田中三左衛門

國寬女、

女子

田村壽孝之春妻、

○母同前、

女子

本田六郎次親房妻、

○母同前、

俊能

町田氏

權六

○元祿十二年己卯四月九日誕生、母同前、

○為同氏弥市右衛門忠陽之後嗣、

光宗

七郎左衛門

○初薙髮為浮屠氏號自得、後還俗而號飯牟禮、

光昌

對馬守

光弘

七郎兵衛尉

光時

三郎兵衛尉

光冬

七郎

光貞

對馬守

女子

光義

又九郎

○於飢肥戰死、

光榮

掃部助

○於薩州市來大日寺馬場戰死、

女子

光清

彈右衛門 紀伊介

○天正十八年庚寅五月十二日死、法名法林淨眞居士、

光乘

太郎左衛門

光有

九郎兵衛

女子

女子

本田新助親為妻、

女子

女子

忠秀

初光家 善五郎 紀伊介

○忠秀初雖為飯牟禮氏、因 太守家久公之嚴命冒町

田氏、

○寛永八年辛未十月二十一日死、法名實參淋貞居士、

快性

大乘院九代住持、

女子

忠次

五右衛門

○母祖父光清女也、

○忠秀依無男子為養子、實本田新助親為之嫡子也、

○寛永十九年壬子七月十二日死、法名通岩了圓居士、

忠弘

善五郎 七郎左衛門

○元和四年戊午九月七日誕生、

○延寶九年辛酉二月晦日死、法名儼等了然居士、

女子

○母本田木工之助親盛女也、

○新納佐左衛門忠頼二男源五郎久州為忠弘養子、

故雖嫁久州不幸而早世、久州亦辭去、

俊堅

初忠知 源五左衛門

○慶安二年己丑七月十四日誕生、母隅州帖佐土酒匂

新右衛門女、

○忠弘依無男子為養子、實隅州帖佐土時任清左衛門

秀茂之嫡子也、

○此家避於久忠之字、以俊字宜為實名字、家嫡鄉九

郎久儔受 命傳之、仍改俊字、

○此家勤小番、

女子

早世、

○母島津兵庫久住家臣白坂萬左衛門篤徳女也、

俊喬

初忠寄 善五郎 七郎左衛門

○延寶七年己未九月十三日誕生、母同前、

忠親

源十郎

○貞享三年丙寅二月朔日誕生、母同前、

○為安岡甚右衛門利記之養子、

女子

石神六郎右衛門重元妻、 ○母同前、

孫四郎

早世、

○母同前、

俊甫

七郎五郎

○寶永七年庚寅五月二十九日誕生、母鄉田源七左衛

門兼耕女也、

右兩家元飯牟禮氏而冒町田之稱號者也、雖然論嫡

庶未辨別、以故今記別冊備于再考而已、

不知所自出

町田治右衛門一流系圖

治右衛門

○慶長年間、自隅州蒲生移薩州出水、

○法號寶山良喜居士、

久與

伊兵衛

○治右衛門之一子右衛門兵衛不繼父之跡、出離於出

水而為家嫡町田出羽守久倍之家臣、以故久與為猶

子、實出水土樺山主殿久如二男也、其後辭去而復

本氏樺山、

久友

十左衛門

○久與辭去於當家、故為養子、實出水土川上權兵衛

久秀之二男也、雖然久友亦違變當家復川上氏、

俊延

初忠房 或忠休 或忠昆 猪之助 伊兵衛

○明曆二年丙申四月十四日誕生、母出水土萩原甚助

女也、

○久與及久友雖為治右衛門之養子辭去、故忠昆又為

養子、實出水土樺山主殿久與之二男也、

○正德三年四月、當家之實名避 御家字、以俊字可

為實名字、家嫡鄉九郎久儔受 命傳之、故改俊字、

右衛門兵衛

○右衛門兵衛者雖為治右衛門之實子、出離於出水

流浪而不統父之家、以故系屬末子、

○為町田出羽守久倍之屬士、

女子

治右衛門

○為町田出羽守忠尙之家臣、



忠亮

清兵衛

○元祿十四年辛巳十月二日死、法名陽門玄昭信士、

俊長

右衛門助 清兵衛

○元祿二年己巳三月十一日誕生、母島津小源太(ママ)

家臣古川助左衛門女、

○夫隨臣于家嫡之家者、冒家嫡號之法制也、以故正

德三年之冬、此家自今以後嫡子代代冒町田氏之稱

號、二男以下當號梅本、家嫡郷九郎久儔受 令傳

之矣、

女子

出水士池松伊右衛門時豊妻、

○母同所士麦生田清兵衛忠常女也、

俊茂

初忠完 猪之助 權左衛門

○貞享元年甲子十月四日誕生、母同前、

包秀

初甚七 陽右衛門

○元祿二年己巳閏正月十四日誕生、母同前、

○為出水士小田原萬左衛門秀親之養子、

俊

牛之助

○寶永六年己丑四月十二日誕生、母出水士山田弥六

兵衛有長女也、

不知所出

町田八郎左衛門忠宗一流系圖

忠宗

八郎左衛門

○七十八歲而死、

忠清

伊豆

○八十五歲而死、

忠厚

伊豆

○弘治二年丙辰七月誕生、

○寛永十九年壬午死、年八十七、法名奇安正異上座、

女子

鹿兒島土川上日向久政妻、

忠房

主計

○天正五年丁丑正月二日誕生、

○寛永十五年戊寅十一月二十日死、年六十二、法名

桃隣曇仙上座、

女子

鹿兒島土竹之内土佐妻、

女子

鹿兒島土伊地知大炊左衛門妻、

女子

鹿兒島土津留次郎兵衛妻、

忠吉

初光房 吉左衛門

○慶長十二年丁未五月十二日誕生、

○初為飯牟禮氏之猶子、而在彼家之際生男子二人、

其後弟龜千代早世、忠房之躡將断絶、故辭飯牟禮

氏而復本家、

○延寶三年乙卯九月三日死、法名喜山常歆居士、

龜千代

早世、

女子

忠則妻、

○母鹿兒島土柏木茂助女也、

忠則

房助 宮内左衛門

○寛永元年甲子三月四日誕生、

○忠吉有一女無男子、故嫁一女而為養子、實鹿兒島

土蘭牟田主殿二男也、

○元禄元年戊辰七月十七日死、法名涼室宗清居士、

女子

○實町田市右衛門忠盈之女、忠則養之為子嫁忠菊、

忠菊

長右衛門 吉左衛門

○萬治三年庚子九月十一日誕生、母中馬清太左衛門

女也、

○忠則依無男子為養子、實鹿兒島土伊地知意仙重秀

二男也、

○元禄八年乙亥正月晦日死、法名勝空高縁居士、

女子

俊道

初忠居 勘兵衛 吉左衛門

○貞享四年丁卯十二月九日誕生、母忠則養女也、

○正德三年癸巳三月、太守吉貴公以島津帶刀仲休

降 命曰、俊道之家者、自古未有故隨侍于福昌寺、

因是、嫡子代代免許於町田之稱號、二男以下不得

為士者、避町田氏、別樹家號宜為稱號、相良權太

夫長規傳之、

○同年四月、此家之實名以俊字可為實名字、家嫡鄉

九郎久儔受 命傳之、故改俊字、

○同年八月、此家二男以下不得為士者、以梅本宜為

稱號、家嫡鄉九郎久儔傳之、

俊春

號梅本、初忠雄 長右衛門

○元祿五年壬申正月十七日誕生、母同前、

○正徳三年八月、以梅本宜為稱號、家嫡郷九郎久儔傳之、仍號梅本矣、

俊

仙次郎

○正徳三年癸巳六月十六日誕生、母島津帶刀仲休家

臣榛澤利兵衛成房女也、

町田氏庶流

町田助左衛門忠長一流系圖

忠長

助左衛門尉

○此子孫延為島津淡路守惟久之家臣住于日州佐土原、

○法名空心、

久綱

孫右衛門尉 若狹守

○元龜元年庚午二月二十八日誕生、

○元和四年戊午正月朔日死、法名春庵文甫、

久成

松右衛門尉 孫左衛門尉

○慶長八年癸卯六月二十七日誕生、

○元和四年戊午五月十六日死、法名節眞全忠、

女子

高野右衛門兵衛尉妻、

忠清

與四郎 清兵衛

○慶長四年己亥八月十八日誕生、

○正保三年丙戌十一月二十日死、法名清翁全白、

忠景

勘四郎 孫右衛門尉

○寛文七年丁未十二月十二日死、法名喜宗淨観、

女子

比多木氏妻、

久長

松右衛門 孫右衛門

○法名久屋玄昌、

女子

城之助

早世、

久直

勘四郎 弥五右衛門

○法名大譽道悟、

景林

初久任 彦之進

○延寶五年丁巳四月十日誕生、母岩切権八重方女、

○久長依無嗣子為養子、實竹井太郎左衛門滿次之子

也、

忠重

勘四郎 勝兵衛尉 清兵衛尉

○慶長十三年戊申七月七日誕生、母山下右近將監女、

○寛文元年辛丑六月十二日死、法名梅庵常笑、

忠連

莊兵衛尉 無子孫、

○法名振喝玄威、

忠敦

與四郎 清五郎 長右衛門尉

○寛永十五年戊寅五月六日誕生、母富田六郎左衛門

通有女、

○寛文四年甲辰三月二十五日死、法名辱翁元忍、

女子

久伯

兵吉 五郎右衛門 清六 與左衛門

○寛永二十年癸未六月朔日誕生、母同胞、

○寶永四年丁亥十二月十四日死、法名元休宗陳、

女子

町田弥次右衛門久置妻、

○母吉岡多左衛門女、

清縁

初久致 兵吉 弥五左衛門 孫左衛門

○延寶四年丙辰二月二十八日誕生、母同前、

○正徳三年、惟久應 太守吉貴公之高命令曰、於久

致家避久忠兩字、摘其先祖所用之字、宜為實名之

字、故改清縁、庶族同之、

女子

洪谷孫之允重識妻、

○母宇宿傳左衛門久明女、

清全

兵助

○寶永三年丙戌二月六日誕生、母同前、

清次

泉正坊

○正徳三年癸巳九月二十二日誕生、母同前、